

# 島内地下式横穴墓群Ⅳ

鹿児島大学学術調査第2次・3次、128~130号墓発掘調査報告書



2012

宮崎県えびの市教育委員会

えびの市埋蔵文化財調査報告書 第53集

# 島内地下式横穴墓群IV

鹿児島大学学術調査第2次・3次、128~130号墓発掘調査報告書

2012

宮崎県えびの市教育委員会



77号墓出土 胡簾金具

外面

內面

## 序

えびの市は、宮崎県の南西部に位置し、日向・肥後・薩摩・大隅の分岐点にあたる、南九州の要であります。北の九州山地と南の霧島山系に挟まれた狭長な盆地は河岸段丘が発達し、豊富な降雨や湧水、肥沃な氾濫原の存在により、段丘面の殆どが周知の遺跡となっております。古代の官道も通り、古くから交通や物流の要所として栄え、必然的に様々な文化や文物が混合した独特の地域であります。

本市の西部、川内川左岸の低位段丘に立地する島内地下式横穴墓群は、古墳時代後期の甲冑や蛇行剣・刀剣・鉄鎌・骨鎌といった多くの武具や武器に加え、鞘や鹿角製刀剣装具、貝釧、糞石などの有機物も良好に遺存する墳墓群として周知されている極めて重要な遺跡であります。

平成13年には、101号墓までを纏めて報告いたしておりますが、以後も断続的に陥没の通報を頂き、記録保存に勤めてまいりました。

本書は、平成22年10月に調査した128号墓と平成23年3月に調査した129号墓・同年7月に調査した130号墓のほか、平成10年度に鹿児島大学による学術調査で検出され主体部まで調査された地下式横穴墓9基について纏めていただきましたので、ここに報告致します。短甲や冑、鉄刀や鉄剣、鉄鎌、胡籠金具などの武具や武器のほか市内唯一のゴホウラ製貝釧など、貴重な遺物が出土しています。

本書が学術資料としてだけでなく、生涯学習や学校教育の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する理解と認識が深まれば幸いです。

本遺跡の調査にあたり、ご指導・ご協力頂いた諸先生方、調査に対してご理解・ご協力頂いた地権者・耕作者の諸氏、発掘作業・整理作業に従事して頂いた作業員の方々に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成24年3月

えびの市教育委員会

教育長 萩原和範

## 例　　言

1. 本書は、平成10年度に鹿児島大学が調査主体として実施した島内地下式横穴墓群第2・3次調査における76~79・87~91号墓および、本市教育委員会が平成22・23年度に緊急調査した128~130号墓の報告書である。補追として、既刊報告6件の遺物について新たな補足説明をする。
2. 学術調査分（第3・4章）において、遺構・遺物については鹿児島国際大学の大西智和教授に、人骨については鹿児島女子短期大学の竹中正巳教授に玉稿を賜り、128~130号墓の出土人骨の実測～取上～分析についても竹中教授に委託した。
3. 第3・4章については、体裁のみ整え、文言や土層名・遺構図における表記などは市報告分（第5章）と統一していない。
4. 3号墓（昭和41年調査）出土の短甲のほか、銀象嵌龍文大刀などの付着纖維について東京国立博物館の沢田むつ代特任研究員に分析していただく機会があり、玉稿をいただいたので付篇に掲載した。記して感謝申し上げます。
5. 第3・4章以外の執筆と編集は、中野が担当した。
6. 編集の都合上、写真図版の番号は章ごとに区分している。
7. 調査の関連資料や出土遺物は、えびの市歴史民俗資料館に保管・一部展示している。人骨は全て宮崎県立西都原考古博物館に保管してある。

## 凡　　例

1. 第5章において、地下式横穴墓はS Tとして略している。また、遺構実測図の標高は、G Lを0とした水平ラインを描いている。方位は、大凡である。
2. 同じく、遺構断面図の閉塞材は、斜線は石を、格子目はアカホヤ塊を示す。
3. 鉄器・鉄製品の実測図と写真は、保存処理前のものである。

## 調査組織

特別調査員 鹿児島女子短期大学 教授 竹中正巳(平成22・23年度)

調査主体	えびの市教育委員会 教育長	萩原和範
	社会教育課長	上加世田たず子
	文化係長	鶴田晃一(平成22年度)
		有村充(平成23年度)
主査	西 正利(連絡調整・事務)	(平成22年度)
主査	中野和浩	
事務吏員	小島英子	(平成23年度)

## 本文目次

第1章 はじめに.....	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境.....	2
第3章 第2次調査	
第1節 調査の経過.....	5
第2節 基本層位.....	6
第3節 トレンチの調査.....	6
第4節 遺構の調査	
1. 76号墓.....	10
2. 77号墓.....	16
3. 78号墓.....	26
4. 79号墓.....	27
第5節 まとめ.....	27
第4章 第3次調査	
第1節 調査の経緯.....	29
第2節 基本層位.....	29
第3節 トレンチの調査.....	29
第4節 遺構の調査	
1. 87号墓.....	34
2. 88号墓.....	40
3. 89号墓.....	46
4. 90号墓.....	50
5. 91号墓.....	54
6. SK01.....	61
第5節 まとめ.....	62
第5章 緊急対応調査	
第1節 ST-128.....	113
第2節 ST-129.....	114
第3節 ST-130.....	121
第6章 まとめと展望.....	122
補 追	
1. 114号墓出土銀象嵌大刀の龍文について .....	123

2. 61号墓出土の鉄鎌について	124
3. 115号墓出土の簪について	126
4. 63号墓出土の鉄剣について	126
5. 100号墓出土の両頭金具について	126
6. 126号墓出土の鉄鎌について	126
付 篇	
1. 出土人骨の分析	147
2. 島内地下式横穴墓より出土した遺物に付着する纖維等について	153

## 挿図目次

第1章

- 第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡位置図……1 第2図 倉内地下式横穴墓群 分布図……3・4

第3章

- |      |                      |    |        |                        |    |
|------|----------------------|----|--------|------------------------|----|
| 第3図  | 2次調査トレンチ配置図 (1/200)  | 8  | 第16図-1 | 77号墓遺物出土状況実測図(1/15)    |    |
| 第4図  | 2次調査トレンチ断面図 (1/40)   | 9  |        |                        | 20 |
| 第5図  | 3トレンチ出土須恵器           | 9  | 第16図-2 | 77号墓胡籠出土状況図(1/3)       | 21 |
| 第6図  | 76号墓埋葬施設実測図 (1/40)   | 11 | 第17図   | 77号墓出土遺物 1             | 22 |
| 第7図  | 76号墓豎坑土層断面図 (1/30)   | 11 | 第18図   | 77号墓出土遺物 2             | 23 |
| 第8図  | 76号墓遺物出土状況実測図 (1/15) |    | 第19図   | 77号墓出土遺物 3 (胡籠にともなう遺物) | 24 |
|      |                      | 12 |        |                        |    |
| 第9図  | 76号墓出土遺物1            | 14 | 第20図   | 77号墓出土遺物 4 (胡籠にともなう遺物) | 25 |
| 第10図 | 76号墓出土遺物2            | 15 |        |                        |    |
| 第11図 | 76号墓出土遺物3            | 16 | 第21図   | 77号墓出土遺物 5             | 25 |
| 第12図 | 76号墓出土遺物4            | 17 | 第22図   | 78号墓埋葬施設実測図 (1/30)     | 26 |
| 第13図 | 76号墓出土遺物5            | 18 | 第23図   | 78号墓豎坑上層断面図 (1/30)     | 26 |
| 第14図 | 77号墓埋葬施設実測図 (1/40)   | 19 | 第24図   | 79号墓埋葬施設実測図 (1/30)     | 27 |
| 第15図 | 77号墓豎坑上層断面図 (1/30)   | 19 | 第25図   | 79号墓豎坑土層断面図 (1/30)     | 27 |

第4章

- 第26図 3次調査トレーンチ配置図(1/200) 30 第27図 3次調査トレーンチ断面図1(1/40) 31

第28図	3次調査トレンチ断面図2 (1/40) ···· 32	第42図	89号墓出土遺物 ···· 49
第29図	87号墓埋葬施設実測図 (1/40) ···· 35	第43図	90号墓埋葬施設実測図 (1/40) ···· 51
第30図	87号墓竪坑土層断面図 (1/30) ···· 37	第44図	90号墓遺物出土状況実測図 (1/15) ···· 52
第31図	87号墓遺物出土状況実測図 (1/15) ···· 37	第45図	90号墓出土遺物実測図 ···· 53
第32図	87号墓出土遺物1 ···· 38	第46図	91号墓埋葬施設実測図 (1/40) ···· 55
第33図	87号墓出土遺物2 ···· 39	第47図	91号墓竪坑土層断面図 (1/30) ···· 55
第34図	88号墓埋葬施設実測図 (1/40) ···· 41	第48図	91号墓竪坑出土土器 ···· 56
第35図	88号墓遺物出土状況実測図 (1/15) ···· 42	第49図	91号墓遺物出土状況実測図 (1/15) ···· 56
第36図	88号墓出土遺物1 ···· 43	第50図	91号墓出土遺物1 ···· 58
第37図	88号墓出土遺物2 ···· 44	第51図	91号墓出土遺物2 ···· 59
第38図	88号墓出土遺物3 ···· 45	第52図	91号墓出土遺物3 ···· 60
第39図	89号墓埋葬施設実測図 (1/40) ···· 47	第53図	SK01実測図 (1/30) ···· 61
第40図	89号墓竪坑土層断面図 (1/30) ···· 48	第54図	SK01土層断面図 (1/30) ···· 61
第41図	89号墓遺物出土状況実測図 (1/15) ···· 48		

## 第5章

第55図	S T - 128造構実測図 ···· 114	第58図	S T - 130造構実測図 ···· 119 · 120
第56図	S T - 129造構実測図 ···· 115 · 116	第59図	S T - 130出土遺物実測図 ···· 121
第57図	S T - 129出土遺物実測図 ···· 118		

## 補追

第60図	銀象嵌龍文実測図 (保存処理後) ···· 123	鐵 · S T - 61出土 鐵錫保存処理後実測図、
第61図	327号墳出土大刀の象嵌復元図 ···· 124	S T 100出土両頭金具実測図 ···· 125
第62図	S T - 115出土 櫛 · S T - 126出土鉄	

## 表 目 次

### 第3章

表1	76号墓出土鉄錫計測値 ···· 63	表2	77号墓出土鉄錫計測値 ···· 64
----	---------------------	----	---------------------

### 第4章

表3	87号墓出土鉄錫計測値 ···· 65	表5	89号墓出土鉄錫計測値 ···· 66
表4	88号墓出土鉄錫計測値 ···· 65	表6	91号墓出土鉄錫計測値 ···· 66

## 第5章

表7 S T-129出土遺物計測表……………118

### 補追

表8 象嵌の比較……………124

## 図版目次

### 第3章

図版1 第2次調査 調査区全景、76号墓豎坑埋土の断面

図版2 76号墓豎坑西壁の掘り込み、76号墓豎坑および閉塞状況

図版3 76号墓玄室と豎坑、76号墓玄室内遺物出土状況

図版4 76号墓玄室内鉄刀および三角板革綴衡角付舟出土状況、76号墓玄室内横矧板鉢留短甲出土  
状況

図版5 76号墓玄室内三角板革綴衡角付舟出土状況、77号墓豎坑埋土の断面

図版6 77号墓豎坑および閉塞状況、77号墓豎坑および庚門

図版7 77号墓玄室天井、77号墓玄室内1号人骨（男性・壮年）・2号人骨（男性・壮年）・3号人  
骨（女性・壮年）人骨上半身

図版8 77号墓玄室内1～3号人骨下半身、77号墓玄室内人骨と副葬品出土状況（1号人骨付近）

図版9 77号墓玄室内西側（4号人骨）、77号墓玄室内4号人骨（女性・熟年）

図版10 78号墓豎坑、79号墓豎坑および閉塞土塊

図版11 79号墓豎坑および玄室、第3次調査 調査区全景

図版12 9トレンチ 方形状の段落ちの一部とアカホヤ層の高まり、87号墓 豊坑上方に設けられ  
た土坑と埋土（中央やや上方が豎坑）

### 第4章

図版13 87号墓豎坑埋土の断面1、87号墓豎坑埋土の断面2

図版14 87号墓豎坑および閉塞状況、87号墓豎坑および庚門

図版15 87号墓玄室内1号人骨（男性・熟年）、87号墓玄室内2号人骨（性別不明・5・6歳小児）と  
副葬された刀子

図版16 88号墓豎坑埋土の断面、88号墓豎坑内閉塞状況

図版17 88号墓玄室内、88号墓玄室内 細状の有機質が付着した鉄鏡の出土状況

図版18 88号墓玄室内5号人骨（男性・壮年）、88号墓5号人骨

- 図版19 89号墓竪坑確認状況、89号墓竪坑埋土の断面
- 図版20 89号墓竪坑および閉塞状況、89号墓玄室内（手前から3号人骨、2号人骨、1号人骨）
- 図版21 89号墓玄室内1号人骨（男性・熟年）・2号人骨（女性・壮年）・3号人骨（男性・熟年）、89号墓玄室内1号人骨陥没骨折
- 図版22 89号墓玄室内1号人骨の左前腕ゴホウラ製貝釧、89号墓玄室内2号人骨に伴う糞石
- 図版23 90号墓竪坑確認状況、90号墓竪坑埋土の断面
- 図版24 90号墓竪坑および閉塞状況、90号墓玄室内2号人骨（女性・壮年）
- 図版25 91号墓竪坑確認状況、91号墓竪坑埋土の断面
- 図版26 91号墓竪坑内土器出土状況、91号墓閉塞状況
- 図版27 91号墓玄室壁面および天井（西側）、91号墓玄室壁面および天井（東側）
- 図版28 91号墓玄室内3号人骨（男性・熟年）、91号墓玄室内3号人骨・4号人骨（男性・壮年）
- 図版29 91号墓玄室内4号人骨、SK01確認状況
- 図版30 SK01埋土の断面、SK01完掘状況
- 図版31 3トレンチ出土須恵器、76号墓玄室内出土遺物（1）
- 図版32 76号墓玄室内出土遺物（2）、77号墓玄室内出土遺物（1）
- 図版33 77号墓玄室内出土遺物（2）
- 図版34 77号墓玄室内出土遺物（3）
- 図版35 87号墓玄室内出土遺物（1）
- 図版36 87号墓玄室内出土遺物（2）
- 図版37 88号墓玄室内出土遺物（1）
- 図版38 88号墓玄室内出土遺物（2）
- 図版39 89号墓玄室内出土遺物
- 図版40 90号墓玄室内出土遺物、91号墓竪坑内出土土師器
- 図版41 91号墓玄室内出土遺物（1）
- 図版42 91号墓玄室内出土遺物（2）
- 図版43 89号墓玄室内出土ゴホウラ製貝釧、91号墓玄室内出土イモガイ製貝釧

## 第5章

- 図版1 S T - 128玄室全景（西から）、横門板石閉塞状態（東から）
- 図版2 S T - 128 1号人骨（北から）、2号人骨（西から）
- 図版3 S T - 129竪坑埋土と閉塞石・空洞検出状態（南から）、竪坑断面層序（南から）
- 図版4 S T - 129竪坑断面層序（北から）、（東から）
- 図版5 S T - 129セクション・非原位置板石除去（東から）、（南から）

図版6 ST-129板石除去・竪坑2段目（南から）、竪坑2段目と底面4号人骨と副葬品（南から）

図版7 ST-129玄室全景（羨道から）、1～3号人骨頭蓋とその周辺

図版8 ST-129 4号人骨と副葬品、1～4号人骨下肢と5号人骨頭蓋

図版9 ST-130竪坑検出状態（西から）、半截（東から）

図版10 ST-130竪坑完掘（南から）、南壁足掛け整形状態（北から）

図版11 ST-130玄室内被葬者4（南西から）、1～3号人骨頭部周辺（南西から）

図版12 ST-130 1・3号人骨下肢（南から）、3・4号人骨頭部・赤色顔料と副葬品（西から）

図版13 ST-129出土遺物、ST-130出土遺物

図版14 ST-114出土銀象嵌大刀の龍文（保存処理後、佩表）、（佩裏）

図版15 ST-126出土鉄鎌（既報告書No98）保存処理後、ST-61出土鉄鎌（既報告書No647）保存処理後、ST-115出土轡保存処理後B面

図版16 A面左の鏡板 表 珠文打ち出し、反転 壓打ち痕（凹み、B面右）

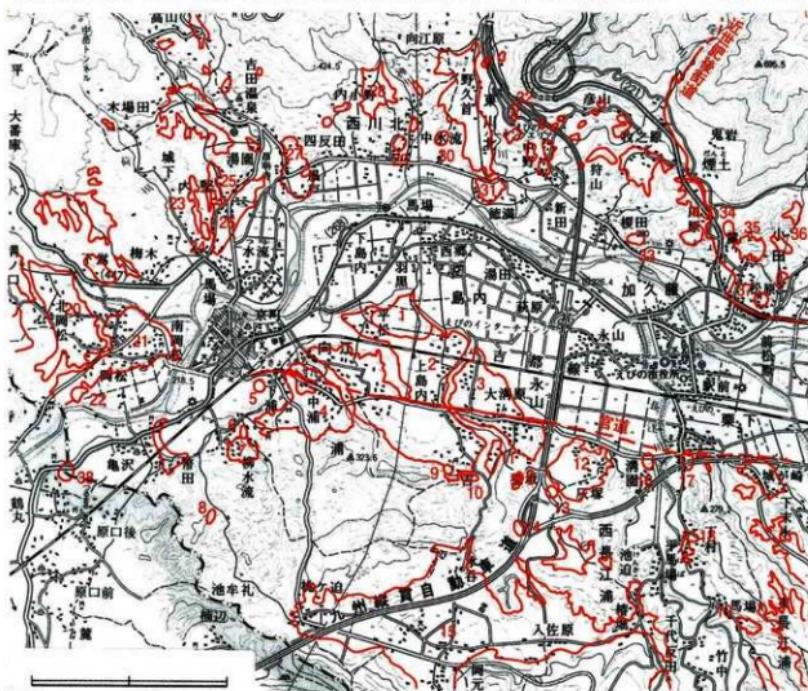
図版17 A面右の鏡板 裏 壓打ち痕（凹み）、反転 珠文打ち出し（表）

図版18 ST-115出土轡 X線撮影写真

# 第1章 はじめに

島内地下式横穴墓群は、県内の地下式横穴墓群を代表する墳墓群のうちの一つである。明治38年に“石櫛”から甲冑が出土して以来、平成24年2月現在130号墓まで調査しており、短甲6・皮小板漆塗草摺1・胄4・刀37・剣44・蛇行剣11・槍1・鉄矛4・鉄鎌約900・骨鎌約200・刀子120・鉄斧3・鎧11・鎧子4・鑿1・両頭金具3組・胡鎗金具2組・轡4・辻金具9・鏡1・鉄鐸1・銅鏡1・耳環11・貝釧60・ガラス小玉63・切子玉2・水晶製小玉1・朱玉1・砥石1のほか、人骨315・糞石3といった多種多様の遺物が出土している。鏡や農具、土器は出土していない。

鹿児島大学による学術調査は3次に渡るが、平成10・11年度の第2・3次調査分は既報ののみ<sup>(2)</sup>であったことから、このたび報告書用原稿作成を依頼した。これにより、既調査分については全て公



- 1:島内地下式横穴墓群 2:島内遺跡 3:大溝原遺跡 4:中浦遺跡 5:徳永半田遺跡 6:古城跡 7:古城遺跡 8:猿ヶ城跡 9:柿ヶ迫経塚 10:三吉城跡 11:小原遺跡 12:灰塚地下式横穴墓群 13:西矢倉城跡 14:池山城跡 15:岡元遺跡 16:溝園城跡 17:福荷城跡 18:小屋敷城跡 19:畠田城跡 20:天神免遺跡 21:岡松遺跡 22:赤花城跡 23:杉尾城跡 24:松尾城跡 25:丸ノ尾城跡 26:昌明寺跡 27:風戸遺跡 28:内小野遺跡 29:東福城跡 30:新城跡 31:徳溝城跡 32:妙見遺跡(消滅) 33:園田城跡(消滅) 34:淨慶城跡 35:加久藤城跡 36:新城跡 37:小城跡 38:鶴丸・馬場地下式横穴墓群(湧水町)

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡位置図 (1 : 50,000)

に報告したことになる。

## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境（第1回）

島内地下式横穴墓群は、えびの市大字島内字平松・杉ノ原に所在する。本市の西側、盆地中央を西流する川内川の左岸、氾濫原との比高8m、標高233～235mの低位段丘に立地する。これまでの調査で、東西650m・南北350mの分布範囲がほぼ確定し<sup>①</sup>、平成23年9月現在、地下式横穴墓129基や板石積石室墓2基、横穴式石室系板石積石棺墓1基、馬墓2基が確認されている。周囲は、島内遺跡（2）・中浦遺跡（4）・大溝原遺跡（3）の縄文時代以降の広大な遺跡群が続くと想定されるが、半径1.5km以内の調査事例は無い。

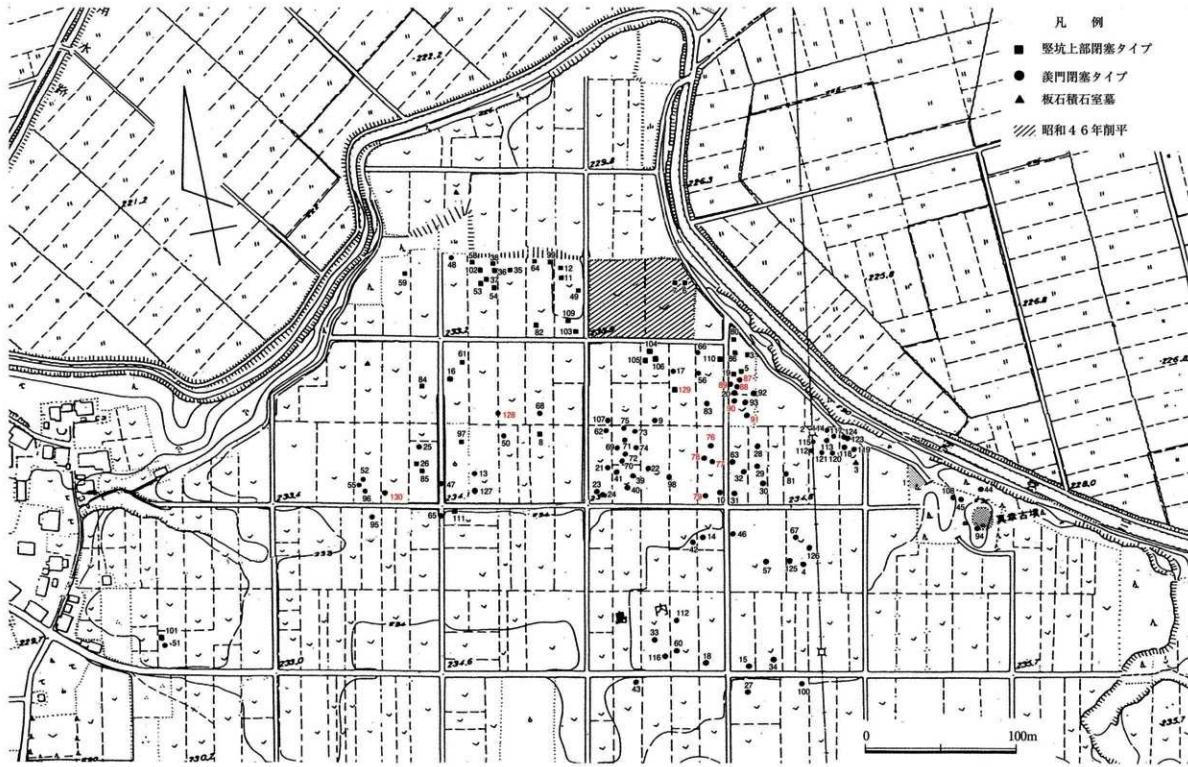
川内川左岸には、約2km間隔で、灰塚（12）・小木原・建山と大規模な墳墓群が立地し、小規模な遠目塚・杉水流<sup>すずりのる</sup>の墳墓群が続く。右岸の大規模墳墓群は1ヶ所（学畑<sup>がくばたけ</sup>）しか無いが、小型形式の地下式横穴墓を内小野遺跡（28）で1基<sup>②</sup>、天神免遺跡（20）で27基<sup>③</sup>、岡松遺跡（21）で2基<sup>④</sup>検出している。このうち、灰塚・小木原・学畑においては板石積石棺墓も混在する。対岸の2km北には、弥生時代中期末～古墳時代中期の竪穴住居130（推定総数300～400）軒を検出した内小野遺跡が立地し、当墳墓群を造営した集団のうちの一つの居住地である可能性が高い。71号住居からは畿内産の初期須恵器大甕が、130号住居からは小型の鉄錠状鉄器が出土している。

その東には、5～6世紀代の竪穴住居41軒を検出した妙見遺跡<sup>⑤</sup>（32）が、3km西には、弥生時代後期～古墳時代後期の竪穴住居200軒余りを検出した天神免遺跡が、その南東には竪穴住居28軒を検出した岡松遺跡が立地する。

段丘下の氾濫原は遺跡が少ないが、徳永牛田遺跡（5）では弥生時代後期の壺や甕数10個が潰れた状態で発見され<sup>⑥</sup>、微高地には遺跡が包蔵していることを留意する必要がある。0.6～0.7km南には古代の官道が走り、中世には、左岸段丘の突出部や右岸丘陵の末端部に山城が建立し、肥沃な盆地の覇権が争われた。三吉城西隣の独立小丘陵頂部（9）には、経塚3基があると思われ、地権者によってうち1基から輕石製外容器が掘り出されている。

### 註

- (1) えびの市教育委員会「島内地下式横穴墓群Ⅲ・岡松遺跡」 2009  
えびの市教育委員会「島内地下式横穴墓群Ⅱ」 2010
- (2) 竹中正巳・大西智和「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群 76-77-78-79-87-88-89-90-91号墓発掘調査概報」「人類史研究12」人類史研究会 2000
- (3) えびの市教育委員会「島内地下式横穴墓群」 2001
- (4) えびの市教育委員会「内小野遺跡」 2000
- (5) えびの市教育委員会「北岡松地区遺跡群」 2010
- (6) 同上
- (7) 宮崎県教育委員会「野久首遺跡・平原遺跡・妙見遺跡」 1994
- (8) 未発表である。



第2図 島内地下式横穴墓群 遺構分布図

## 第3章 第2次調査

### 第1節 調査の経過

#### 調査に至る経緯

古墳時代の墳墓は南九州でも多数存在するが、人骨と副葬品の両方が保存良好な墳墓は極めて少ない。宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群は、その数少ない遺跡の一つである。島内ではこれまで、70数基から150体を超える人骨および、畿内との関連をうかがわせる甲冑、蛇行剣など多数の鉄製副葬品が出土している。島内の台地には、少なく見積っても、まだ400基の地下式横穴墓が存在するという。しかし、全て玄室陥没による緊急発掘のため、人骨の追葬状況、埋葬順位、堅坑や玄室の正確な形態など、考古学的・人類学的大切な情報が完全には得られていなかった。

我々は島内地下式横穴墓群の墓の構造や島内を営んだ人々の形質・生活様式を解明するために必要な情報の集積を目的とした発掘調査を、1998年4月2日から4月18日にかけて実施した。調査区内の天井が崩落していない2基の玄室を調査し、遺存状態の良好な人骨や副葬品が検出できた。引き続き、情報を得るために、第2次調査を1998年7月14日から8月10日まで行った。

本発掘調査の経費は、文部省科学研究費特定領域研究(A)「日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」(課題番号: 10115214) の援助によった。

#### 調査体制

調査主体者: 竹中正巳 鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座II助手

発掘担当者: 大西智和 鹿児島大学埋蔵文化財調査室助手

調査参加者: 鹿児島大学学生諸氏 (法文学部: 林麻穂、鷲島慎吾、有村航平、外山隆之、末吉広海、森田太樹、稻村雅文、松元一浩、稻富陽子、歯学部: 染田英利、下松孝太、脇田千里)

九州大学: 松藤和暢

#### 報告書作成の参加者

整理作業: 鎌ヶ江賢二・安柄祐樹・前畠辰伍・大西智和・ほか鹿児島国際大学大西ゼミの学生諸氏

実測者: 鎌ヶ江賢二・福井俊彦・安柄祐樹・前畠辰伍・大西智和

トレース: 鎌ヶ江賢二・福井俊彦・安柄祐樹・前畠辰伍

図面レイアウト: 鎌ヶ江賢二・福井俊彦

執筆者: 安柄祐樹・鎌ヶ江賢二・大西智和・竹中正巳

#### 調査の経過

第2次調査では、南北約47m、東西17mの範囲を調査の対象とした。調査区内に約1mごとに幅1mのトレンチを設定し、堅坑の検出を行った(図版1)。その結果、5基の地下式横穴墓を確認で

き、発掘調査を実施した。その結果1基はすでに発掘調査が行われたもの（10号墓）であることが、1基は玄空の天井が陥没していることがわかった。

天井が陥没した76号墓からは、甲冑ほか比較的豊富な副葬品が出土したが、天井崩落のため人骨は遺存しておらず、副葬品の遺存状態もあまり良くない。77号墳では、4体の人骨が確認された。副葬品では、胡錆金具の出土が特筆できる。78号墓と79号墓は著しく小さな遺構である。内部から人骨や副葬品の出土はなかった。地下式横穴墓として報告するが、弥生時代の横L字土坑墓にも類似する。

## 第2節 基本層位

基本層位は基本的に1998年4月に実施した第1次調査時に確認したもの（竹中・大西1999）を踏襲している。

1層 表土層。2層と性質は類似するが、とくに軟らかい部分を1層とした。

2層 10YR2/1（黒色）を呈するシルト質土。粘性は帯びていない。地下式横穴墓が造られたのよりも後で形成された層である。場所によっては耕作などにより、擾乱を受けている。

色調は2層よりやや黒味を帯びている。

3層 10YR1.7/1（黒色）のシルト質土。1次調査の知見では堅坑の埋土に用いられた砂礫混じり土が上に乗ることから、3層上面が地下式横穴墓築造時の表土であったことがわかる。

4層 10YR3/2（黒褐色）シルト質土で粘性を帯びる。

5層 5YR6/8（橙色）を呈するシルト質土。いわゆるアカホヤ火山灰層である。

6層 7.5YR4/3（褐色）～10YR3/1（黒褐色）を呈するシルト質土。粘性を帯び、緻密で硬い。

7層 10YR6/4（にぶい黄橙色）を呈するシルト質土。粘性を帯び緻密で硬い。多くの玄室の天井は、6・7層あたりに位置する。

8層 粗砂・礫層。礫は丸みを帯びている。玄室の床と壁に利用されていることが多い。

## 第3節 トレンチの調査

幅1mのトレンチを南北方向に1.2mの間隔ごとに、計7本設定した（第3図）。また、地下式横穴墓を確認した場合、必要に応じてトレンチの拡張を行った。

### 1 1トレンチ

北側で段落ちが確認されたが、性格は不明である。そのすぐ南側で本調査区の堅坑埋土に見られる、黒色土と6・7層との混土の広がりが確認できたが、堅坑は確認できなかった。

トレンチ断面図1（第4図） 浅い落ち込みが観察できたが、時期や性格は不明である。

トレンチ断面図2（第4図） ①層は黒色土に6・7層土が混じっているため、過去の知見から堅坑埋土に関係するものと考えたが、付近で堅坑は検出されていない。

## 2 2トレンチ

北側で1トレンチでも確認されたのと同様の混土が確認できた。1トレンチのものに連続するのかもしれないが、断定はできない。2トレンチからも竪坑は確認できなかった。

## 3 3トレンチ

北端部で黒色土と6・7層の混土の広がりが確認できたが、これは76号墓の竪坑埋土につながるものと考えられる。

トレンチ中ほどでは小型の地下式横穴墓と考えられる78号墓を検出した。そのすぐ南側には比較的新しい時期の落ち込みを、トレンチ南端部付近でも小型の地下式横穴墓と考えられる79号墓を検出した。

**トレンチ断面図3（第4図）** 黒色土に5・6・7層土の混土が確認されたが、その下方から78号墓が検出された。なお、78号墓の検出面は4層上面である。大型の地下式横穴墓より古いことを示すものかもしれないが、削平は普遍的に見られるため断定はできない。

**トレンチ断面図4（第4図）** 南側で確認された落ち込みは、埋土に2層土が見られることと、プランが直線的であることから、古い時期のものではないと考えられる。

## 4 4トレンチ

北端部で76号墓の竪坑を確認したため、その部分の拡張を行った。この墓は天井部がすでに崩落していることがわかったため、玄室に相当する部分も拡張した。トレンチの中央付近で黒色土と6・7・8層土との混土が見られたが、竪坑は確認できなかった。

**トレンチ断面図5（第4図）** 76号墓の竪坑が検出された。竪坑埋土は竪坑の南側にも連続している。

**トレンチ断面図6（第4図）** 黒色土と6・7・8層土との混土が比較的広い範囲で確認されている。しかしその厚さは10cm以下である。

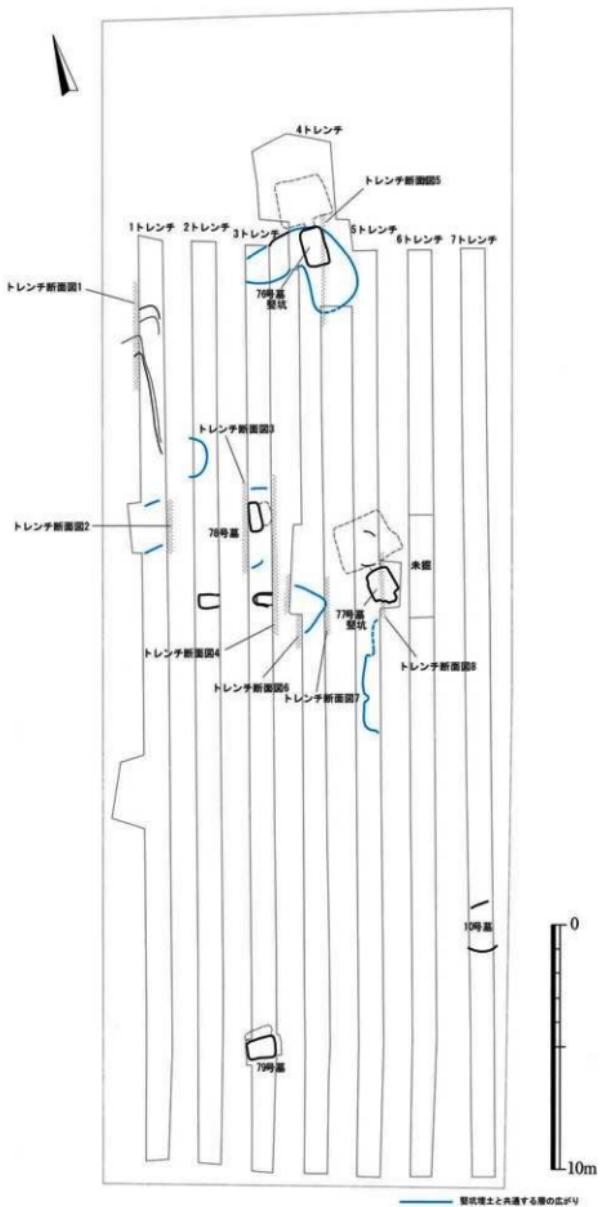
**トレンチ断面図7（第4図）** トレンチ断面図6の層位と同様である。黒色土と6・7・8層土との混土の確認範囲は狭くトレンチ断面図6では広い。この混土層が竪坑の埋土に伴うものであるとすれば、竪坑は本トレンチの西側に位置することになると思われる。

## 5 5トレンチ

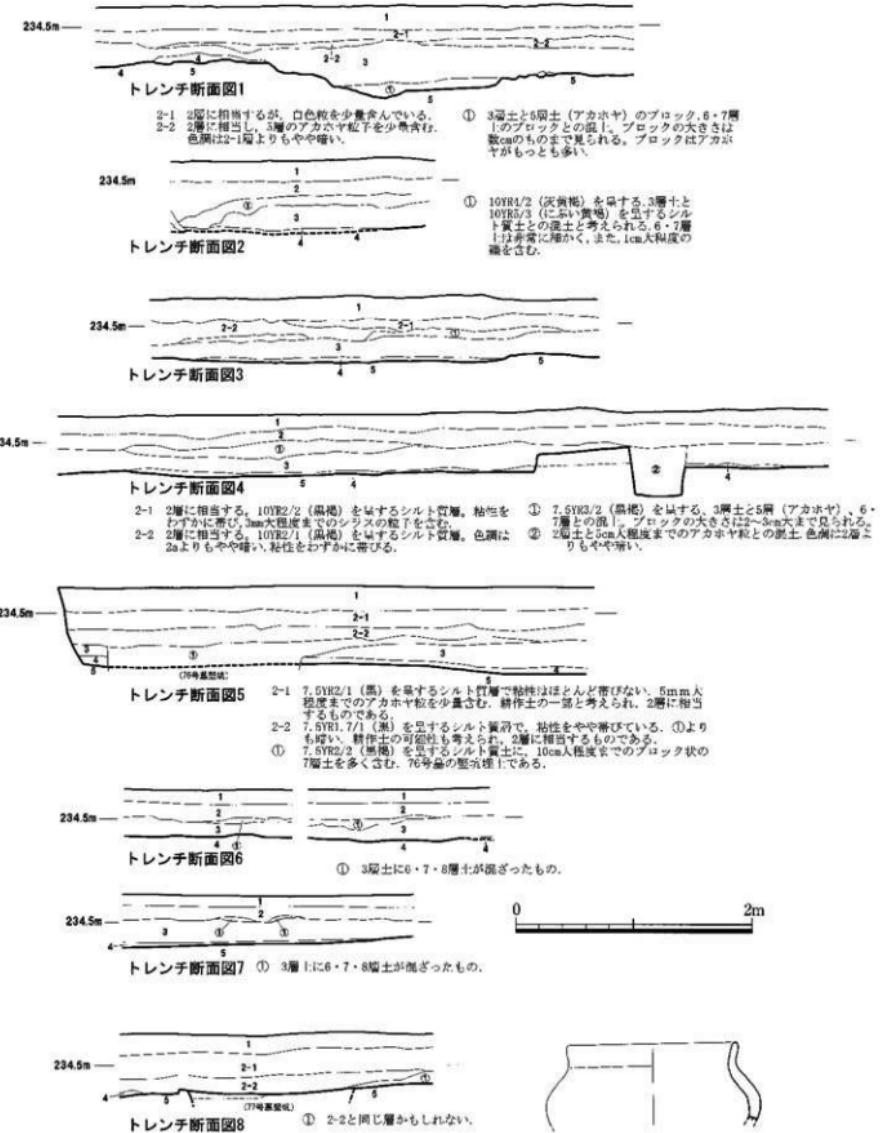
北端部では76号墓竪坑埋土の広がりであると考えられる黒色土と6・7層土との混土がわずかに確認できた。中ほどで77号墓の竪坑を検出したため、東側に拡張した。

**トレンチ断面図8（第4図）**

77号墓の竪坑が確認されたが、検出位置は5層もしくは⑤層上面であった。これは、後世に削平されたためだと考えられる。



第3図 2次調査トレンチ配置図 (1/200)



第4図 2次調査トレンチ断面図 (1/40)

第5図 3トレンチ出土須恵器



## 6 6トレンチ

堅坑などは確認されなかった。

## 7 7トレンチ

南側で玄室の落ち込みを確認した。しかし、これは昭和54年に発見・調査された10号墓であることがわかった。

## 8 トレンチ出土遺物（図版31）

1は3トレンチから出土した短頸壺の口縁部から胴部にかけてである。遺存は胴部最大径部付近で約1/10が残る程度であり、口縁端部もほとんど残っておらず良好とはいえないが、岡上復元を行った。口径は10.4cm、胴部最大径は13cmと推定できる。口縁端部はわずかに外反するがほぼ直に立ち上がり、胴部最大径部もそれほど張り出していない。外面の一部には胴部最大径部より上方に帯状に自然釉が見られるため、蓋をかぶせて焼成したものと考えられる。調整は内外面とも回転ナデである。形態的な特徴からは、短頸壺の中では比較的古手のものと考えられ、TK43もしくはその前後の時期を想定しておきたい。

## 第4節 遺構の調査

### 1 76号墓

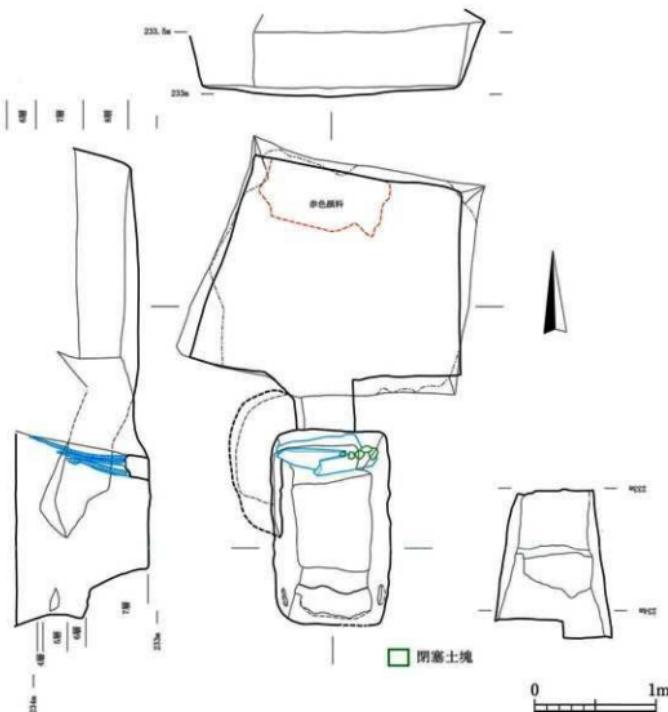
#### 1.1 遺構（第6図）

76号墓は調査区の北側中央で検出した。この墓の南側には77号墓が位置する。玄室天井は調査時には既に陥没していたため、堅坑の掘り下げと、玄室上部からの掘り下げを同時に進めた。

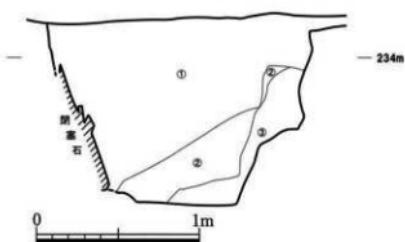
**堅坑埋土（第7図）** 堅坑埋土の厚さは検出面から約1.2mである（図版1）。埋土は、黒色土が中心でそれに下位の層の土が混ざったものと考えられる。黒色土の割合は③、②、①層の順で高くなる。②層上面と③層上面は、堅坑を掘り返した際の掘り残しのラインと考えられることから、この墓は、最初の使用後2度以上掘り返されたと考えられる。追葬のために再度玄室が開けられたとすると、玄室には3体以上は埋葬されていたことになる。

**堅坑** 堅坑は長方形で、長さ約1.6m、幅約1.0m、深さ約1.2mを測る（図版2）。堅坑の南側面には、階段状のステップが1段確認でき、南東、南西隅に1ヶ所ずつ、計2個のステップ状の掘り窪みが確認できた。これらのステップは、幕作りの際や埋葬の際の上り下りのために作られたと考えられる。堅坑内には横方向の工具痕が確認できたが、その単位はよくわからなかった。

堅坑西側面のほぼ中央の高さに、上下高約30cm、奥行き約30cmの掘り込みが検出され、それは羨門部を越え、羨道部まで続いている（図版2）。掘り込み部分の埋土はとても柔らかく、工具痕もよく残っていない。埋土が追葬時に埋め戻された土と類似するため、この掘り込みは、元から造られていていたものではない可能性が高いと思われる。このような事例は我々の調査では初めてであ



第6図 76号墓埋葬施設実測図 (1/40)

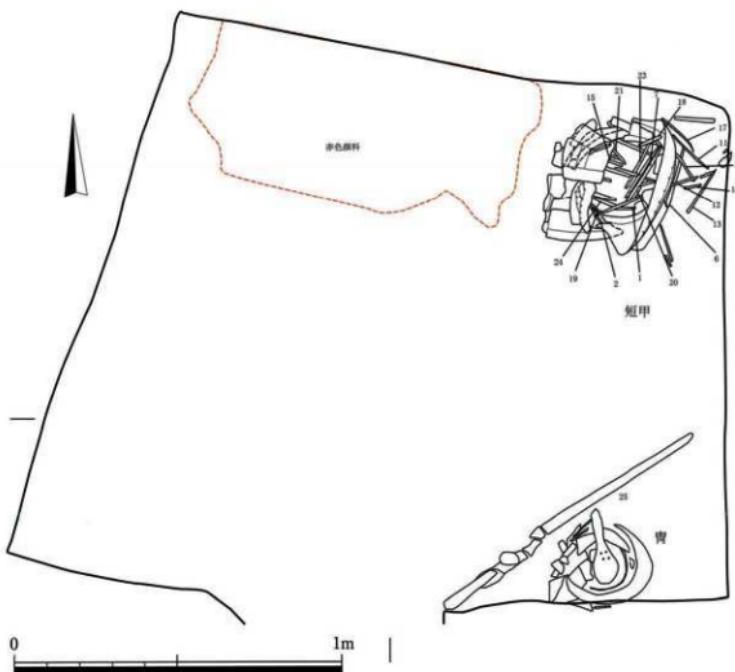


第7図 76号墓堅土層断面図 (1/30)

り、また、類例も多くないと思われる。したがって、現時点での掘り込みの性格は不明と言わざるを得ない。

**羨門（図版2）** 羨門は比較的大型の3枚の板石で閉塞されており、その総重量は約60kgである。石の大きさの割に重量は軽いが、これは、閉塞石が薄く加工されているからだと思われる。閉塞石と閉塞石との隙間には、土塊がいくつか詰められていた。閉塞石の下端は、堅坑の底部から約20cm浮いていた。これも堅

- ① 7.81m2/2(基壇)を覆するシルト層。5cm大程度までのロームをブロックで包むが、1cm大程度のものが多い。2cm大程度までのアカホヤのブロックも少量見られる。
- ② 7.81m2/2(基壇)を覆するシルト層。4cm大程度までのローム層とブロックで包むが、1cm大程度のアカホヤのブロックも少量見られる。なお、ブロックの重21kgよりも多くなる。また、4cm大程度までのアカホヤのブロックがわずかに見られる。
- ③ 10.78m2(基壇)・10.78m2(2(2.5m)×2(2.5m))を覆るローム層と粗砂とが混ざった層。2cm大程度までのブロックもわずかに含まれる。



第8図 76号墓遺物出土状況実測図 (S=1/15)

坑の掘り返しに伴うものと考えられ、豊坑での見解と整合的である。

**羨道** 羨道は豊北壁のほぼ中央に掘り込まれている。羨門部の床面幅約50cm、高さ約70cm、長さ約50cmを測る。

**玄室** (図版3) 玄室は南向きに開口している。玄室の平面プランは方形～台形の平入りで、長さが約1.6～1.7m、幅が約1.7～2.2mである。天井部は完全に崩落していた。四面の壁は直線状によく整えられており、寄棟の天井を有していたと考えられる。北西隅に幅約4.5cmの工具痕が残っているが、その他の場所では工具痕は観察できなかった。表面を平滑に仕上げる過程で失われたものと思われる。玄室の北西部に赤色顔料の広がりが見られた(第6図 赤線の範囲内)が、壁面には赤色顔料は塗布されてはいない。

## 1.2 遺物

### 1.2.1 出土状況（第8図）

玄室の北東隅に横矧板鉢留短甲が、南東隅に三角板革綴衡角付冑と鉄刀が検出された（図版4・5）。また、短甲の内外に、鉄鎌が確認できた。これは、短甲が追葬や儀礼的行為により動かされていないとすると、短甲の中に立てかけられていた矢の矢柄部分の経年腐食に伴い、鉄鎌が短甲の内外に落下した結果であるとの推測も可能になる。短甲（5世紀後半）と冑（5世紀前半）の作られた時期が異なる。これは、この墓が使用された期間や島内における権力・財力の象徴としての甲冑という副葬品の有り様を考える上で興味深い。玄室の北側の床面には、東西1m、南北0.5mの幅で赤色顔料が遺存していた。ここに少なくとも1体は埋葬されていたことが推定できる。冑が冑と鉄刀の間に遺存していた。

### 玄室内出土遺物（図版31下段・図版32上段）

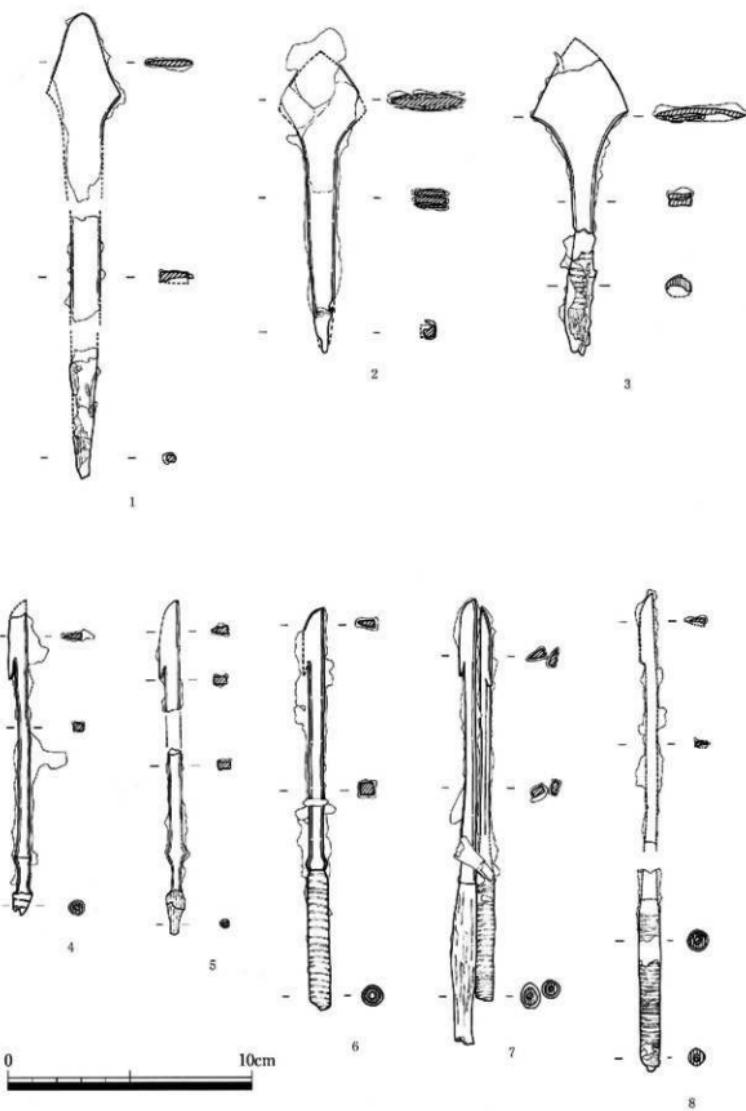
76号墓では、玄室の北東隅から横矧板鉢留短甲が、南東隅から三角板革綴衡角付冑が出土した（図版4・5）。また短甲の内外から鉄鎌が集中して検出された。短甲と冑の型式、および鉄鎌の形状から5世紀代の所産のものとみられる。

**鉄鎌（第9・10図 表1）** 調査時には1~49までの番号を付けて取り上げを行ったが、遺存状態の悪いものや所在不明のものを除いた資料を報告する。1~3は主頭鎌である。茎部には木の皮が巻かれていた痕跡が確認できる。4~10は片刃の長頸鎌である。関はいずれも円形闇または撥状に開く形態を呈している。茎部は、木製の柄が覆い、表面には木の皮が巻かれている。5は鎌身部と頸部は接合しない可能性もある。11~13、17~23は、長頸鎌であるが、頸部と茎部のみ残存しているため鎌身の形状は不明である。19の頸部には糸巻きが観察される。

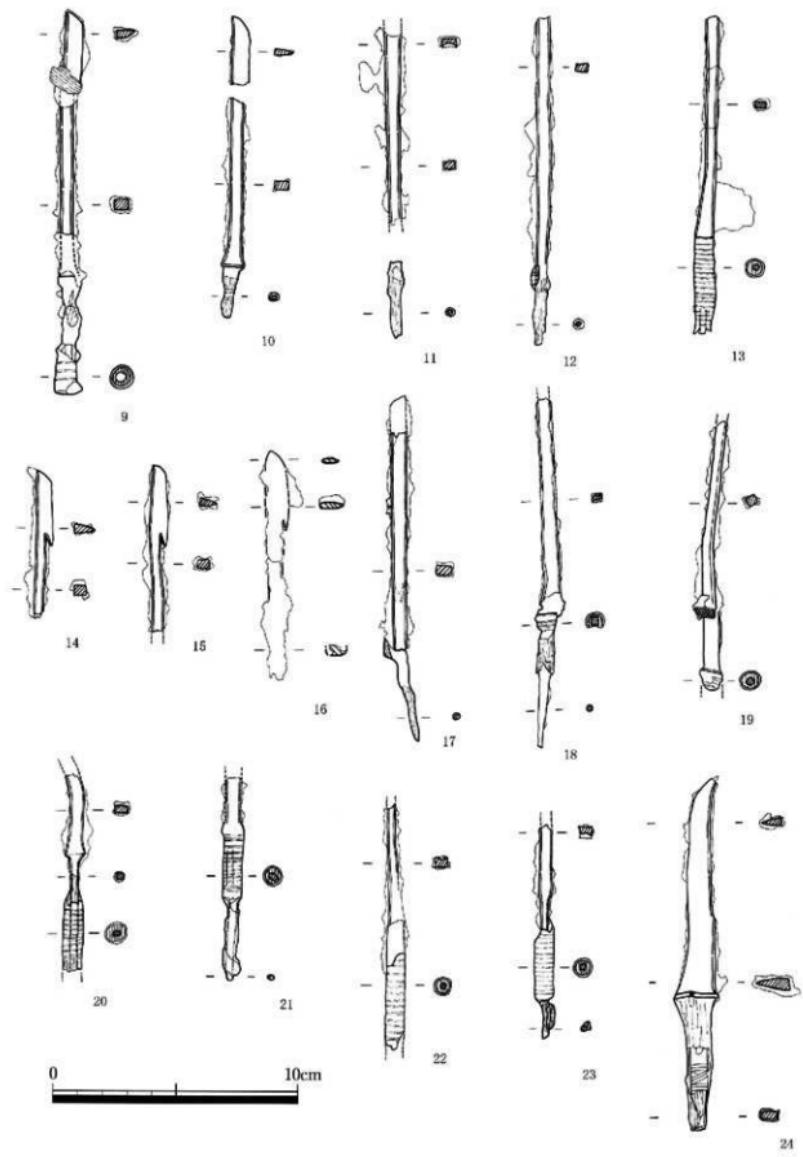
**刀子（第10図）** 24は横矧板鉢留短甲の内部から検出された刀子である。残存長14.6cm、身部長8.9cm、関部幅1.7cm、茎部長5.3cmを測る。茎部は木質の下に纖維状の有機質が確認されることから、纖維で覆われた後に木製の柄が着柄されたとみられる。

**鉄刀（第11図）** 25は玄室南東隅から三角板革綴衡角付冑とともに検出された鉄刀である。先端を欠き、残存長94.5cm、身部長76cm、身部幅2.9cm、茎部長18.6cmを測る。柄部には土塊状のものが付着しているが、把頭装具の可能性がある。

**短甲（第12図）** 26は横矧板鉢留短甲である。本遺物は既刊報告書（「島内地下式横穴墓群」Ⅱ えびの市埋蔵文化財調査報告書第49集）で公表されており、詳しく述べてあるため、既刊報告書に基づき概要部分のみ記述しておく。正面7段、背面7段で構成され、右前を別作りとし、上下に配置した2本の革紐を螺旋金具で連結している。覆輪は革組式だが、右前胸板のみ鉄包式である。すべての部位は一枚板で作成されており、縫ぎ目はない。鉄径は0.8cm、帶金幅4.0cm、背面堅上第3段は1列8鉢である。



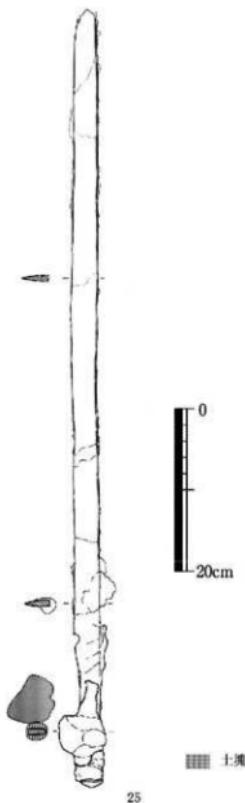
第9図 76号墓出土遺物 1



第10図 76号墓出土遺物 2

### 胄（第13図）

27は三角板革綴衝角付胄である。本遺物も既刊報告書（『島内地下式横穴墓群』Ⅱ　えびの市埋蔵文化財調査報告書第49集）で公表されており、詳しく述べてあるため、既刊報告書に基づき概要部分のみ記述しておく。三角板を横長に縫じ合わせた段と横長板を上下方向に、交互に革綴じして4段を形成している。頭部が入る箇所には、先端から少し離れた部分に豊眉庇を当てている。鏡は1枚板である。胄本体には、側頭部中央の孔はみられず、伏板頂部には、4孔が長方形に配列されて開口する。



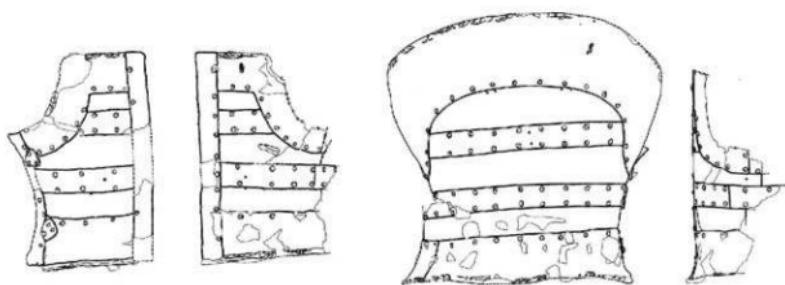
第11図 76号墓出土遺物 3

## 2 77号墓

### 2.1 遺構（第14図）

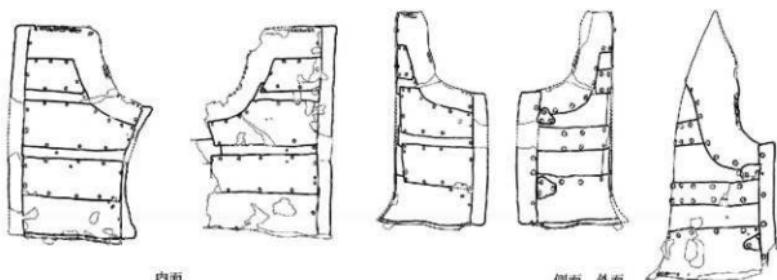
77号墓は調査区の中央やや東側で検出した。この墓の約13m北側に76号墓が、約14m南側に10号墓が位置する。また、約3m北西側には、非常に小型の地下式横穴墓と考えられる78号墓が位置している。

**豎坑埋土（第15図）** 比較的単純な層位を示す（図版5）。最下部には黒色土の堆積が見られるが、これは、地下式横穴墓築造時もしくはそれに近い時期に上方から落下したものと考えている。②層上面は、豎坑が再度掘り返された際の掘り残しのラインになるとされる事から、玄室は初葬後1回以上開けられたと推定できる。



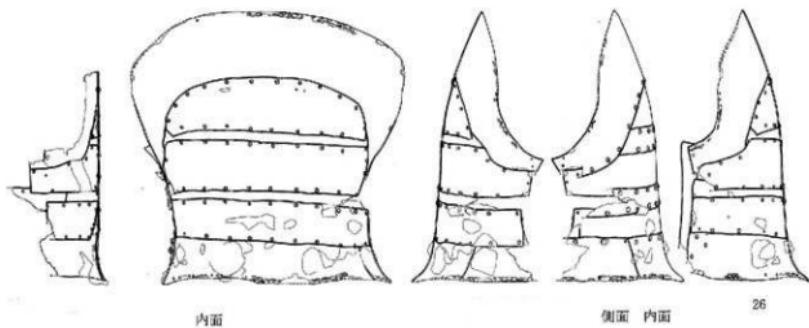
外面

外面



内面

侧面 外面



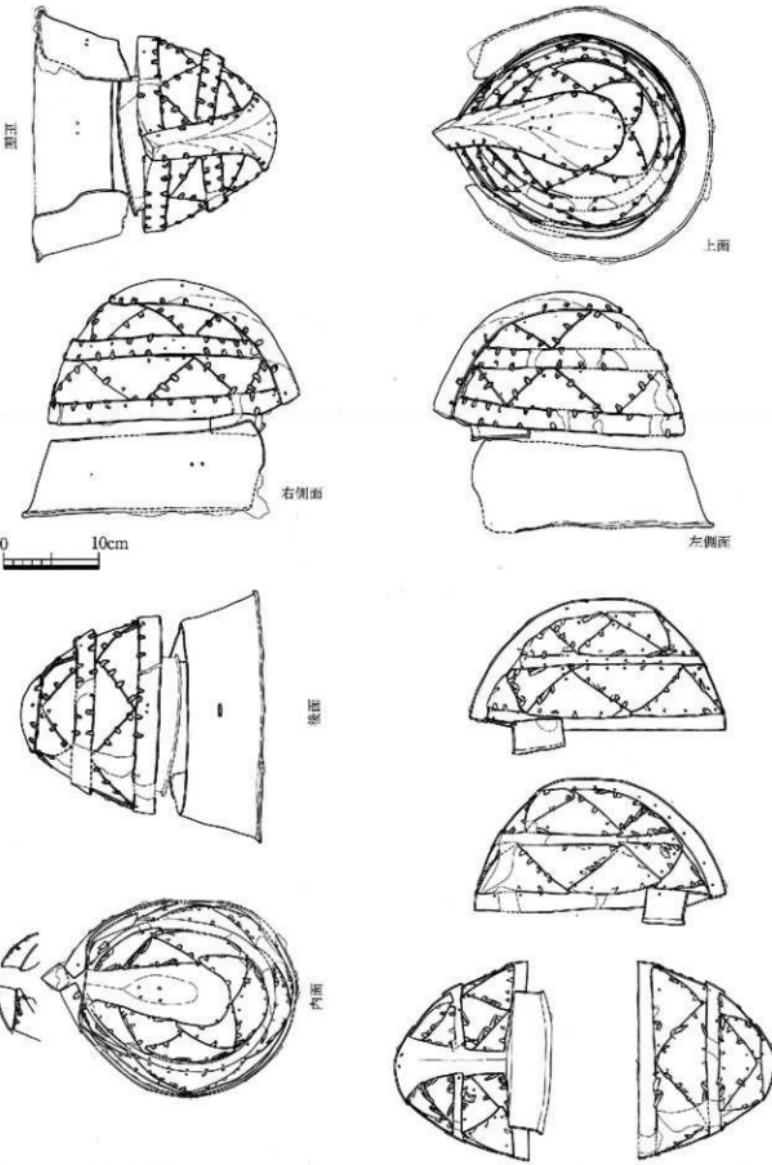
内面

侧面 内面

26

0 20cm

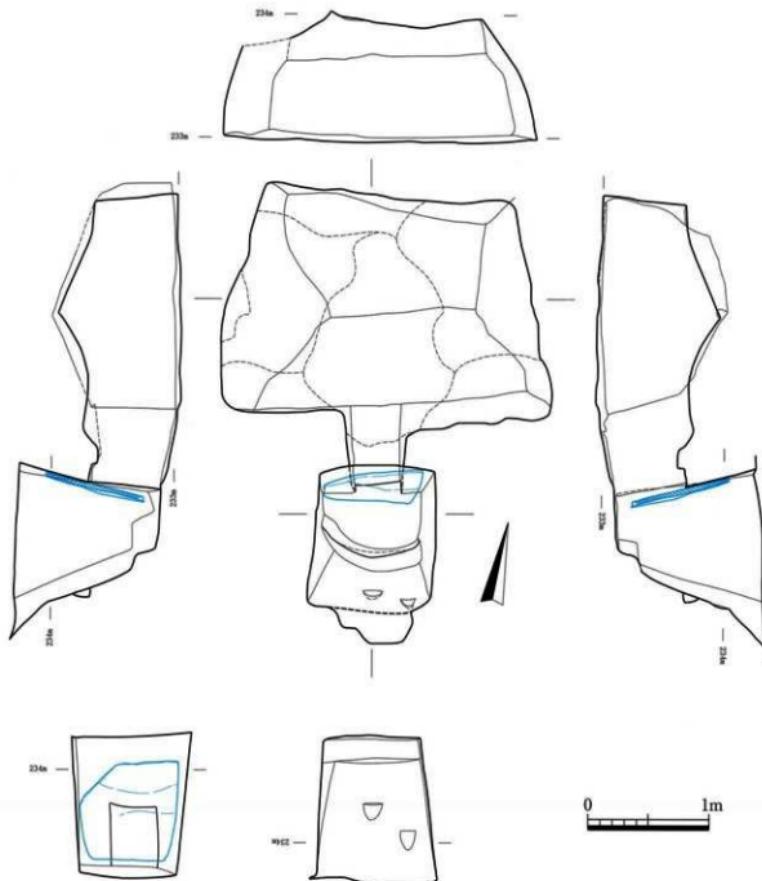
第12図 76号墓出土遺物 4



第13図 76号墓出土遺物 5

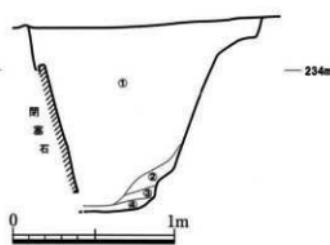
内面

27



第14図 77号墓埋葬施設実測図（1/40）

**豎坑（図版6）** 豊坑は長方形で、長さ約1.2m、幅約1m、深さ約1.2mを測る。豎坑の南側面には3ヶ所のステップが確認できた。上方の2つは壁面を掘り窪めたもので、再下段のものは階段状のステップである。これらのステップは、墓作りの際や埋葬の際の上り下りのため用いられたものと考えられる。

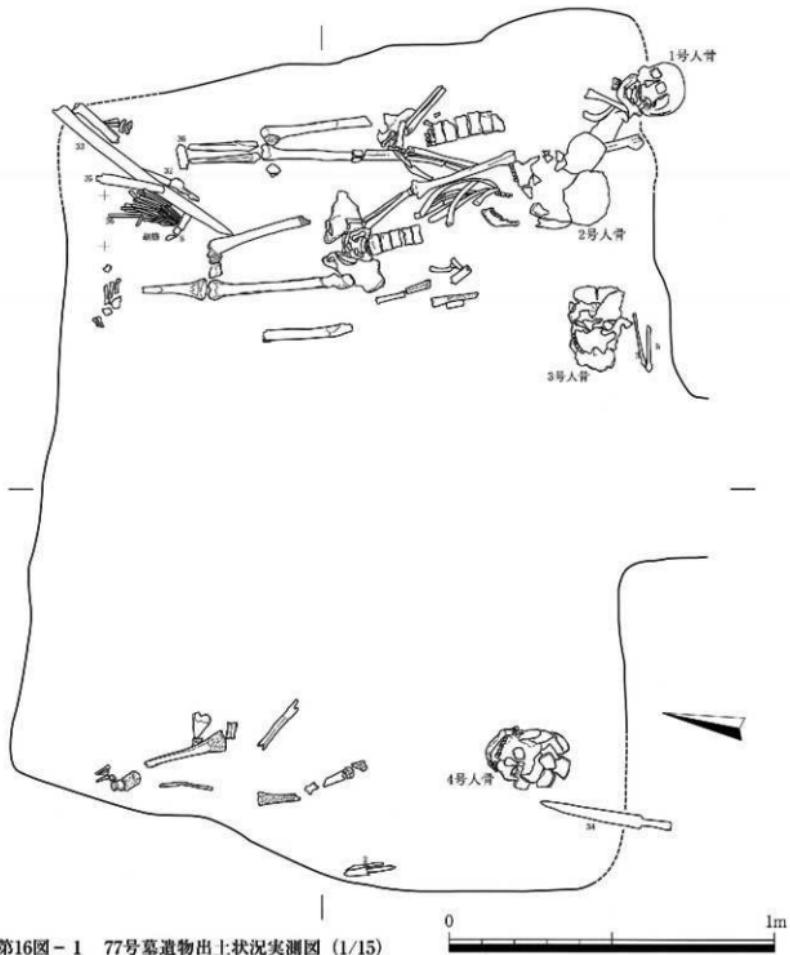


第15図 77号墓豎坑土層断面図（1/30）

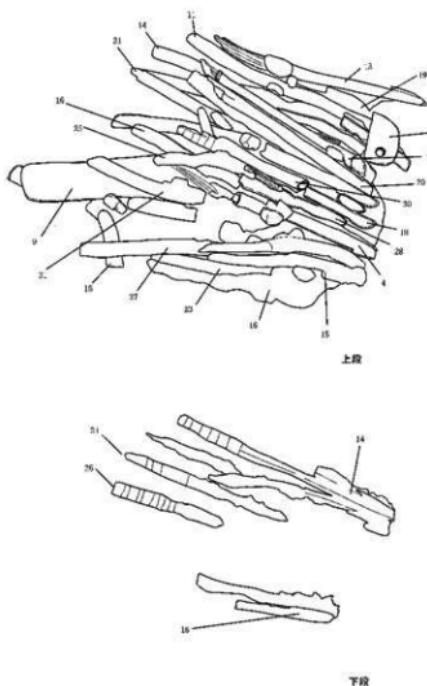
羨門（図版6） 羨門は幅、高さともに80cm程度の1枚の板石で閉塞されており、その重量は約48kgである。閉塞石と竪坑東壁との隙間には土塊が詰められていた。閉塞石の下端部は床面より10cm以上浮いており、これは77号墓が複数回使用されたことによると考えられる。

**羨道** 羨道は堅坑北壁の中央よりわずかに東側に寄って掘り込まれている。羨門部での床面と天井部の幅は約40cm、高さ約50cm、長さ約50～70cmである。

**玄室** 玄室は南向きに開口している。玄室の平面プランは台形状に近い平入りで、長さが約1.9m、幅が約2.1～2.7m、高さが約1.0mである。玄室の天井は家形（寄棟）に形成され、工具痕が見いだせる（図版7）。



第16図-1 77号墓遺物出土状況実測図 (1/15)



第16図－2 77号墓胡錆出土状況図（1/3）

骨の骨の乱れは、2号人骨を追葬する際、白骨化していた1号人骨の骨が動かされたことがわかる。したがって、1号人骨と2号人骨の埋葬は同時ではなく、1号人骨が先に埋葬され、2号人骨が時間を置いて埋葬された。3号人骨と4号人骨の埋葬については、3号人骨は1、2号人骨の後に埋葬されたことがわかるが、4号人骨については最後に埋葬された可能性と1号人骨の埋葬前後の時期に埋葬された可能性が考えられる。副葬品が多い被葬者が初葬者である傾向を考えると、4号人骨は鉄剣が副葬されており、最終埋葬者と考えるより、多くの副葬品を持つ1号人骨と同程度の時期の人骨と考える方がより蓋然性が高いように思われる。

## 2.2 遺物

### 2.2.1 出土状況（第16図1・2）

4体の人骨が埋葬されており、全て南頭位の仰臥伸展葬である。東側から西側へ、1、2、3、4号人骨と呼ぶ（図版7・8）。1号人骨は男性・壮年、2号人骨も男性・壮年、3号人骨は女性・壮年（図7）、4号人骨は女性・老年（図版9）である。3号人骨を除く、3体の人骨には赤色顔料が付着している。副葬品は、1号と2号人骨の下腿の間にコロク（胡錆）に入った状態の鉄鎌、鉄刃などが遺存している（図版8）。3号人骨の頭上に刀子が、4号人骨には頭上に鉄剣、骨盤の左側に鉄鎌が遺存している。

1号人骨の左上腕骨は外転し、左右の寛骨、大腿骨、脛骨は寄せられた状態で遺存している。つまり、1号人骨は解剖学的位置関係を保っていない骨がある。この1号人骨の左腕の上に2号人骨の頭蓋および右上半身が乗っている。このことから、1号人骨の左上腕骨、左右の寛骨、大腿骨、脛

### 2.2.2 玄室内出土遺物（図版32～34）

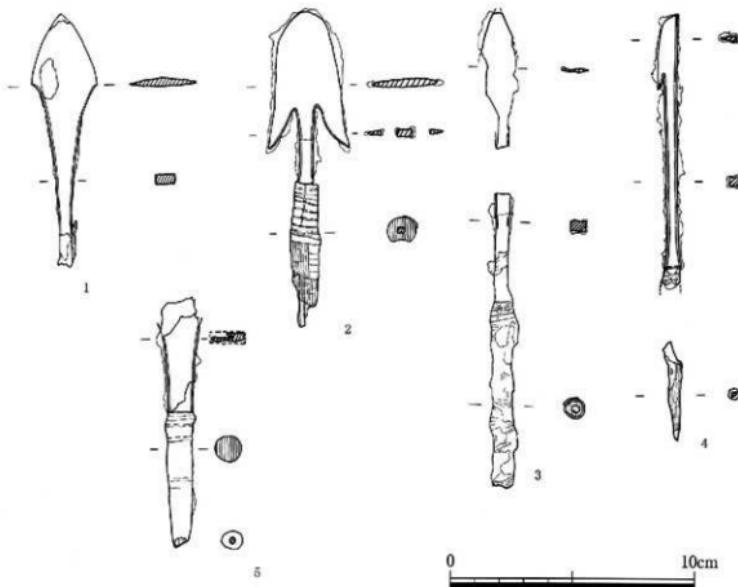
77号墓では、3号人骨と4号人骨にともなう遺物とともに、1号人骨と2号人骨の下腿の間に胡錆に入れられた状態で鉄鎌、鉄刃が出土した。また3号人骨と4号人骨にともない鐵鎌、剣が出土した。鉄刀の型式や鉄鎌の形状から5世紀後半を中心とする年代観が与えられる。最初に胡錆にともなう鉄鎌以外のものから説明する。

鉄鎌（第17図 表2） 1は主頭鎌である。鎌身部の先端が欠けており、茎部に木質の一部が付着している。2は4号人骨に伴って出土した脇挟三角形鎌である。鎌身部は剥離しており、実際はこれより厚かったと思われる。3は長頸鎌と思われる。茎部には木の皮を巻いた跡が認められる。4は片刃の長頸鎌である。5は鎌身が欠損している。3と5は3号人骨に伴って出土したものである。

胡錆金具（第16図-2・18図） 6・7は山形帶飾り金具片である。7は山部が幅2.6cm、谷部が1.5cmを測る。鉢は2ヶ所打たれており、内面には皮が付着する。8と9は吊手金具である。8は全長12.2cm、幅2cmをはかる。外面と内面に布の痕跡が認められる。鉢は5ヶ所打たれていると推測されるが、皮の付着のため明確でない。上部には、接続する金具が鉢で止められている。9は、観察したところ9か所鉢を打つと判断したが、皮の付着のため明確ではない。側面には袋部を支える吊り輪とみられる部分が確認でき、内面には全体に皮が付着する。皮は上方にさらに続いており、鉗部を形成する可能性がある。

胡錆に伴う鉄鎌（第16図-2・19図・20図 表2） 10～31は出土状況から胡錆の中に納められていたと推測される鉄鎌である。10は主頭鎌である。11～19は片刃の長頸鎌である。関の部分は、いずれも台形にゆるやかに開く形状である。茎部には木の皮が巻かれている。16の鎌身部には鹿角が付着している。20～31は鎌身が欠けているが、いずれも関部が台形を呈する長頸鎌である。

胡錆に伴う刀子（第16図-2・21図） 32は胡錆に伴い検出された刀子である。全長11.2cm、推定身

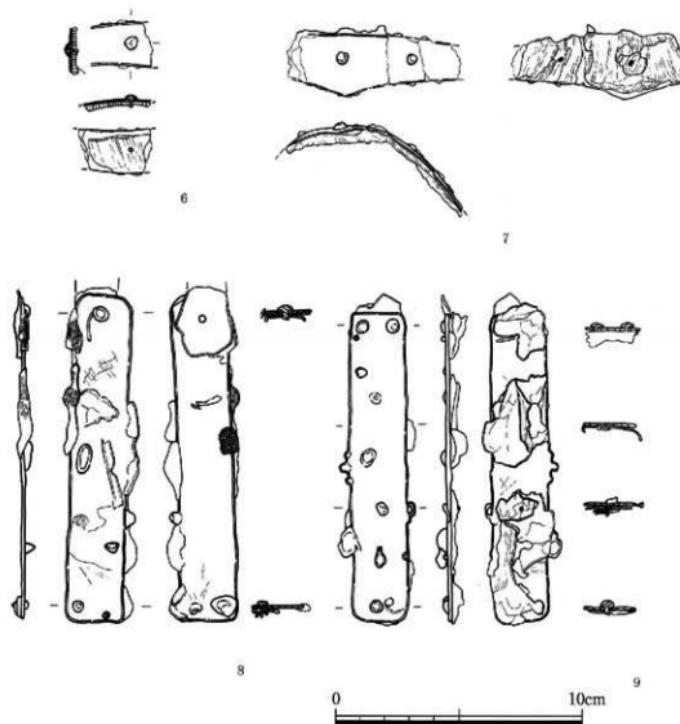


第17図 77号墓出土遺物 1

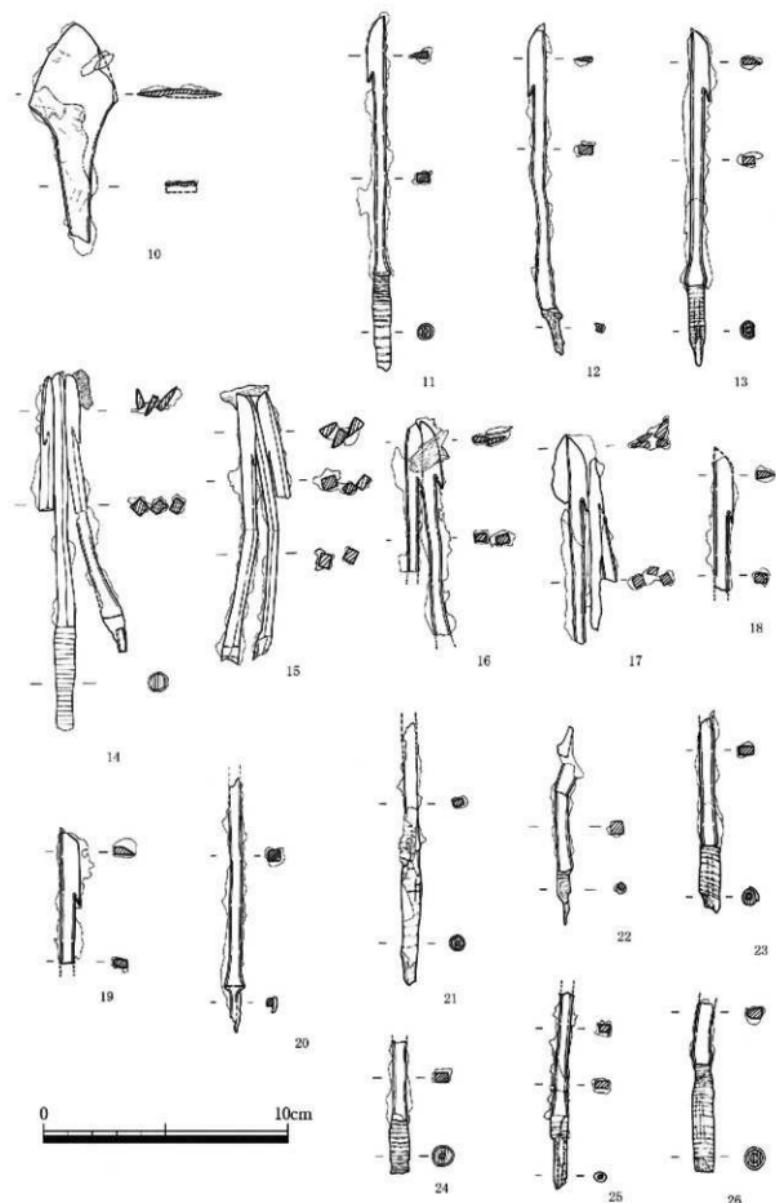
部長9cm、棟幅0.2cm、推定関部幅1.9cm、推定茎部長2.1cm以上を測る。刀身は木製の鞘で覆われていたと思われる。柄は鹿角製である。

胡籠に伴う刀（第16図-2・21図） 33は胡籠に伴い検出された鉄刀である。残存長77.3cm、身部長59.8cm、同幅3.6cm、茎部長17.5cmを測る。刀には木製の鞘が装着されていたとみられる。茎と刃部の間は欠損している。柄は、木質の上に皮を巻いていると思われる。柄間に巻き紐が残存する。茎部の間は直角で、茎尻にかけて緩やかに幅をせばめ、茎尻は隅抉とみられる。臼杵歯の編年によれば（臼杵1984）、5世紀後半の年代がえられる。35と36も胡籠に伴うとみられる刀の破片であり、残存状況は悪い。35は残存身部長15.8cmを測る。36は残存長7.8cm、残存身部長1.7cm、棟幅0.4cmを測る。

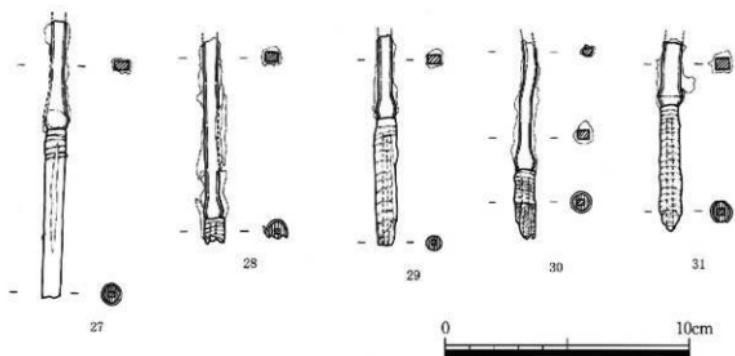
鉄劍（第21図） 34は4号人骨の頭部付近から出土した鉄劍である。残存長47.7cm、身部長35.5cm、関部幅2.9cm、関部下茎部幅3.1cm、目釘穴直径0.4cmを測る。刀部を一部欠くが、両丸造りである。木質の鞘で覆われていたと思われ、茎部は木製の柄の上に木の皮が巻いてある。目釘穴は2ヶ所確認できる。



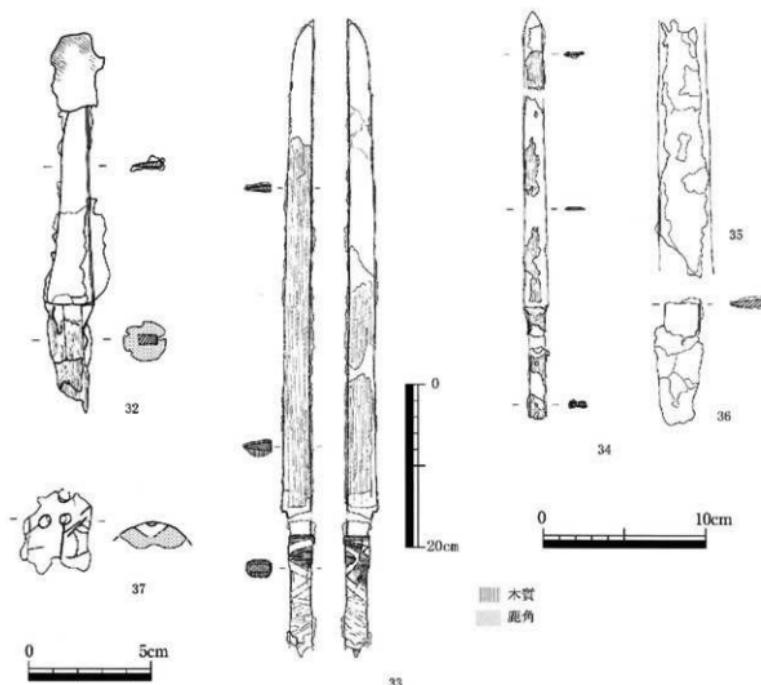
第18図 77号墓出土遺物 2



第19図 77号墓出土遺物3（胡錐にともなう遺物）



第20図 77号墓出土遺物4 (胡籠にともなう遺物)



第21図 77号墓出土遺物5

鹿角製刀装具（第21図） 37は鹿角製刀装具とみられる。厚さ0.9cmを測る。33の柄部の装具と思われる。表面に直線文および直弧文の線刻が描かれる。

### 3 78号墓

#### 3.1 遺構（第22図）

調査区の中央やや東側で検出した。南東約3mには77号墓が位置する。4層上面で竪坑を確認したが、竪坑の埋土や78号墓を覆っていた土は3層上面に乗っていることから、本来の検査面は3層上面である可能性も考えるべきで、地下式横穴墓と同時期のものと判断した。竪坑と玄室の規模が著しく小さい地下式横穴墓で、このようなタイプのものは島内では初例となる。また、遺物などの出土はまったく無いため、時期的な位置づけも難しい。

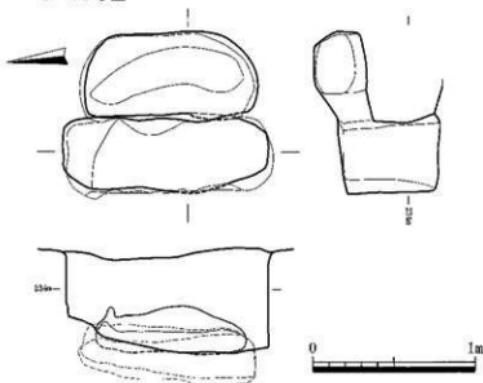
竪坑・羨門・羨道（図版10） 竪坑は隅丸の長方形で、長さ約0.5m、幅約1.3m、深さ約0.55mを測る。8.5cm幅の工具痕が縦方向に見られた。

羨門部には閉塞に用いられた石や土塊、板の痕跡は見いだせなかった。羨門部から玄室にかけて、竪坑の埋土と同様の土が流入していたことから、閉塞されていたなら板が用いられ、腐食に伴い玄室内に土砂が流入したと推定した。

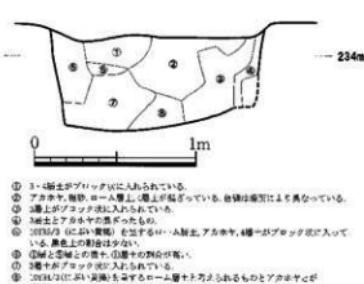
竪坑埋土（第23図） 当初、遺構の性格が不明であったため、とりあえず長軸方向に半裁した。そのため、玄室と平行する断面図になっている。分層したラインは入り組んでおり、人為的に埋め戻された感じが強いことがうかがえる。

玄室 玄室は竪坑の東側に位置している。島内では玄室が竪坑の北側に位置するものが多く、我々が内部まで調査した墓で玄室が北側以外に位置するのは、78号墓のみである。玄室の平面プランは隅丸長方形～楕円形の平入りで、長さが約0.5m、幅が約1.1m、高さは約0.3mしかない。玄室の壁面には数cm幅の工具痕が確認できた。人骨や副葬品は何も遺存していなかった。

### 4 79号墓



第22図 78号墓埋葬施設実測図 (1/30)



第23図 78号墓竪坑土層断面図 (1/30)

#### 4.1 遺構（第24図）

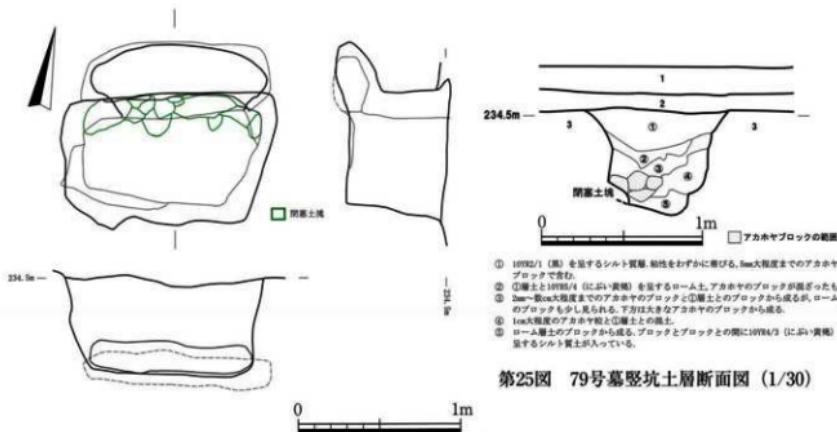
調査区の南側中央で検出した。78号墓と同じく、竪坑と玄室の規模が非常に小さい地下式横穴墓である。

**竪坑・羨門** 竪坑は長方形で、長さ約0.8m、幅約1.2m、深さ約0.5mを測る。

羨門は最大径10~40cm程度のアカホヤ塊（5層土）や6・7層土のブロックで閉塞されていた。

**竪坑埋土（第25図）** かなり細かく分層が可能であり、人為的な埋め戻しが想定できる（図版10）。なお、掘り返しをうかがわせる痕跡は確認できなかった。

**玄室** 玄室は南向きに開口している（図版11）。玄室内に竪坑からの埋土の流入は見られなかつたが、天井はわずかに崩落が認められた。玄室の平面プランは楕円形の平入りで、長さが約0.3m、幅が約1.1m、高さが約0.25mである。78号墓と同じく、人骨も副葬品も遺存していなかった。78号墓とともに、非常に小型という点では共通するが、78号墓は竪坑と玄室の平面規模がだいたい同じであるのに対して、79号墓は竪坑に比べて玄室の規模がかなり小さい点や、閉塞の方法などで相違が見られる。



第24図 79号墓埋葬施設実測図（1/30）

#### 第5節　まとめ

島内地下式横穴墓群76号墓~79号墓まで4基の墓を調査し、古墳時代人骨、甲冑、大刀、鉄剣、鉄鎌を得た。墓の形態も、78号墓、79号墓は一般的な島内で造られる地下式横穴墓と比べ、かなり規模の小さい墓である。今回の発掘調査で検出された遺構や出土品の解明が、今後の発掘調査や新手法による研究によって、さらに進展することを期待したい。

## 第4章 第3次調査

### 第1節 調査の経緯

#### 調査に至る経緯

我々は1998年に宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群の発掘調査を2回行った。墓の構造をはじめ島内地下式横穴墓群を営んだ人々の形質・生活様式を解明するために必要な情報の収集を目的とした第1次発掘調査（島内地下式横穴墓群69・70号墓）を、1998年4月2日から4月18日にかけて実施した。調査区内の大井が崩落していない2基（島内69・70号墓）の玄室を調査し、遺存状態の良好な人骨や副葬品が検出できた。引き続き、第2次発掘調査（島内地下式横穴墓群71・72・73・74・75号墓）を1998年7月14日から8月10日までおこなった。古墳時代人骨と、甲冑、大刀、鉄剣、鐵鎌、および糞石を得た。玄室が陥没していない墓を堅坑から調査できたため、いずれも保存状態はよく、追葬状況、埋葬順位、玄室の正確な形態など、埋葬に関する様々な情報が得られた。特に糞石は食生活、埋葬儀礼を解明する上での貴重な資料である。また、玄室の観察から、初葬者に赤色顔料を塗るか振りかけ、多量の鉄製品を副葬している。初葬者は、男女の区別なく、子供の例も認められた。これらは、島内の埋葬原理を解明する上で貴重な情報である。島内地下式横穴墓群の発掘調査を行うことは南九州の古墳時代人の人類学的・考古学的位置づけを行う上でも大変意義深い。貴重な人類学的・考古学的情報と人骨資料を更に増加させるために、第3次発掘調査を1999年3月5日から3月26日まで行った。

本発掘調査の経費は、文部省科学研究費特定領域研究(A)「日本人および日本文化の起源に関する学際的研究」（課題番号：10115214）の援助によった。

#### 調査体制

調査主体者：竹中正巳 鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座II助手

発掘担当者：大西智和 鹿児島大学埋蔵文化財調査室助手

調査参加者：鹿児島大学学生諸氏（法文学部：新里貴之、相美幾雄、鷲島慎吾、外山隆之、末吉広海、森田太樹、稻村雅文、松元一浩、大河奈津子、稻富陽子、歯学部：窪田直子）

#### 報告書作成の参加者

整理作業：鐘ヶ江賢二・安柄祐樹・前畠辰伍・大西智和・ほか鹿児島国際大学大西ゼミの学生諸氏  
実測者：鐘ヶ江賢二・福井俊彦・安柄祐樹・前畠辰伍・大西智和

トレス：鐘ヶ江賢二・福井俊彦・安柄祐樹・前畠辰伍

図面レイアウト：鐘ヶ江賢二・福井俊彦

執筆者：安柄祐樹・鐘ヶ江賢二・大西智和・竹中正巳

## 調査の経過

第3次発掘調査では南北約63m、東西約18mを調査対象とした（図版11）。えびの市教育委員会により、すでに調査区内のトレンチ調査が実施されていたため、トレンチ・遺構配置図をもとに、トレンチによって確認された竪坑の検出を行った。本調査ではあわせて5基（87・88・89・90・91号墓）の地下式横穴墓の発掘調査を行った。また、土坑墓状の遺構が1基確認され、調査を行った。

## 第2節 基本層位

基本層位は1・2次調査と同様である。前章第2次調査の記述を参照されたい。

## 第3節 トレンチの調査（第26図）

えびの市教育委員会が先に実施したトレンチ調査の結果に基づき、基本的には竪坑の周辺に、すでに掘られたトレンチをトレースして設定した。竪坑検出後は必要に応じて拡張を行っている。また、地形の段落ちや盛り上がっている部分が確認できたため、その形状や性格を確認するために、随所にトレンチを設定した。

### 1 1 トレンチ

89号墓とSK01を検出するためのトレンチである。SK01は調査時、地下式横穴墓の竪坑と想定しているが、トレンチを拡張して調査を行ったところ、地下式横穴墓ではないことが判明した。

トレンチ断面図1（第27図） 北側で89号墓の竪坑が確認できた。その南側にはアカホヤと3層土が混ざる層が広く見られたが、これは地下式横穴墓の築造に関係した土層であると考えられる。

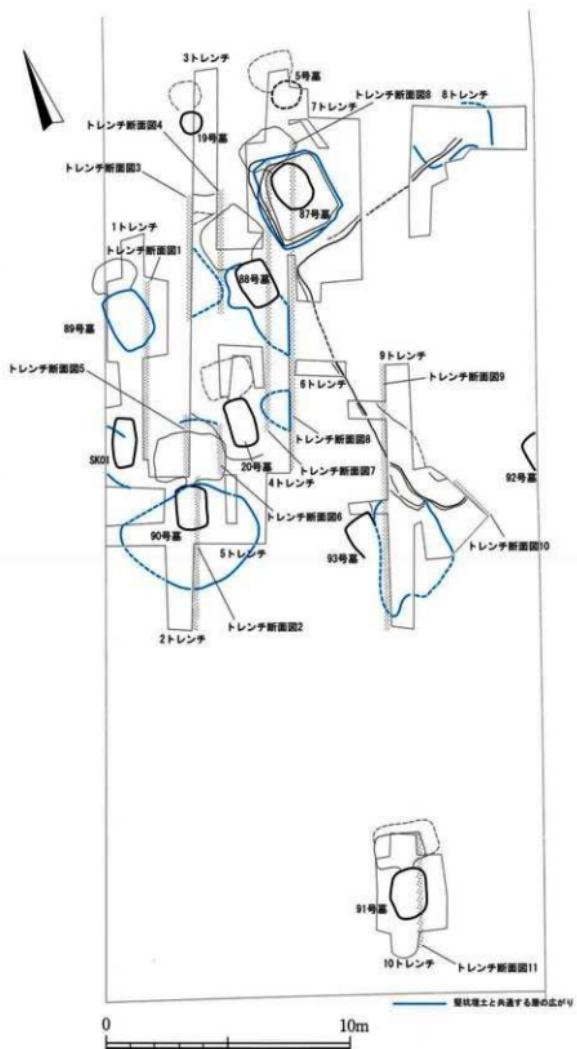
### 2 2 トレンチ

90号墓を検出するために設定した。8層の砂礫土は、これまでの調査から竪坑埋土として選択的に用いられる傾向があることが明らかになっているが、この砂礫土を含む上が南側に広く見られることがわかった。その範囲を明らかにするために、東西に拡張して調査を行った。その結果、砂礫混じりの土は竪坑の左右と後方にはかなり広がっているが、玄室方向には広がらないことがわかった。第1次調査でも同様の知見を得ており、墳丘状の高まりが、玄室方向にあったことを示すものだと考えられる。

トレンチ断面図2（第27図） 玄室側の④層（黒色土+5・6・7層土との混土）と、⑤層（黒色土と砂礫層との混土）は、90号墓のマウンドに相当する可能性がある。

### 3 3 トレンチ

南側で90号墓の竪坑およびその埋土の広がりを確認できた。また、中央部あたりで、その所属は不明であるが、竪坑埋土に用いられるのと同様の土の広がりが確認できた。既に発掘調査されてい



第26図 3次調査トレンチ配置図 (1/200)



トレンチ断面図1 ① 3号土と8層土との混土、8層土が土である。②層は8号杭の被坑埋土。

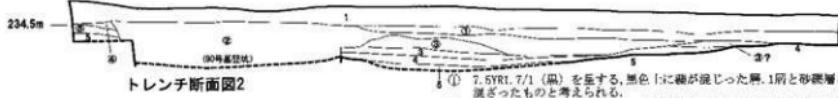
③ 8層の砂礫土、わずかに3層土が混ざっている。色調は土色に比べるとかなり明るい。

④ 3層土と砂礫土が混ざり、8層土が土である。

⑤ 3層土に動物の骨が、被坑内に含まれる骨が見られる。骨が見られないことから、

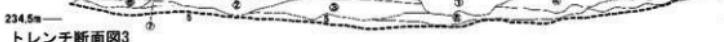
2次堆積の可能性がある。

⑥ 10YR3/2 (黒褐色) シルト質土で、粘性をやや帯びている。1mm程度のアカホヤ粒を含む。



トレンチ断面図2

- ① 7.YR1.7/1 (黑) を呈する。黑色土に纏が混じた層。1層と砂礫層とが混ざったものと考えられる。
- ② 8層の砂礫土。被坑内のものは、ほぼ純粋な8層土であるが、被坑外に近くもののは黑色土を含むためやや暗い。
- ③ 黑色土と6・7層土との層 (アカホヤ) の間は、6・7層土が土となっている。
- ④ 3層の黑色土と5層 (アカホヤ) 、6・7層土との混土。
- ⑤ 黑色土と砂礫層との混土。



トレンチ断面図3

① 10YR2/1 (黑) を呈するシルト質土で、粘性をやや帯びる。

2cm大程度までのアカホヤ粒を含む。

② 黄褐色土と8層土との層 (アカホヤ)。

③ 他の層 (土) をほとんど含まない砂礫層上。

④ 10YR2/2 (黒褐色) を呈する。粘性をほとんど含まないシルト質土

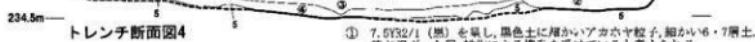
が土で、これにアカホヤ・6・7層土がブロック状に混ざる。

⑤ 10YR2/1 (黑) を呈するシルト質土で、粘性をほとんど含まない。

アカホヤ粒、3cm程度までの砂を含む。

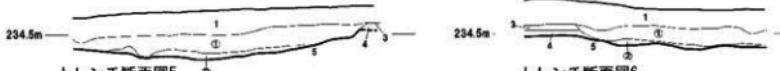
⑥ 他の層の土をほとんど含まない砂礫層上。

⑦ 7.YR3/1 (黒褐色) を呈するシルト質土。⑤と同じものかもしれない。



トレンチ断面図4

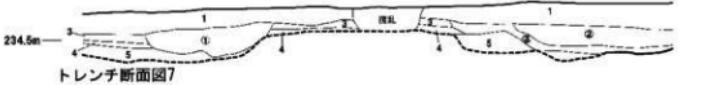
- ① 7.YR3/1 (黒) を呈し、黒色土に暗いアカホヤ粒を含む。6・7層土。
- ② 砂が混ざった層。耕作による擾乱を受けていると考えられる。
- ③ 他の層の土をほとんど含まない砂礫層上。
- ④ トレンチ断面図3の④と同じ。
- ⑤ トレンチ断面図3の⑤と同じ。



トレンチ断面図5 トレンチ断面図6

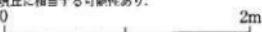
トレンチ断面図6

- ① 他の層の土をほとんど含まない砂礫層上。
- ② 10YR2/2 (黒褐色) を呈するシルト質土で、粘性をやや帯びる。
- ③ 6層土が土で、それに黒色土、アカホヤが少量混ざる。
- ④ 第3トレンチ西壁南側の①と同じ。
- ⑤ 第3トレンチ西壁南側の②と同じ。

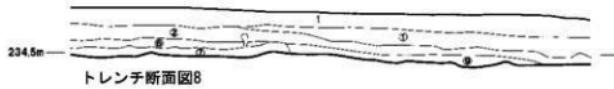
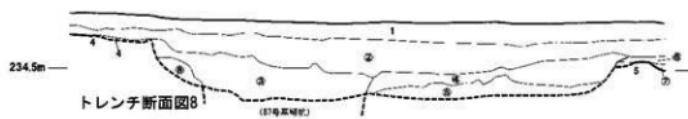


トレンチ断面図7

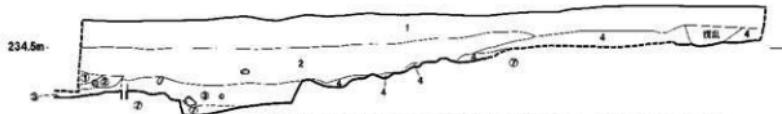
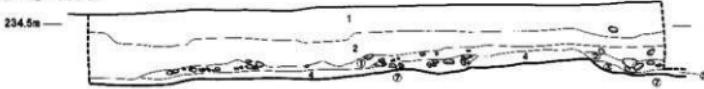
- ① 他の層の土をほとんど含まない砂礫層上。
- ② 砂礁土。88号杭の被坑杭とともにもう一つ。
- ③ 10YR2/2 (黒褐色) を呈するシルト層で、粘性をやや帯びる。
- ④ 黑色土と砂礫土との混土。
- ⑤ 黑色土とアカホヤ、6・7層土との層に、色調は若干異なる。
- ⑥ 色調は7.YR1.7/1を呈する。黑色土に5cm大程度までの砂が混じる。
- ⑦ 他の層の土をほとんど含まない砂礫層上。
- ⑧ 他の層の土をほとんど含まない砂礫層上。
- ⑨ 6層土と考えられるものとアカホヤとの層上。
- ⑩ 黑色土は10YR2/1 (黑) を呈する。黑色土に6層のアカホヤ、6・7層土に少しがれ混ざっている。
- ⑪ 88号杭の被坑杭に相当する可能性あり。



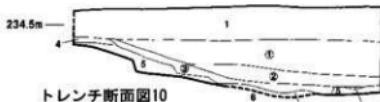
第27図 3次調査トレンチ断面図1 (1/40)



- ① SYR1.7/1(黒)を呈するシルト質土で、粘性は弱い。
- ② SYR1.4(黒)を呈する砂質土上との混土であるが、含まれる礁の粒は小さい。
- ③ 10YR4/4(赤)を呈する他の層の土とはほとんど含まれない砂質層上、87分離成因の堆土。
- ④ 10YR5/4(赤)を呈する他の層の土とはほとんど含まれない砂礫层二、トレンチ断面図7の刻定点を下する。
- ⑤ 10YR2/3(黒)を呈する。
- ⑥ 10YR5/6(黒)を呈するシルト質土で粘性をやや持てる。
- ⑦ 10YR5/6(黒)を呈する。アカホヤがブロック状に残っている。
- ⑧ 10YR2/2(黒)を呈するシルト質土上、黑色土とアカホヤ、6・7周辺との堆土で5cm程度までの礁も含まれる。
- ⑨ 10YR2/2(黒)を呈するシルト質土上で、粘性は弱い。⑩に対応するのかもしないが色調は異なっている。
- ⑩ 後の層の土をほとんど含まない砂質層上、85分離成因の堆土に何うものと考えられる。
- ⑪ 他の層の土をほとんど含まない砂質土。
- ⑫ 10YR3/3(緑)などを呈するシルト質土で粘性は弱い。6周辺とアカホヤとの混土とされる。
- ⑬ 10YR2/2(黒)を呈するシルト質土上、黑色土とアカホヤ、6・7周辺との堆土で5cm程度までの礁も含まれる。



- ① 10YR1.7/1(黒)を呈する砂質粘性土、礁を多量に含み、それほどしまっていない。
- ② 10YR4/4(緑)を呈する砂質土。
- ③ 10YR5/8(黄)、10YR3/2(黒場)、10YR3/4(暗緑)を呈する粘質土、黑色土とアカホヤとの混土。



- ① 10YR1.7/1(黒)を呈するシルト質土で、粘性をやや持てる。5mm程度のアカホヤや、10cm程度までの礁をごく少含む。
- ② 10YR2/1(黒)を呈するシルト質土で、粘性を弱める。
- ③ ②層土を下とし、それにアカホヤが混ざった層。



- ① 2層に残るが2層ともアカホヤ、7周辺の小さな礁を含む。
- ② 10YR2/2(黒場)を呈するシルト質土で、粘性をやや持つ。3cm程度までのアカホヤや、5cm程度までの礁を少含む。
- ③ 10YR1.7/1(黒)を呈するシルト質土で、粘性を弱める。3cm程度までのアカホヤや、6・7周辺に多く含む。
- ④ 10YR2/3(黒)を呈するシルト質土で、粘性をやや持つ。
- ⑤ 3層の黑色土が下とし、それにアカホヤなどがある。
- ⑥ 3~6層の土層は一だつでない。

0 2m

第28図 3次調査トレンチ断面図2 (1/40)

る19号墓の豊坑も確認された。

**トレンチ断面図3**（第27図） 砂砾土と黒色土との混土や5~7層土と黒色土との混土が広範囲で確認された。88号墓または89号墓に伴うものであると想定した。

**トレンチ断面図4**（第27図） トレンチ断面図3と同様の、地下式横穴墓に関わると想定できる層が広範囲で確認されている。

**トレンチ断面図5・6**（第27図） 砂砾土を主体とする層が確認されている。通常、豊坑の埋土に用いられるものであるが、この部位は90号墓玄室の位置に相当することから、20号墓に伴うものの可能性も否定できない。

#### 4 4トレンチ

87号墓、88号墓および、その豊坑埋土と関係する砂砾混じり土の広がりが確認されている。南側では、所属は不明であるが、豊坑埋土に用いられるのと同様の土の広がりが確認されている。また、北側ではすでに調査が行われた5号墓が確認された。

87号墓の豊坑は、方形の段落ちの内部に設けられていることがわかったため、その段落ちの形状を確認するために拡張を行った。その結果、南北約3.5m、東西約3mの長方形で、深さは約0.3mであることが明らかになった。

**トレンチ断面図7**（第27図） 88号墓の墳丘の可能性が指摘できる⑩層が、87号墓の豊坑の周囲に設けられた段落ちによって切られていることから、88号墓の方が87号墓の築造よりも古いと推定できるかもしれない。

**トレンチ断面図8**（第28図） ③層と④層との境界は追葬の際の掘り込みラインになるのかもしれない。豊坑周囲の段落ちは、豊坑の北側にはあまり延びないが、南側にはかなり広く延びており、かなり純粹な8層土が充填されている。まったく同じ事例は他に確認できていないが、第1次調査で発掘した69号墓豊坑では、豊坑の40cmほど外側を10cmほど掘り下げて、砂砾混じりの土が盛り上げられていた事例と類似する。

#### 5 5トレンチ

88号墓を確認するために設けたが、すでに調査されている20号墓の豊坑も検出した。

#### 6 6トレンチ

7トレンチで確認した方形状の段落ち部の延長線上に設けたトレンチ。東端部でそれが連続し、さらに南側に延びることがわかった。

#### 7 7トレンチ

87号墓の豊坑を検出するために設けたトレンチ。トレンチの南側で、方形状に延びるわずかな段

落ちを確認した。

## 8 8トレンチ

7トレンチで確認した方形状の段落ちの東への連続状況を確認するために設けたトレンチ。トレンチの中ほどで、それより東への連続を確認することはできなかった。その辺りには豊坑埋土の埋め戻しに用いられたとの上に広がりが確認できた。

## 9 9トレンチ

6トレンチや7トレンチで確認された方形状の段落ちが、南側にどのように連続するのかを確認するために設けたトレンチである。やや不明瞭ではあるが、このトレンチ内で、東側に曲がっていることがわかった。

6・7・9トレンチで確認された方形状の段落ちをつなぐと、1辺約11.5mの方形状に復元できると思われる。その内側に向かってわずかにではあるが高まりを有している部分があるため、この方形状の区画は、マウンドに相当する可能性を指摘したい（図版12）。マウンドは島内の場合、基本的にはそれぞれの墓の玄室上方に設けられると考えているため、このマウンドは、9トレンチの東側で確認された92号墓に伴うものと考えたい。

**トレンチ断面図9**（第28図） 南側で砂疊層土を中心とする層が確認できたが、これは、93号墓の豊坑埋土に関連するものと考えられる。段落ちは、比高差約5cmほどである。そこから北側に向かって4層または5層アカホヤの上面が約0.5m高くなる（図版11）。この部分は、92号墓の墳丘下位に相当すると推定している。このように基本層位の残り具合が良好なのは、墳丘があったために、その下方の土砂は除去を免れためだと考えられる。

**トレンチ断面図10**（第28図） 中ほどで方形の段落ち部分を確認したが、その比高差は5cmほどである。そこから北側に向かって、4層および5層のアカホヤの上面が約30cm高くなっていく。

## 10 10トレンチ

91号墓を確認するために設けたトレンチである。豊坑検出後、適宜東西方向に拡張した。

**トレンチ断面図11**（第28図） ⑦層土は黒色土が主体で、これは豊坑の埋土に通常用いられるものとは異なっている。そのため、この層は、地下式横穴墓が築造されてから豊坑が埋め戻されるまでに、おそらく、自然に堆積したものであると思われる。造られてから使用されるまでに、一定の時間幅が見込める証拠になるものかもしれない。

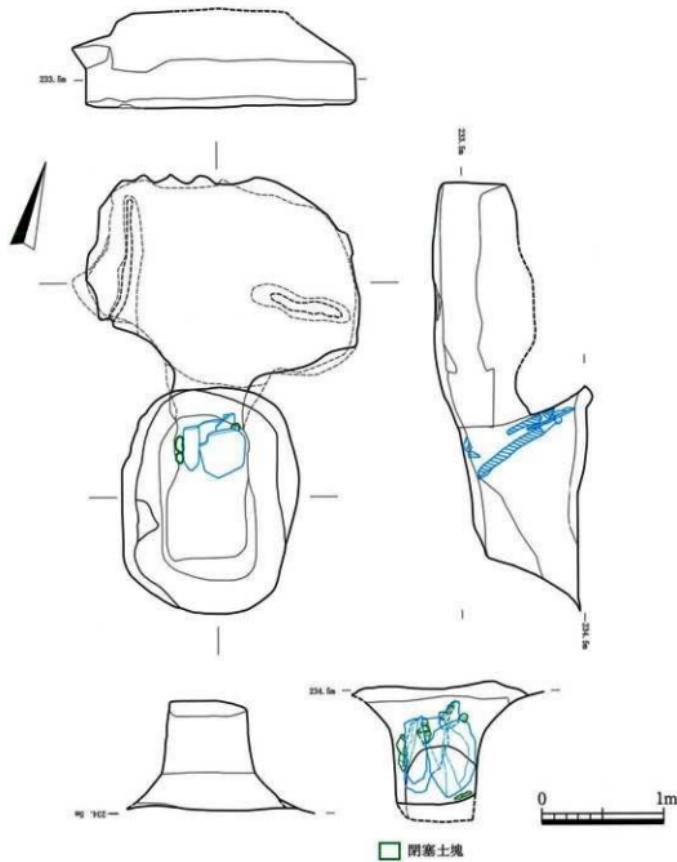
## 第4節 遺構の調査

### 1 87号墓（第29図）

#### 1.1 遺構

調査区の中央、北側で検出した（図版12）。すぐ西側には88号墓が位置する。竪坑を取り囲むよう、長さ約3.6m、幅約3mの段落ち（土坑）を確認した。土坑内には、竪坑に埋め戻されたのと同じ土（砂礫土）が見られた。このような土坑を設けた理由は不明であるが、竪坑の埋土が竪坑上方にあまり高く盛り上がらないようにするために、あるいはこの部分の廃土をマウンドとして用いたためかもしれない。

なお、この土坑の北端部は竪坑の北端部とほぼ一致している。つまり土坑は、87号墓の玄室方向には広がっていない。このことは、玄室方向にはマウンドがあったという我々の想定と整合的である。



第29図 87号墓埋葬施設実測図 (1/40)

**豎坑埋土** (第30図) 分層はほとんど行うことができなかつたが、豎坑を再度掘り返した際に残つたと思われるラインを1本確認することができたため、玄室は初葬後1回以上開けられたと推定できる（図版13）。

**豎坑** 豊坑は隅丸長方形で、長さ約1.8m、最大幅約1.4m、深さ約1.0mを測る（図版13・14）。上方の傾斜はなだらかで、途中から直に床面に至る。そのため、床面は長さ約1.1m、幅約0.6mとやや狭い。豎坑にはステップは確認できなかつた。また、工具の痕跡も良くわからなかつた。

**羨門** 羨門は大小4枚の板石で閉塞されていた（図版14）。板石は大きいもので長さ約82cm、幅約49cm、小さいもので、長さ約44cm、幅約10cm、閉塞石4枚の総重量は約84.9kgである。隙間に石の他、アカホヤ塊や粘土状の土塊が詰められていた。

**羨道** 羨道は床面での幅約55cm、高さ約60cmで、上方は丸みを帯びる。羨道の長さは約40cmである。豎坑の短辺側の床面幅が狭いため、羨道の幅は豎坑の床面の幅とほとんど一致する。

**玄室** 玄室の天井の一部は崩落していた。砂礫層土である8層が天井部に相当していたため、崩落しやすかったものと考えられる。

玄室の平面プランは隅丸長方形～楕円形を呈する平入りである。奥に向かって左側は長方形に近く、右側は楕円形に近い。長さが約1.6m、幅が約2.2m、高さが現状で約0.8mである。奥に向かって左側には南北方向に屍床状の施設があり、右側にも東西方向にわずかな高まりが形成されていた。

玄室の壁面は床面から40cmほどは直立気味に立ち上がっている。天井形態は残存部から推定すると平らに近いドーム形だったと思われる。なお、玄室内に工具痕は確認できなかつた。

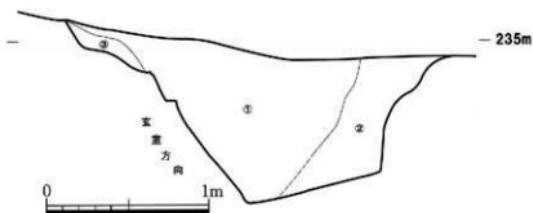
## 1.2 遺物

### 1.2.1 出土状況（第31図）

玄室内には2体の人骨が遺存している。1号人骨が奥壁に平行に東頭位で、2号人骨は西壁に沿つて南頭位で検出された。2体とも仰臥伸展葬である。1号人骨は男性・熟年（図版15）、2号人骨は性別不明・小児（5～6歳）（図版15）と判定できる。赤色顔料は1号人骨には付着しているが、2号人骨には付着していない。2号人骨には刀子と鉄鎌が副葬され、左下肢部に矢柄の痕跡がある。また、1号人骨の右骨盤下から破折した骨鎌が検出されている。出土状況から、この骨鎌は臀筋に突き刺さっていた可能性が考えられる。もし骨鎌が射込まれたのであれば、その理由は事故、私闘や戦闘が考えられる。しかし、臀筋における血管の走行状態を考えると、この傷が致命傷にはならなかつたと推測される。豎坑埋土の観察から、玄室は初葬後1回以上開けられたと推定できる。追葬のために再度玄室が開けられたとすると、1号人骨が先に埋葬され、2号人骨が後で埋葬されたと考えるのが妥当であろう。

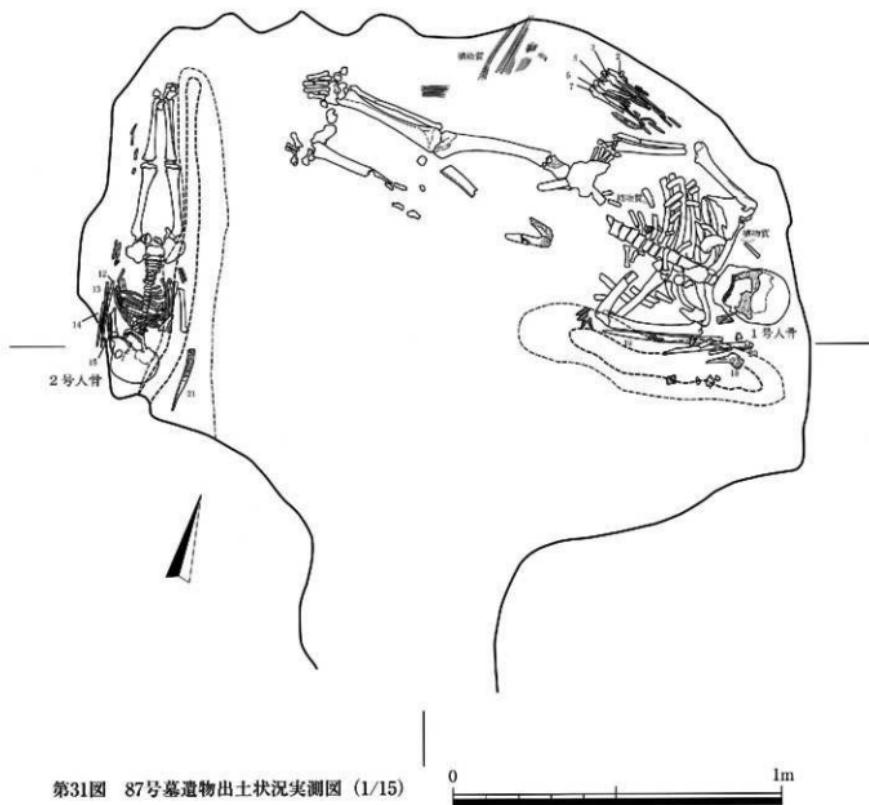
### 1.2.2 玄室内出土遺物（図版35・36）

87号墓からは、1号人骨右側から鉄鎌が集中して出土するとともに、刀子や骨鎌などが出土して

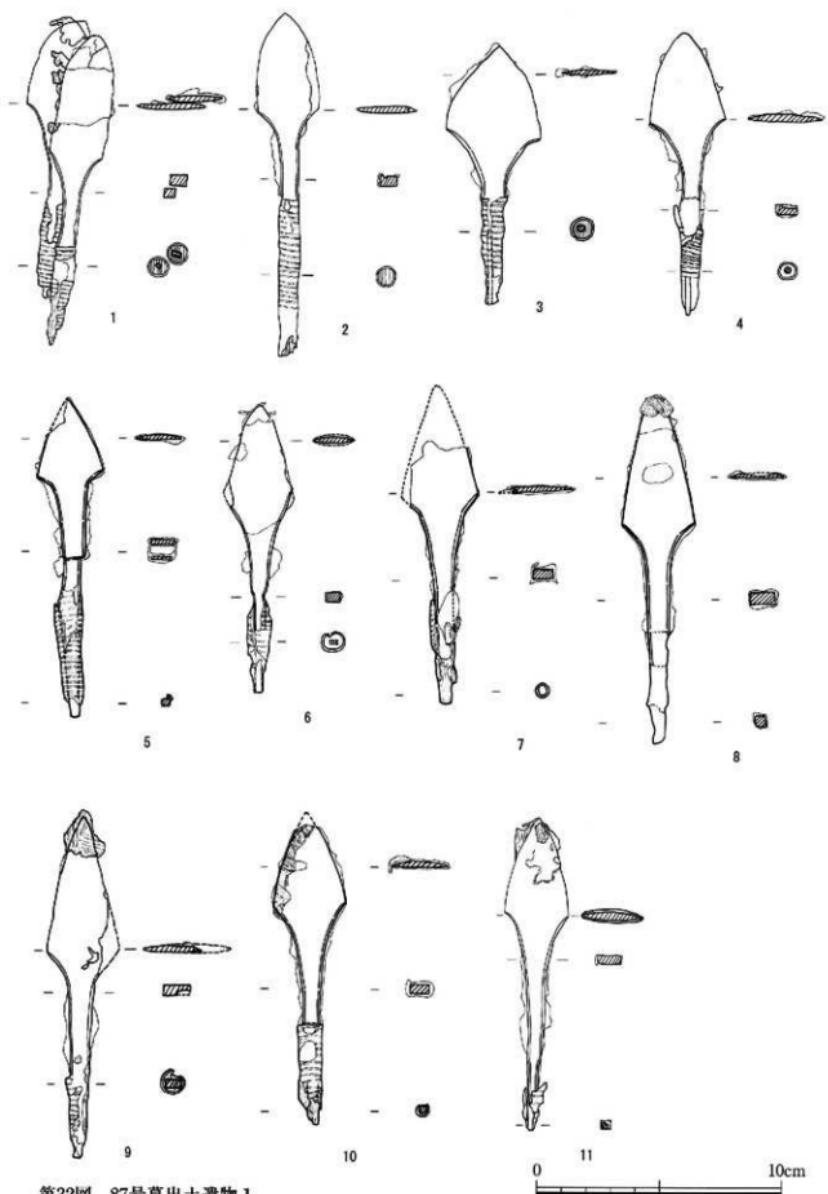


- ① 基本層位5層の砂疊層、色調は②層よりやや暗い。
- ② 基本層位5層の砂疊層。
- ③ 10YR2/2(黒褐色)を呈するシルト質土で粘性は帶びてない。黒色土にアカホヤがブロックで混ざった層。

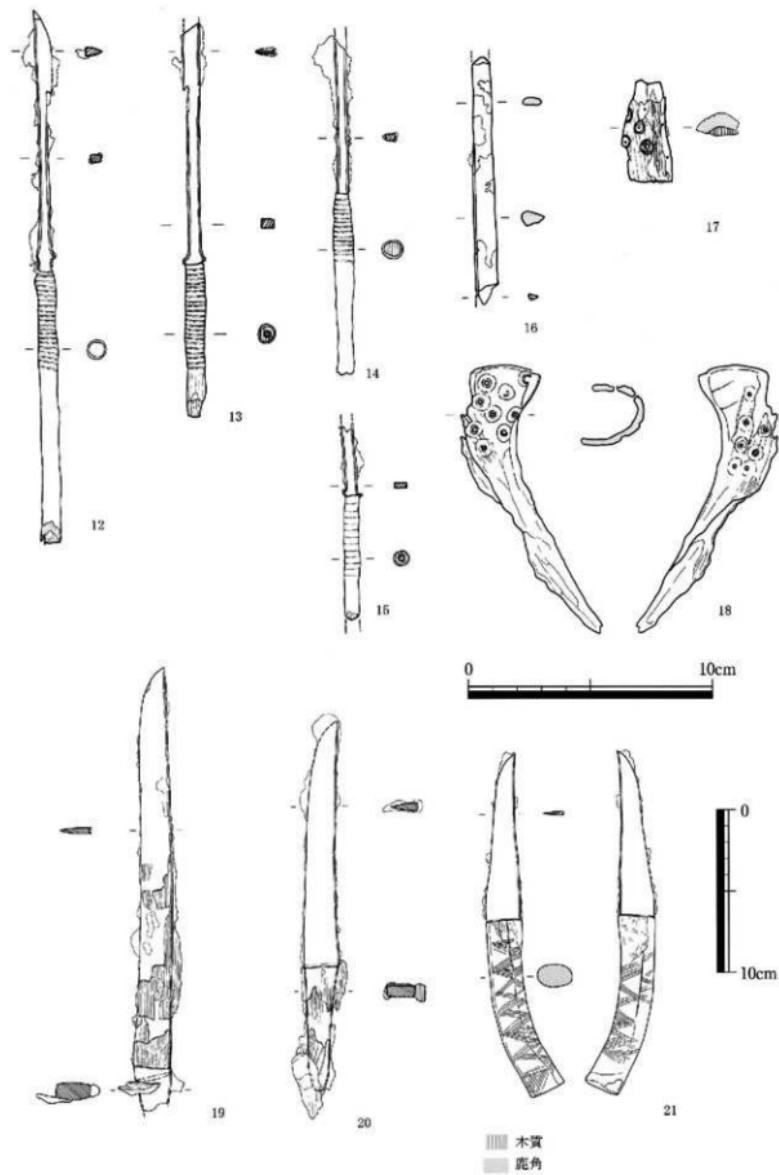
第30図 87号墓竪坑土層断面図 (1/30)



第31図 87号墓遺物出土状況実測図 (1/15)



第32図 87号墓出土遺物 1



第33図 87号墓出土遺物 2

いる。鉄鎌の間の形状から、5世紀後半から6世紀後半の年代幅をもつ遺物であるとみられる。

**鉄鎌**（第32図・33図 表3） 1～4、6～11は三角形鎌である。茎部には木質の上から木の皮が巻かれている。5は圭頭鎌である。12と13は片刃の長頭鎌である。茎部には木の皮が巻かれている。逆刺は明瞭でなく、間は台形を呈する。14と15は長頭鎌とみられるが鎌身を欠く。13と15の間は棘状を呈しており、6世紀後半頃の所産と考えられる。

**骨鎌** 16は1号人骨の右骨盤下から出土した骨鎌で、脛筋に突き刺さっていた可能性がある。残存長10.2cm、身部幅0.9cm、同厚0.6cm、茎部残存長0.8cmを測る。先端部が欠損しており、茎部も欠けているものと思われる。

**鹿角製刀装具**（第33図） 17は厚さ0.9cmを測る。穿孔の痕跡が4ヶ所見られるが貫通していない。18は残存長12.1cm、幅2.4cm、厚さ2.5cmを測る。穿孔の痕跡が表側に7ヶ所、裏側に9ヶ所見られ、貫通していないものもある。

**刀子**（第33図） 19は残存長34.7cmを測る。鞘の木質が一部残存する。20は全長22.7cm、身部長15.1cm、棟幅0.5cm、関部幅2.2cm、推定茎部長7.6cmを測る。柄には木質と鹿角が装着されている。21は2号人骨の頭部近くに副葬されていたもので、全長21cm、身部長10.2cm、棟幅0.2cmを測る。鹿角製の柄が完全に残っており、鋸歯文の線刻が描かれる。刃部は鏽におおわれているが、遺存状態は良い。

## 2 88号墓

### 2.1 遺構（第34図）

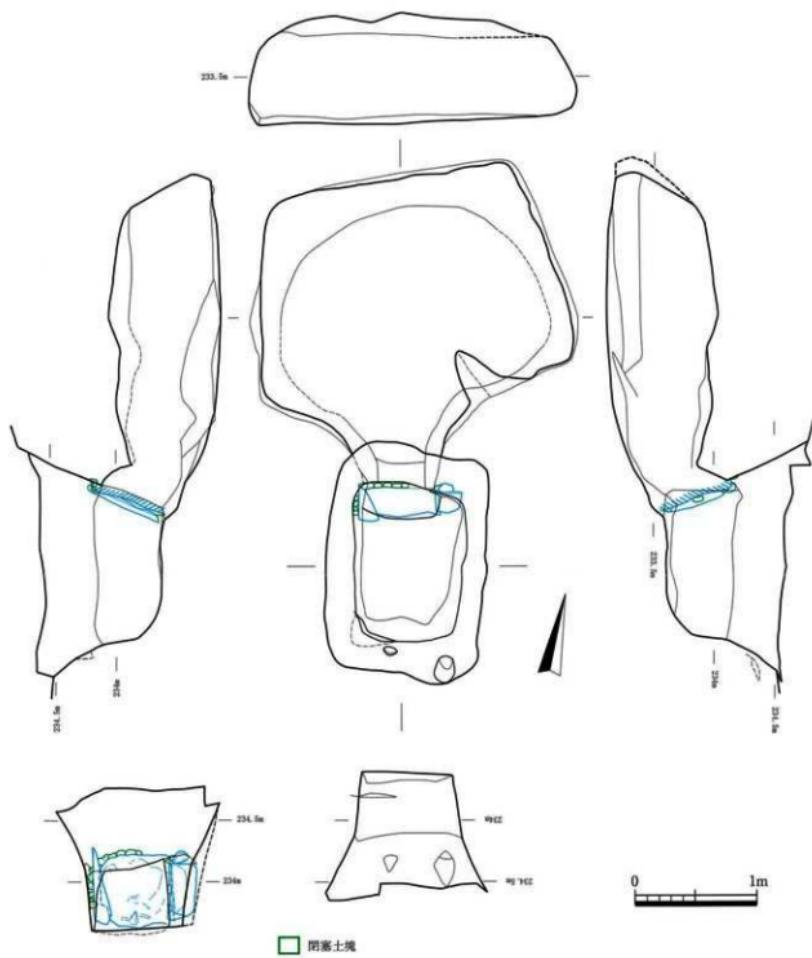
調査区の中央部北側で検出した。87号墓の西隣で、東側約5mには89号墓が位置する。竪坑の西側と南側には、竪坑埋土と同様の砂礫層土の広がりが確認できた。なお、砂礫層土は玄室が位置する北側には見られなかった。

**竪坑** 竪坑は隅丸長方形で、長さ約1.3m、幅約0.9m、深さ約1.0～1.2mを測る。竪坑の南面には上方に2ヶ所、下方に1ヶ所のステップが確認できた。ステップは、幕作りの際や埋葬の際の上り下りのために作られたと考えられる。竪坑の埋土は一様で分層のラインを引くことができなかった（図版16）。

**羨門** 羨門は大型の板石1枚、小型の板石2枚で閉塞されており（図版16）、その総重量は約58.3kgである。また、隙間には小さな石やアカホヤの塊が詰められていた。

**羨道** 羨道は竪坑北壁の西寄りに取り付けられている。床面での幅は約60cm、天井部の幅約50cm、高さは50～60cmである。

**玄室** 天井部が一部崩落していた。玄室は南向きに開口し、平面プランは長方形の平入りで、長さが約2m、幅が約2.1～2.6m、高さが約0.9mを測る（図版17）。奥に向かって右側の南壁から長さ45cm、高さ10cmの高まりが延びており、屍床を意識したものかもしれない。天井の形態はドーム形である。



第34図 88号墓埋葬施設実測図 (1/40)

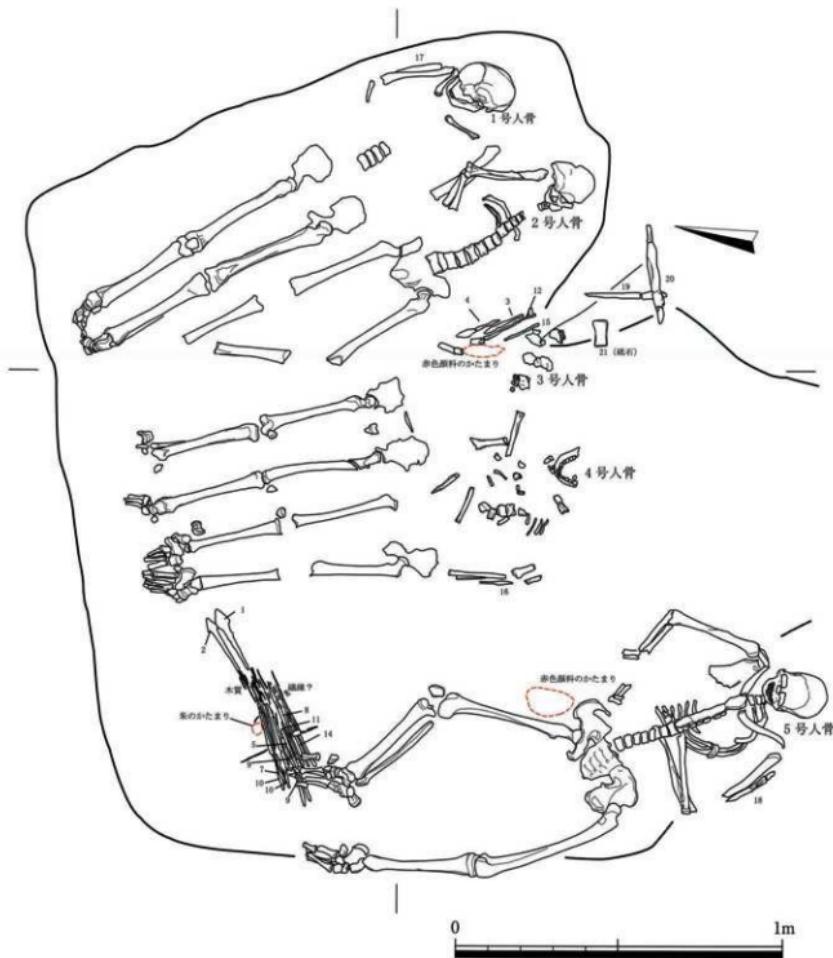
## 2.2 遺物

### 2.2.1 出土状況 (第35図)

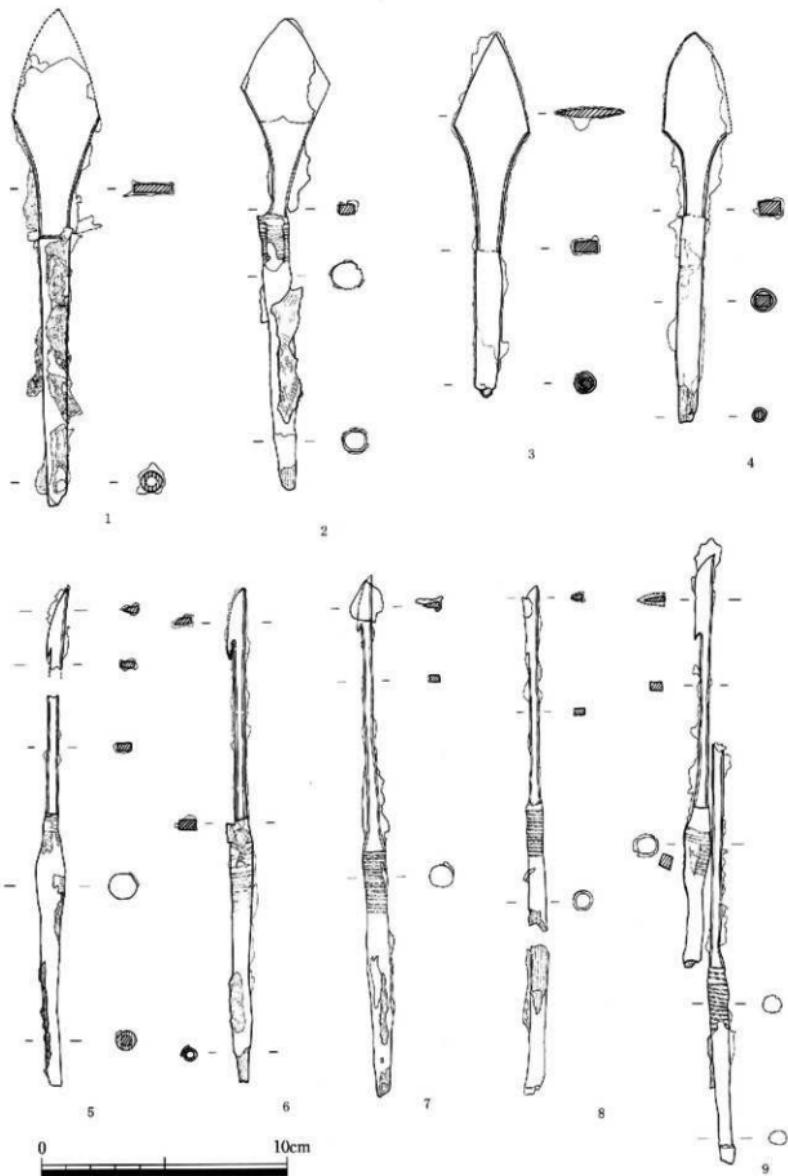
玄室内には5体の人骨が遺存している。5体とも、南頭位の仰臥伸展葬である。東側から西側へ、1、2、3、4、5号人骨と呼ぶ。5号人骨の両膝は、開いている。玄室開口時、天井は崩落し、崩落土は1、2、3、4号人骨を覆っていた。1号人骨は女性・熟年、2号人骨は女性?・熟年、3号人骨は性別不明・壮年、4号人骨は性別不明・若年(15~16歳)、5号人骨は男性・壮年(図版18)と判定

できる。赤色顔料は、全個体に付着していた。4号人骨と5号人骨の足先の間には、まとまった数の鉄鎌が植物質の容器中に副葬されていた（図版17）。また、玄室の入り口部分に、砥石、鉄剣、刀子が副葬されていた。鉄剣は、羨道の東壁から続く玄室入り口の土砂の高まりに立てかけられていた。

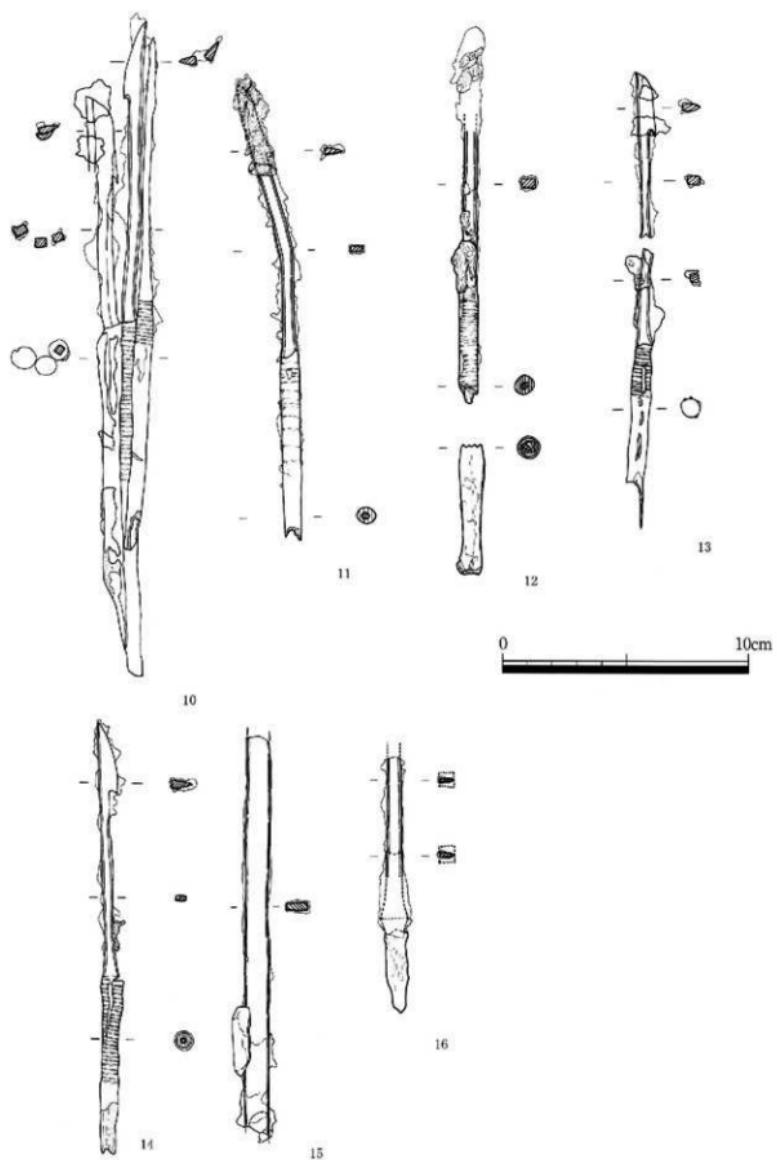
埋葬順位については、5号人骨の足先に多数の鉄鎌が副葬されていることから、5号人骨が初葬者の可能性を指摘しておきたい。玄室の東側は、1号人骨から、2号、3号、4号の順で埋葬されたと考



第35図 88号墓遺物出土状況実測図 (S=1/15)



第36図 88号墓出土物 1



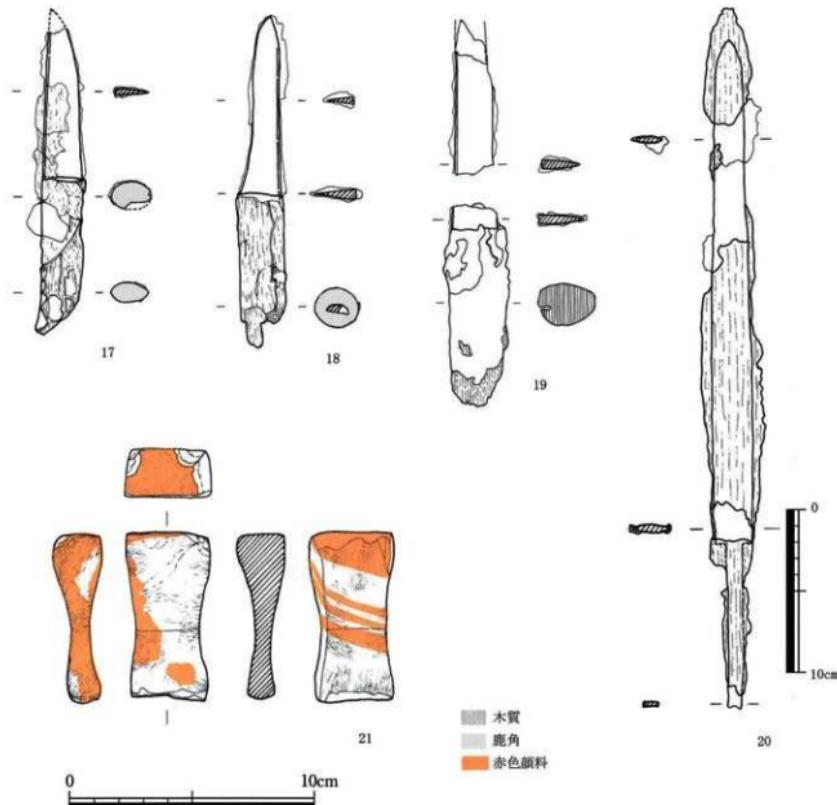
第37図 88号墓出土遺物 2

えられる。

### 2.2.2 玄室内出土遺物（図版37・38）

88号墓では、4号人骨と5号人骨の足先の間にまとまった数の鐵鎌が有機質の容器に入れられた状態で出土している。そのほかに刀や剣、砥石が出土している。鐵鎌の形状から5世紀後半を中心とする遺物であると考えられる。

鐵鎌（第36図・37図 表4） 1～3は圭頭鎌である。茎部は木質が装着され、木の皮で覆われている。4は三角形鎌である。5～11、13、14は片刃の長頭鎌である。関はおよそ台形状を呈する。茎部には木の皮が巻かれている。12と15、16は鎌身部が不明である。16の茎部には鹿角が付着している。



第38図 88号墓出土遺物 3

る。

**刀子** (第38図) 17~19は刀子である。17は残存長12.5cm、身部長6.1cm、棟幅0.3cm、関部幅1.6cmを測る。刃部の先端を欠く。茎部は鹿角製である。18は残存長13.6cm、推定身部長7.4cm、棟幅0.4cm、関部幅1.7cmを測る。茎部は鹿角製である。19は残存長16.3cm、残存身部長8.3cm、棟幅0.4cmを測る。木製の柄を装着する。

**鉄劍** (第38図) 20は両丸造りの身をもつ鐵劍である。残存長40.9cm、身部長30.8cm、関部幅2.3cm、茎部幅1cm、残存茎部長10.1cmを測る。刃部の鞘と柄は木質と思われる。柄の目釘穴は不明である。

**砥石** (第38図) 21は全長7cm、最大厚1.9cm、最短厚0.7cmを測る。表面には使用痕と思われる線状痕が認められ、赤色顔料が付着する。

### 3 89号墓

#### 3.1 遺構 (第39図)

調査区のやや北側の西端部に位置する (図版19)。約5m南側にはSK01が、約8m南側には90号墓が、約5m東側には88号墓が位置する。

**豎坑埋土** (第40図) ②層の上面および③層上面が、豎坑の掘り返しを示す可能性が考えられる。しかし、豎坑埋土の半分が既掘されていたため、その部分での状況が不明なため断定は難しいが、玄室は初葬後、少なくとも2回は開けられたと推定しておきたい (図版19)。

**豎坑** 豊坑は隅丸長方形で、長さ約2.2m、幅約1.5m、深さ約1.0mを測る。豎坑の南側には、階段状のステップが1段確認できた。このステップは、墓作りの際や埋葬の際の上り下りのために作られたと考えられる。なお、刃部の幅が4cmほどのT.工具が観察できた。

**羨門** 羨門は15枚の板石で閉塞されていた (図版20)。小型の板石が用いられているが枚数が多いため、その総重量は約144.6kgになる。なお、この総重量は我々が調査を実施したものの中では最大となる。

**羨道** 豊坑北側のほぼ中央部に作られていて、幅約65cm、高さ約55cm、長さ約40cmである。

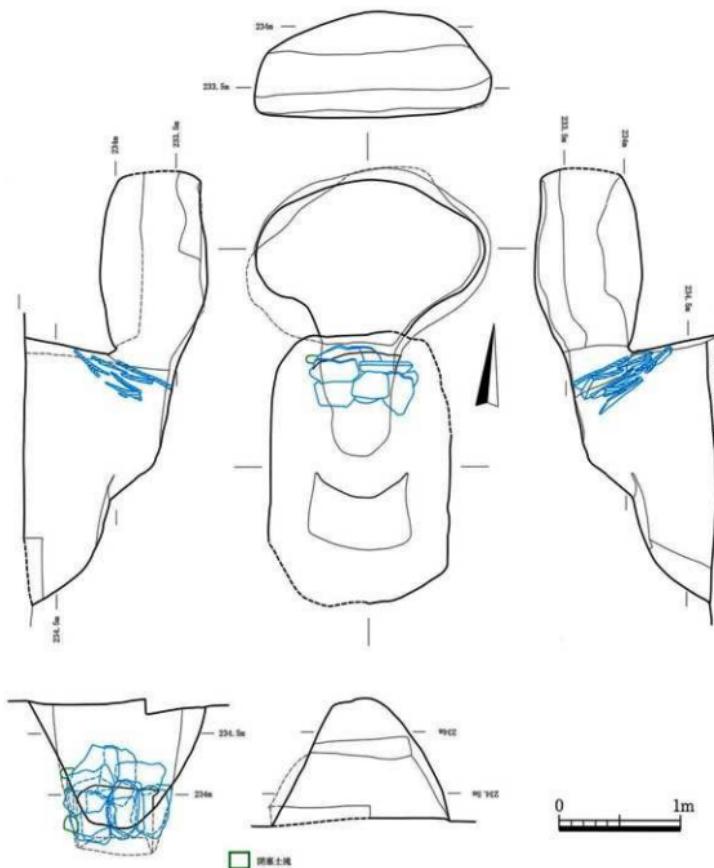
**玄室** 天井の崩落はほとんど見られず、内部の遺存状態は非常に良好である。玄室は南向きに開口し、平面プランは楕円形の平入りで、長さ約1m、幅が約1.9mである。天井はドーム形で、高さが約0.9mである。幅6.5~7cmほどの工具痕が見られた。豎坑のサイズに比べて玄室の規模は小さい。

#### 3.2 遺物

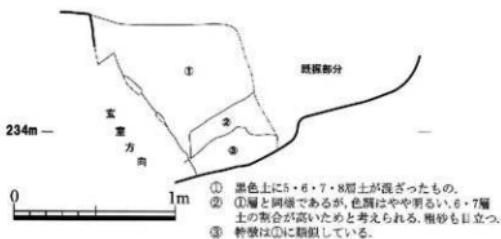
##### 3.2.1 出土状況・人骨 (第41図)

玄室内には、東頭位で仰臥伸展葬の3体の人骨が遺存している (図版20)。奥壁側から羨門側へ、1、2、3号人骨と呼ぶ (図版21)。1号人骨の左前腕には、ゴホウラ製の貝釧1個が着装されて

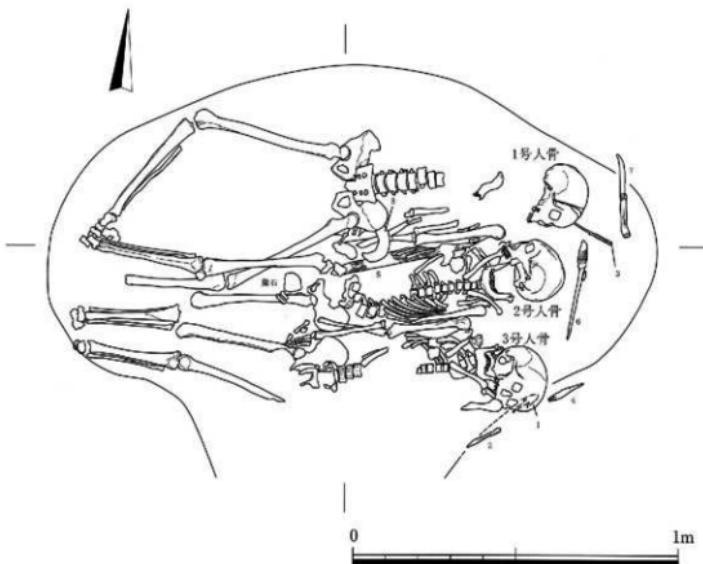
いる（図版22）。1号人骨は男性・熟年（図版22）、2号人骨は女性・壮年、3号人骨は男性・熟年と判定した。3体とも、赤色顔料が付着している。人骨とその周囲には、植物の種子が遺存していた。種子はエノキグサと鑑定された。エノキグサは、いたる所にみられる花期が夏から秋にかけての1年草である。1次調査で発掘した69号墓からはツユクサの種子が出土しており、出土状況から、埋葬時またはそれ以降の時期に、葬送儀礼に伴う種蒔き行為の存在した可能性が推定されている（竹中・大西、1999）。しかし、本種子を育成したところ、発芽したことから、エノキグサとツユクサの種子のいずれも、小動物が玄室天井部の亀裂を通じて運んだもの可能性が高い。また、2号人骨には、糞石が遺存している（図版22）。1号男性熟年人骨の頭蓋は陥没骨折している（図



第39図 89号墓埋葬施設実測図（1/40）



第40図 89号墓縦坑土層断面図 (1/30)



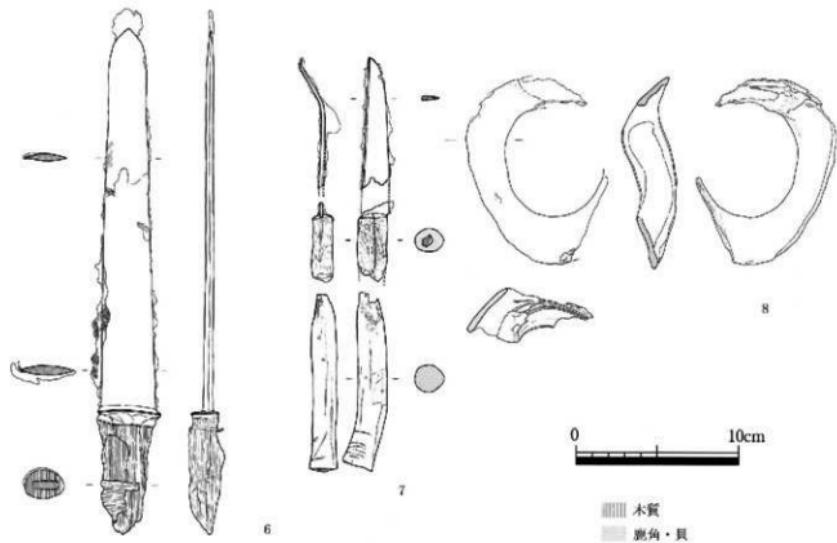
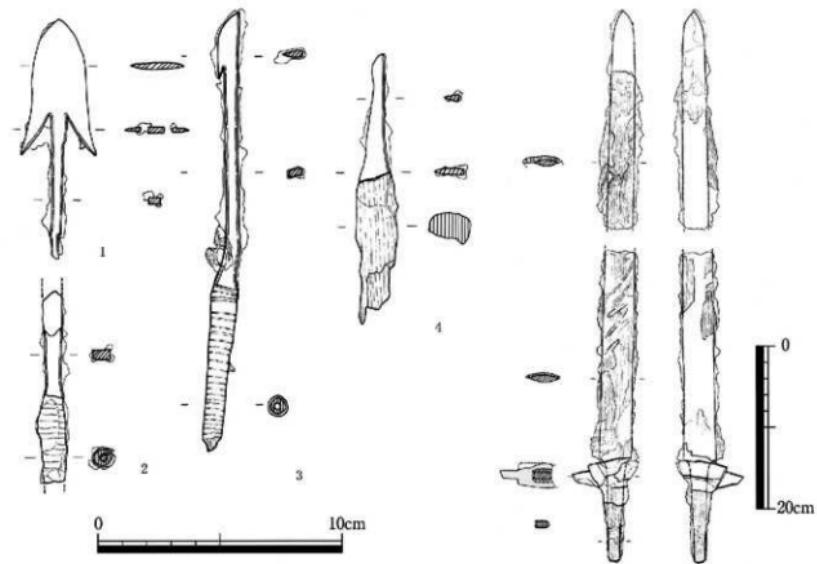
第41図 89号墓遺物出土状況実測図 (1/15)

版21）。骨折線が3本存在し、1つ目の線は前頭骨内に、2つ目は前頭骨から眼窩を経て鼻腔に、3つ目は前頭骨から側頭部を経て頭蓋底に至る。骨折部に治癒反応の痕は認められない。生前に骨折したのであれば、この傷が致命傷になったはずである。その原因としては、転倒などの事故、私闘や戦闘などの際の殴打が考えられる。破折骨の状況、骨折線の走行状態を考え合わせると、頭上から相当大きな衝撃力を受けたと推測される。

埋葬順位は、奥壁側から1号人骨、2号人骨、3号人骨の順である。

#### 玄室内出土遺物 (図版39)

89号墓からは、鐵鎌や剣、刀とともに、1号人骨からゴホウラ製貝釧が左前腕に着装された状態で



第42圖 89号墓出土遺物

検出された。鉄鎌の形状から5世紀後半を中心とする遺物であると考えられる。

**鉄鎌**（第42図 表5） 1は脇抜三角形鎌である。茎部分を欠損している。3は片刃の長頭鎌である。関は台形状を呈し、茎部は木質の上に木の皮が巻かれている。

**刀子**（第42図） 4は刀子である。全長11.1cm、身部4.9cm、身部幅1.2cm、棟幅0.3cmを測る。刃部が短く、研ぎなおしによる刃部の再生が行われたことを示すものかもしれない。茎部は木製の柄を装着する。7は残存長23.9cm、身部長8.4cm、残存関部幅1.6cm、棟幅0.3cmを測る。刃部は鋸により曲がっている。鹿角製の柄を装着する。

**鉄劍**（第42図） 5は全長65.2cm、身部長52cm、関部幅4cm、茎部長12.7cmを測る。刃部は折れ、鞘の上に紐状の繊維が巻かれている。柄に鹿角製把頭飾が装着されるが、遺存状態は悪い。6は全長31cm、身部長23.5cm、関部幅3.8cmを測る。刃部には木質と布の痕跡が確認でき、柄は木質の上に木の皮が巻かれている。

**貝釧**（第42図） 8はゴホウラ製の貝釧である。一部欠損しており、最大長は11.4cmを測る。厚さは最大で約2.5cmを測る。古墳時代中期に九州に出現する繁根木型とされるもので、螺塔部は研磨されている。

#### 4 90号墓

##### 4.1 遺構（第43図）

89号墓のやや南側で検出した（図版23）。北側には89号墓、東側には20号墓、西側にはSK01が位置する。堅坑の上方には、長さ約60cm、幅15~22cm、厚さ9~12cmの柱状の石が1個確認できた。これは閉塞石に通常用いられるものより分厚い。もちろん、閉塞石に用いられた可能性は否定できないが、標石的な使用の可能性も残しておきたい。堅坑の北側を除く周開には、堅坑の埋土に用いられたのと同様の砂礫層土が広がっており、その広がりの範囲は東西5.6m、南北4.2mにも及ぶ。堅坑の北側には玄室が位置するが、玄室側に砂礫層土が及ばないのは、我々が島内で調査した他の事例と同様である。

**堅坑** 堅坑は長方形で、長さ約1.75m、幅約1.25m、深さ約1.3mを測る。堅坑の南壁にステップと考えられる掘り込みが3ヶ所、南壁の下方に階段状のステップを1ヶ所確認できた。これらのステップは、やはり、墓作りの際や埋葬の際の上り下りのために作られたと考えられる。北西部に幅8.5cmの平らな刃による痕跡が残っていた。

堅坑埋土は一様で、分層はできなかった（図版23）。

**羨門** 羨門は比較的小型の板石1枚と大きめの板石2枚、計3枚の板石で閉塞されており、その総重量は約99kgである（図版24）。板石と板石の隙間には土塊が詰められていた。

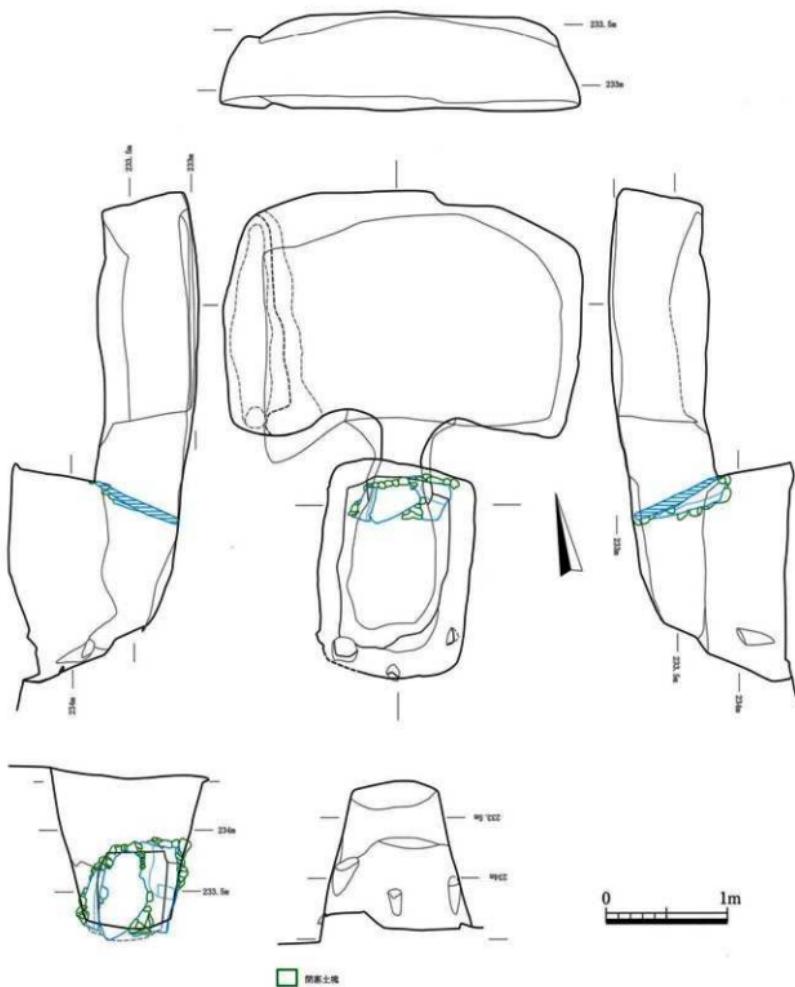
**羨道** 堅坑北壁のほぼ中央に作られている。床部の幅約50cm、天井部の幅約45cm、長さ60~70cm程である。

**玄室** 玄室は南側に開口する。平面プランは隅丸長方形の平入りで、長さが約1.8m、幅が約

2.9m、高さが約0.8mである。玄室の天井はかなり崩落していたが、ドーム形を呈している。西隅には幅20~30cm、高さ6~10cmの高まりで、屍床状の施設が造り出されている。

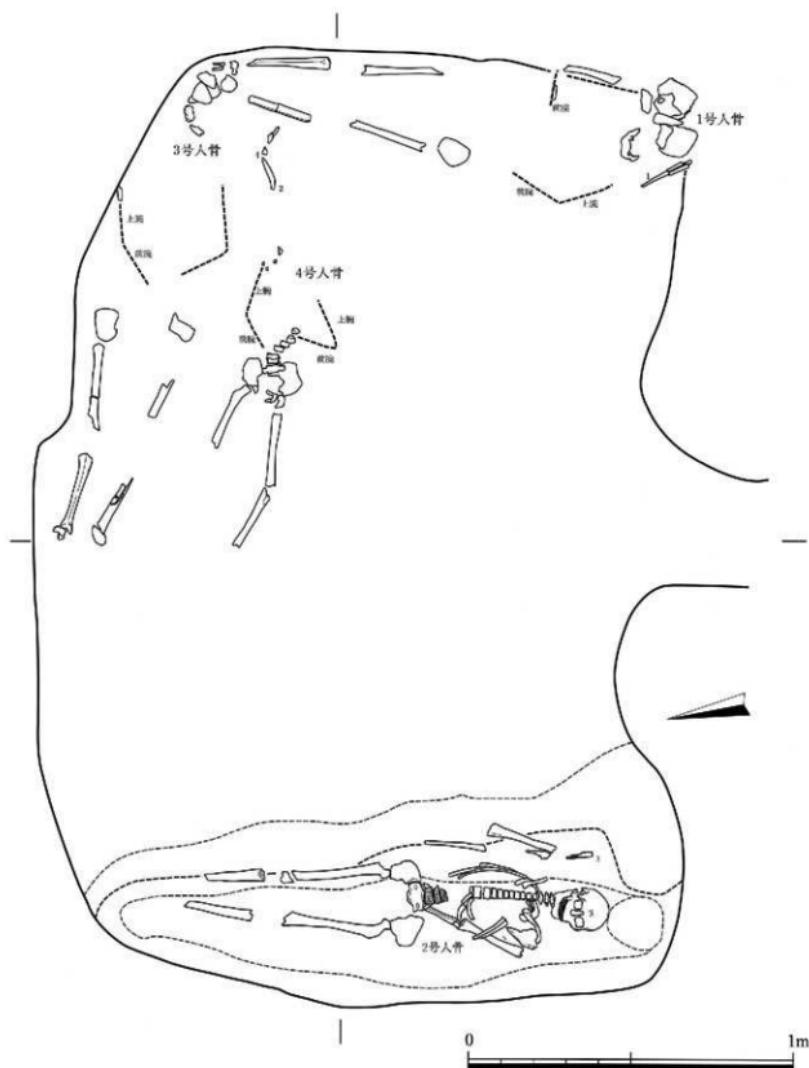
#### 4.2 遺物

##### 4.2.1 出土状況・人骨 (第42図)



第43図 90号墓埋葬施設実測図 (1/40)

玄室内には4体の人骨が遺存している。東壁に沿って1号人骨が南頭位で、2号人骨は西壁に沿って南頭位で検出された。3号、4号人骨は奥壁に平行に東頭位で葬られていた。奥壁側を3号人骨、羨門側を4号人骨とした。4体とも仰臥伸展葬である。1号人骨は性別不明・壮～老年、2号人骨は



第44図 90号墓遺物出土状況実測図 (1/15)

女性・壮年（図版24）、3号人骨は女性・成人、4号人骨は性別不明・小児（7歳前後）と判定できる。赤色顔料は、1号、2号人骨には付着している。しかし、3号、4号人骨については保存状態が悪く、その付着の有無は不明である。

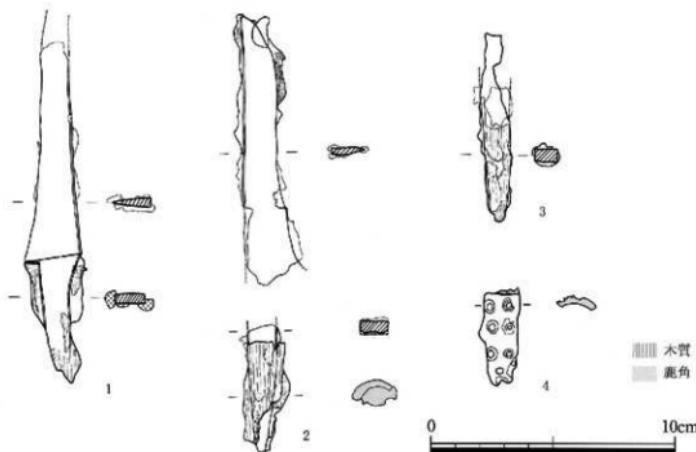
埋葬順位は、玄室の東側は1号人骨の埋葬の後に3号人骨、4号人骨が埋葬されたことがわかるが、西側の2号人骨の埋葬がどの段階であるのか決定できない。

#### 玄室内出土遺物（図版40上段）

90号墓からは、1号人骨と2号人骨にともない刀子と鹿角製刀装具が出土している。

刀子（第45図） 1は1号人骨頭部近くに副葬されていたもので、残存長は13.9cm、残存身部長8.8cm、棟幅0.3cm、関部幅2.3cm、茎部長4.5cmを測る。先端が欠けており、刃部は鏽により曲がっている。茎部は鹿角製の柄が装着されている。2は残存長17.7cm、残存身部長12.0cm、棟幅0.3cm、残存茎部長5.7cmを測る。刃部の先端に鹿角や繊維が付着している。刃部の一部が欠損しており、鹿角製の柄が装着されている。3は2号人骨頭部近くから出土したもので、残存長7.7cm、幅0.9cmを測る。柄は鹿角製で、刃部は欠損している。

鹿角製刀装具（第45図） 4の鹿角製刀装具は1と同一個体をなすものである。幅1.6cm、厚さ0.2cmを測る。穿孔の跡がみられるが、貫通していない。



第45図 90号墓出土遺物実測図

## 5 91号墓

### 5.1. 遺構（第46図）

調査区の南東部で検出した（図版25）。この墓のみ他の墓からやや離れて位置している。

#### 豎坑埋土（第47図）

③層上面と④層上面は豎坑を再度掘り返した際の掘り残しを示すものかもしれない（図版25）。その場合、玄室は初葬後少なくとも2回以上開けられたことになる。

#### 豎坑

豎坑は隅丸長方形で、長さ約1.95m、幅約1.45m、深さ約1.25mを測る。豎坑の西壁から南壁にかけて階段状のステップが見られる。ステップの位置が他の墓のステップの位置とやや異なるが、やはり、墓作りの際や埋葬の際の上り下りのために作られたと考えておきたい。

#### 豎坑出土土器（第48図）

図示したものはいずれも土師器である。

1は高杯の口縁部である。なお、2とは別個体である。口径の1/12しか残っていないため、不正確かもしれないが、口径を20.2cmに復元して図化を行った。口縁部は外反しながら立ち上がるが、端部は直立に近い。胴部下方に弱い屈曲が見られる。内外面とも横方向のミガキが施されるが、口縁端部付近はヨコナデによる調整である。胎土には褐鉄鉱の粒子を含んでいることが注意される。形態的な特徴から辻堂原式に併行するものと思われる。

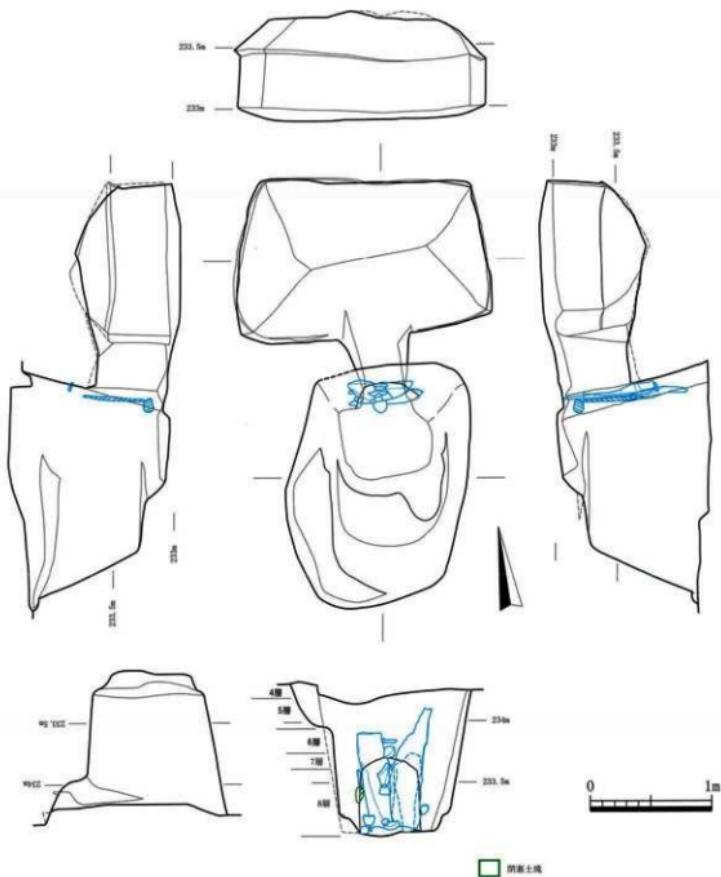
2は高杯の杯部である（図版26）。図示した部分については全周の3分の1程度を欠くのみであるが、その上下は遺存していない。杯部の下部は大きく開きながら延び、かなり鋭い屈曲部からは角度を急にして立ち上がる。内外面の調整はミガキによると思われるが、風化のため单位などは良くわからない。1と同様に、褐鉄鉱の粒子を含む。形態的な特徴から、東原～辻堂原式のものと考えられる。

3は壺の胴部から底部にかけての破片である。底部付近はすべて遺存しているが、胴部は小片である。接合はしないが、同一個体の可能性が高いと判断した。胴部最大径部で16cm程度と思われる。最大径部あたりで、やや強く内湾して頭部に向かう。底部は丸底に近いがわずかに平坦部を有する。底部は小さな粘土の円盤を外側から充填しているようである。外面の調整は風化のため、ほとんどが不明であるが、胴部にはミガキの痕跡が認められるまた、内面調整はナデによると思われる。全体的に薄手で、外面の一部には赤色顔料が残っている。胎土中には1と2に見られた褐鉄鉱は見られない。形態的な特徴から5世紀後半以降のものと考えられる。

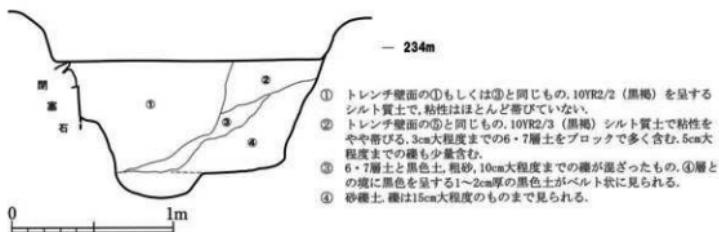
**羨門** 羨門は3枚の板石で閉塞されており、その総重量は約79kgである（図版26）。また、所々に上塊が見られた。

**羨道** 羨道は豎坑北壁のほぼ中央部に取り付けられている。床面の幅約60cm、高さ約65cm、長さ約45cmである。

**玄室** 玄室は南向きに開口し、上砂の流れ込みや天井の崩落もなかった。玄室の平面プランは長方

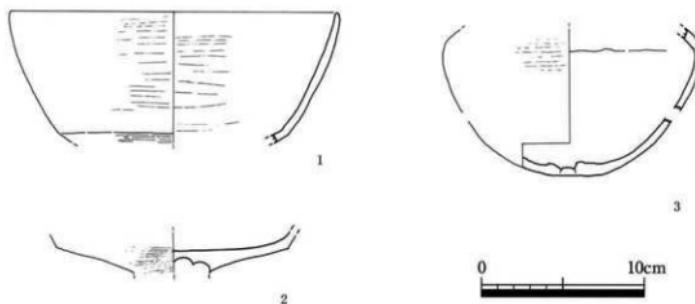


第46図 91号墓埋葬施設実測図 (1/40)

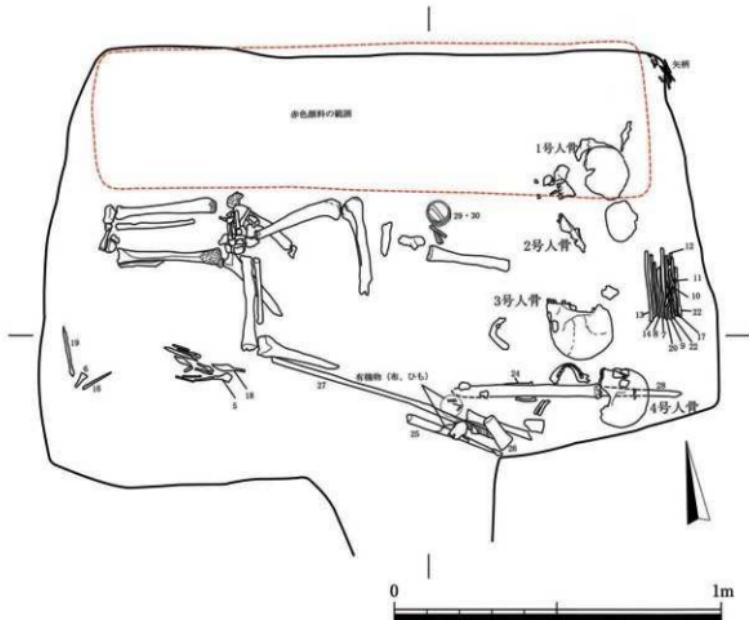


第47図 91号墓竪坑土層断面図 (1/30)

形の平入りで、長さが約1.3m、幅が約1.8~2.05mである。天井は家形（寄棟）で、壁と屋根との境には棚状施設が設けられている。天井までの高さは高いところで約0.8mである。天井には工具痕が明瞭に残っていた（図版27）。



第48図 91号墓竪坑出土土器



第49図 91号墓遺物出土状況実測図（1/15）

## 5.2 遺物

### 5.2.1 出土状況（第49図）

玄室には、4体の人骨が遺存していた（図版28）。4体とも頭位は東向きの仰臥伸展葬である。奥壁側から、1号、2号、3号、4号人骨とする。1号人骨が性別不明・老年、2号人骨が性別不明・幼児（3歳前後）、3号人骨が男性？・老年、4号人骨が男性・壮年（図版29）と判定できる。1号人骨の左前腕には、イモガイ製の貝釧4個が着装されている。4体とも、顔面部に赤色顔料が付着している。埋葬順位は、奥壁側から1号、2号、3号、4号人骨の順である。

### 5.2.2 玄室内出土遺物（図版40下段・41～43）

91号墓の玄室からは、鉄器類とともにイモガイ製の貝釧が1号人骨左前腕に着装された状態で検出された。鉄刀の型式および鉄鎌の形状から5世紀代の年代観が与えられる。

**鉄鎌（第50図・51図 表6）** 4と5は半頭鎌または三角形鎌である。茎部は欠損している。5は刃部を欠損している。6は主頭鎌であり、頭部の関は斜関と思われる。柄の木質は残存していない。7～15、20、21は片刃の長頭鎌である。関はいずれも台形を呈する。16～19、22は鎌身部を欠くが、長頭鎌と思われる。なお、3号人骨東側の鉄鎌の切先から矢柄の末端までは83cmほどの長さである。  
**鎗（第51図）** 23は全長17.5cm、刃部長3.8cm、刃部幅1.2cm、刃部厚0.3cmを測る。茎部には木質の上に鹿角装具が装着されていた可能性がある。

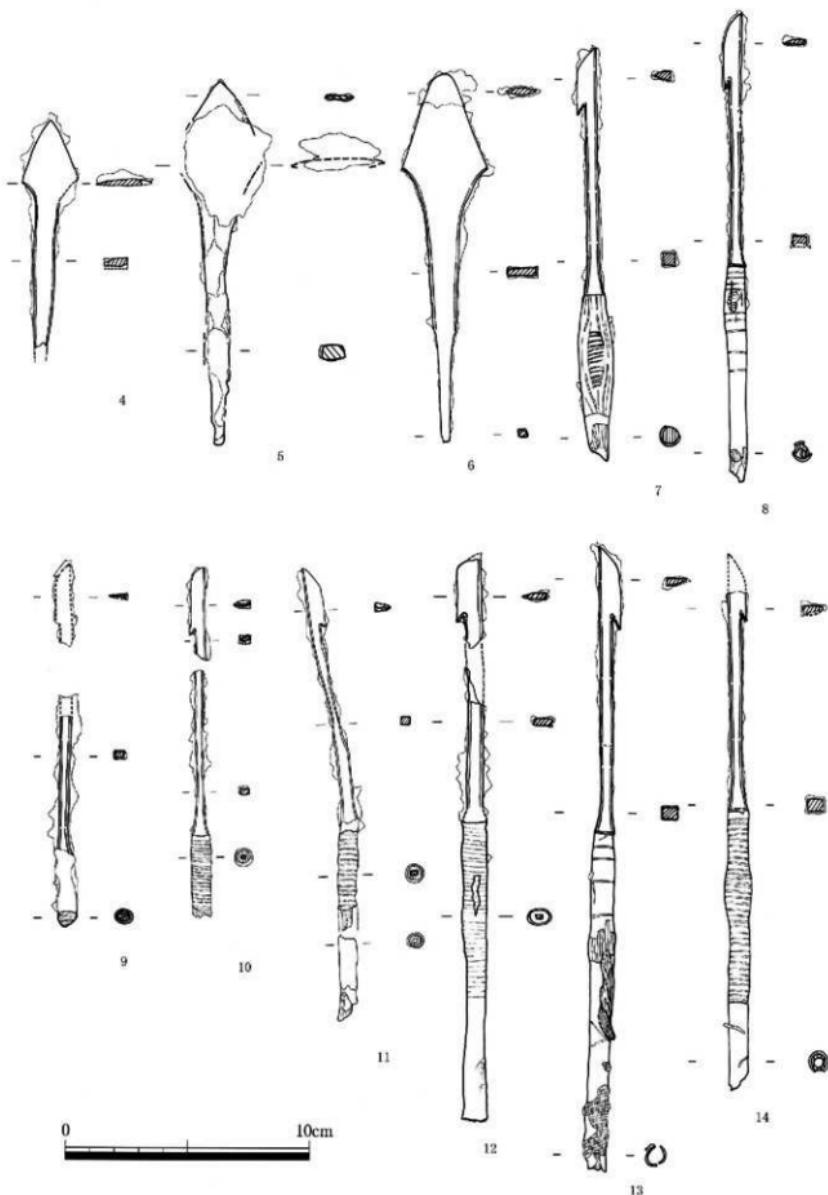
**鉄劍（第51図）** 24は残存長29.9cm、関部幅3.4cm、関部下茎部幅2.1cm、関部幅3.4cm、莖部長6.2cmを測る。刃部は両丸造りで、一部欠損する。関は斜角である。莖には目釘穴が確認される。

**鉄鎗（第51図）** 25は残存長29.3cm、身部長15.4cm、残存関部幅2.3cm、袋部残存長13.9cm、袋部最大径2.8cm、袋部推定最小径0.4cmをはかる。先端部が欠損しており、袋部の一部が剥離している。

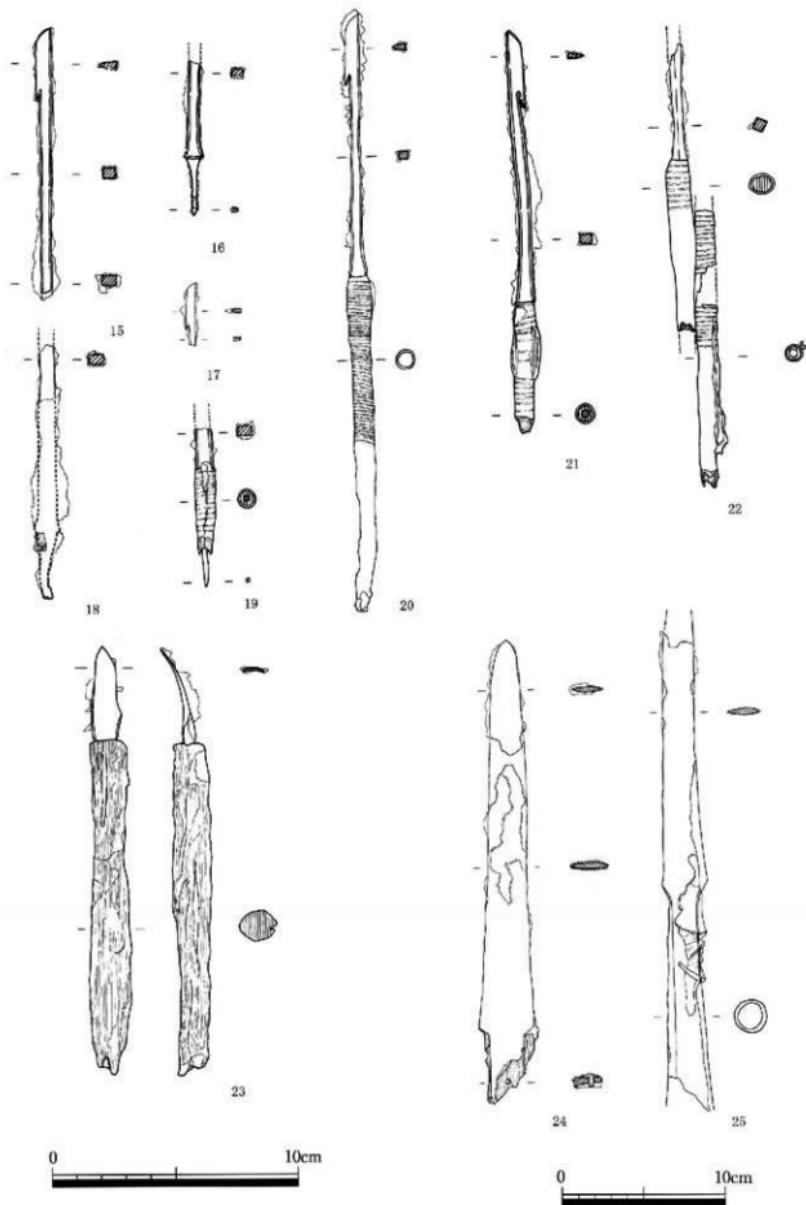
**鉄斧（第52図）** 26は先端を一部欠損、全長8.8cm、袋部深さ3.6cm、袋部長径は内径で2.4cm、袋部短径1.6cmを測る。

**鉄刀（第52図）** 27は先端と関近くを欠損しており、残存長は89.6cm、関部幅3.2cm、関部下茎幅2.4cm、莖部長16.7cm、棟幅0.8cmを測る。木製の鞘が確認できる。莖は木質の上に紐が巻かれており、目釘穴も確認できる。関部の形状は明確ではないが、関から莖にかけて浅く切れ込み、莖尻に向かってやや幅を狭める中細タイプと推測される。莖尻は隅抉とみられる。28は先端部を大きく欠損する。残存長71.5cm、残存身部長55.9cm、関部幅3cm、関部下茎部幅2.1cm、残存莖部長15.6cm、棟幅1.0cmを測る。莖部に木質が残存する。関から莖へ斜めに浅く切れ込み、莖元から莖尻にかけては莖幅がほとんど変わらない。莖尻は隅切である。鉄刀の編年によれば（臼杵1984）これらは5世紀代に相当する。

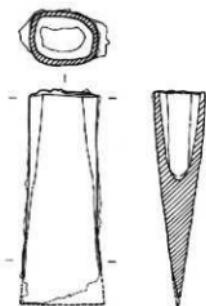
**貝釧（第52図）** 29と30はイモガイ製の貝釧である。29は2個重なったもので、一部欠損しており、残存部の最大径は上部個体6.7cm、下部個体は6.8cmを測る。厚さは上部個体7.0mm、下部個体は8.0mmを測る。螺塔付近上面や下端に平らな面が形成されている。体層と次体層の接合部付近を



第50図 91号墓出土遺物 1

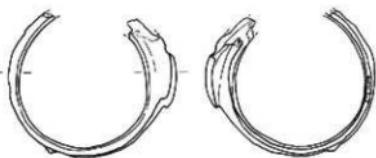


第51図 91号墓出土遺物2

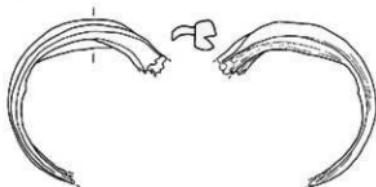


26

0 10cm

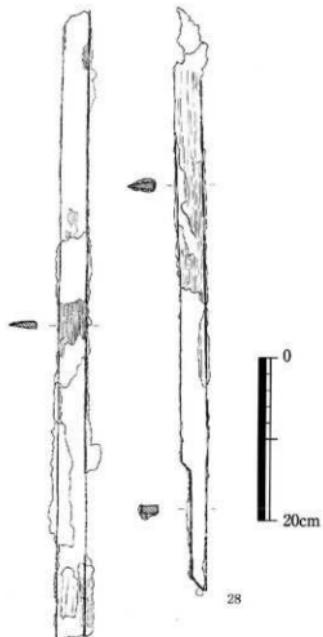


29



30

0 10cm



28

0 20cm

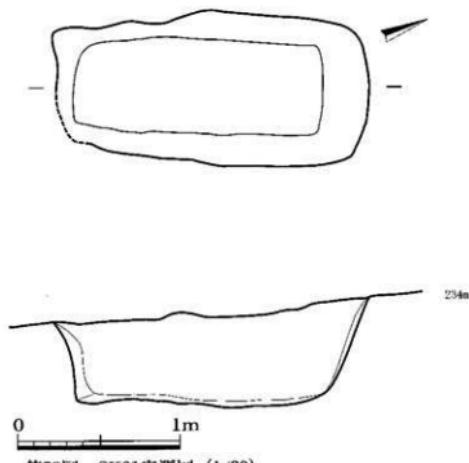
第52図 91号墓出土遺物 3

欠き、一部に朱が付着する。30も2個重なっており、約半周分欠損している。残存部の最大径は上部個体6.8cm、下部個体6.6cmを測る。厚さは2つとも9mmを測る。体層と次体層の接合部付近は幅があり、上面は平らな面が形成される。一部に朱が付着する。

## 6 SK01 (第53図・54図)

SK01は1トレンチの南寄り、89号墓の竪坑から3m南側で確認された（図版29）。検出面は北側が3層もしくは3層が再堆積したと考えられる層、南側が5層（アカホヤ）で、地下式横穴墓との直接的な関係は不明である。

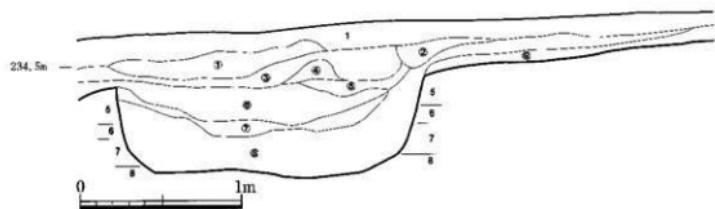
平面は隅丸長方形で、長さ約1.9m、幅0.76~0.95m、深さは0.7~0.8mである（図版30）。四壁はそれほど直には掘りこまれていないため、床面の長さ約1.5m、幅0.6mほどしかない。



第53図 SK01実測図 (1/30)

埋土は基本的に縦状を呈する堆積で、中央部に向かって下がっていることから、木棺の腐朽による落ち込みを示しているのかもしれない（図版30）。しかし、木棺の痕跡は、断面からも平面からも確認できなかった。なお、埋土の一部（②層・③層・⑥層・⑧層）はプラン外へと続いているように観察された。

人骨や副葬品は確認できず、SK01の性格を決定することはできないが、形態的な特徴や木棺が存在していたことも想定可能であることなどから、土壙墓の可能性を考えておきたい。



### 1 表土層

① 埋土層で、厚さ5cm程度までのものが含まれる。黒色土などとの混ざりは見られない。

② 3層: 1-2層土（アカホヤ）との混土だが、アカホヤが主である。④・⑤・⑥層はよく似ている。

③ 10TR2/2（黒泥）を含むシルト質土。わずかに粘性を帯びる。右側部分には3・4層がブロックのように重なっているのが確認できることから、この層は3層がベースになっていると考えられる。

④ 3層と6層の混土。

⑤ 3層と4層との混土。

### ⑥ 3層と6層との混土であるが、アカホヤが主。

⑦ 10TR1.7/1（黒泥）を含むシルト質土。わずかに粘性を有し、3cm大の塊を含んでいる。

⑧ 6・7層の頂上に、3層土のブロック、10cm大程度までのアカホヤブロックや塊を含む層。

⑨ 10TR2/2（黒泥）を含むシルト層。わずかに粘性を有し、3cm大程度の塊を含む。3層土に似るが、3層土より硬く、4層の断面層が無い。

6層 シルト質土。この部分では、10TR3/2（黒泥）を呈し、あまり固くない。

7層 シルト質土。この部分では、10TR4/3（にぶい黄泥）を呈し、固い。

第54図 SK01土層断面図 (1/30)

## 第5節　まとめ

第3次発掘調査でも、第1次・第2次調査と同様、遺存状態良好な玄室内の遺物を検出することができた。出土した保存良好な人骨は、南九州古墳人の顔かたちや体つきを解明する上で、大切な追加資料となる。87号墓1号男性熟年人骨と89号墓1号男性熟年人骨の出土状況と人骨に残る外傷痕は、被葬者が戦闘により死亡した可能性をも想像させる。89号墓の玄室から検出された種子は、その後の発芽により、現代のものとわかった。それにより、69号墓（1次調査）で出土した種子も現代のものと考えた方がよいようである。89号墓で検出された糞石は、南九州古墳人の食性や生活環境を考える上で貴重な資料である。今回、遺構、出土遺物の正式報告を行ったが、糞石をはじめとするさまざまな出土遺物や遺構の分析を行い、島内地下式横穴墓群を営んだ人々の様相の解明を統けて行きたい。

## 参考文献

- 白杵勲（1984）「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号：pp.49-70
- えびの市郷土史編さん委員会（1994）「島内地下式横穴墓群」『えびの市史』上巻。pp.143-147。えびの：えびの市。
- 片山祐介（2010）「島内地下式横穴墓群21・62・76・81号墳出土 短甲と冑について」『島内横穴墓群Ⅱ』えびの市埋蔵文化財調査報告書第49集pp.40-60。えびの市教育委員会。
- 金原正子・金原正明（1999）「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群69号墓から検出された糞石の寄生虫卵分析および花粉分析」『人類史研究』11：pp.191-194
- 竹中正巳・大西智和（1998）「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群69・70号墓発掘調査概報」『人類史研究』10：pp.5-6, 185-189
- 竹中正巳・大西智和（1999）「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群69・70・71・72・73・74・75号墓発掘調査報告」『人類史研究』11：pp.5-9, 159-188
- 竹中正巳・大西智和（2000）「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群—76・77・78・79・87・88・89・90・91号墓発掘調査概報」『人類史研究』12：pp.3-4, 141-150
- 中野和浩編（2001）「島内横穴墓群」えびの市埋蔵文化財調査報告書第29集。えびの市教育委員会。
- 中野和浩編（2010）「島内横穴墓群Ⅱ」えびの市埋蔵文化財調査報告書第49集。えびの市教育委員会。
- 中野和浩編（2009）「島内横穴墓群Ⅲ・岡元遺跡」えびの市埋蔵文化財調査報告書第50集えびの市教育委員会。
- 今堀屋穂行・松永幸寿（2002）「日向における古墳時代中～後期の土師器—宮崎平野部を中心にして—」『第5回九州前方後円墳研究会発表要旨資料 古墳時代中・後期の土師器—その編年と地域性—』九州前方後円墳研究会：pp.145-173

表1 76号墓出土鉄鎌計測値

番号	全長(cm)	身部長(cm)	身部幅(cm)	身部厚(cm)	頸部長(cm)	茎部長(cm)
1	<17.4>		2.5	<0.2>		
2	(12.2)	(4.0)	(3.6)	(0.6)	(6.9)	1.8
3	<12.1>	7.0	4.0	(0.5)		5.1
4	<12.4>	2.8	0.8	0.2	7.2	2.4
5	(12.2)	3.2	0.8	0.3	(5.5)	3.4
6	16.4	(2.7)	(0.9)	0.3	7.7	5.8
7(左)	18.2	3.2	0.7	0.3	8.4	6.6
7(右)	16.1	3.3	0.7	0.3	7.9	4.9
8	(18.3)	2.8	0.7	<0.2>	(9.1)	6.4
9	<15.6>	3.2	0.7	0.3	7.6	<4.8>
10	(11.8)	(2.9)	0.7	0.2	6.8	2.1
11	<11.0>				7.9	3.1
12	<13.4>				<7.6>	<5.8>
13	<13.1>				9.1	4.0
14	<6.1>	3.1	0.7	0.3	<3.0>	
15	<6.8>	3.3	0.7	0.4	<3.5>	
16	<8.8>	3.1	0.9	0.2	5.7	
17	<14.1>				10.3	3.8
18	<14.3>				<8.2>	6.1
19	<11.1>				<7.4>	<3.7>
20	<8.1>				<3.3>	<4.8>
21	<8.4>				<2.2>	6.2
22	<10.0>				5.4	4.6
23	<8.7>				<2.8>	5.9

※( )内は推定復元値、<>は現状値。番号は報告書図番号に対応する。

表2 77号墓出土鉄鎌計測値

番号	全長(cm)	身部長(cm)	身部幅(cm)	身部厚(cm)	頸部長(cm)	茎部長(cm)
1	<10.0>		2.5	<0.2>		
2	12.8	5.5	3.2	0.6	2.8	<5.8>
3	(17.5)	7.0	4.0	0.5		5.1
4	<14.9>	2.8	0.8	0.2	7.8	<4.4>
5	<10.2>			(0.3)	<2.3>	5.4
10	<9.5>	2.7	0.9	0.3	7.7	
11	<14.5>	2.7	0.7	0.3	8.4	3.9
12	(13.5)	(3.0)	0.7	0.3	7.9	<4.9>
13	<13.7>	2.8	0.7	<0.2>	7.8	3.2
14(左)	<5.5>	2.8	0.8	0.3	<2.7>	
14(中)	<12.2>		0.9	0.2		
14(右)	<14.7>	2.8	1.1	0.3	<7.9>	<1.5>
15(左)	<11.2>	3.0	0.7	0.4	6.6	
15(中)	<11.0>		0.9	0.5		
15(右)	<4.5>	2.8	0.8	0.5	<1.7>	
16(左)	<6.1>	2.7	0.7	0.3	<3.8>	
16(右)	8.8	2.7	0.9	0.2	<6.4>	
17(左)	<2.8>		0.7	0.2		
17(中)	<8.5>	3.1	0.6	0.2	<5.4>	
17(右)	<7.0>				<4.8>	
18	<5.6>	<2.7>	0.8	0.3	<2.9>	<3.1>
19	<5.4>	<3.0>	0.7	0.3	<2.7>	
20	<10.4>				<8.5>	<1.9>
21	<10.7>				<4.8>	5.7
22	<8.1>				<5.7>	<2.4>
23	<8.3>				<5.6>	<2.7>
24	<5.4>				<3.3>	<2.1>
25	<8.0>				<4.0>	4.0
26	<7.0>				<2.3>	4.7
27	<11.3>				<4.0>	7.3
28	<8.4>				<7.1>	<1.3>
29	<8.6>				<3.1>	<5.5>
30	<8.1>				<5.0>	<3.1>
31	<7.7>				<2.3>	5.4

※( )内は推定復元値、&lt;&gt;は現状値。番号は報告書図番号に対応する。

表3 87号墓出土鉄鎌計測値

番号	全長(cm)	身部長(cm)	身部幅(cm)	身部厚(cm)	頸部長(cm)	茎部長(cm)
1(左)	11.5	3.9	2.7	0.2	3.0	4.6
1(右)	12.8	6.3	2.2	0.2	2.4	4.1
2	14.0	5.1	(2.7)	0.2	2.5	6.1
3	10.6	6.2	3.8	0.2		4.4
4	11.5	5.5	2.7	0.3	2.5	4.0
5	13.1	3.4	2.6	0.2	3.1	6.6
6	<11.8>	4.7	2.4	0.2	2.7	<4.1>
7	<10.8>	<6.4>	<2.8>	0.3		4.4
8	<14.3>	10.2	3.0	0.1		4.1
9	<13.1>	6.3	2.1	0.2	3.7	3.1
10	(12.7)	7.6	2.7	0.2		4.7
11	<12.8>	9.8	2.4	0.3		3.0
12	(21.4)	3.3	0.6	0.3	6.6	
13	<16.0>	<2.7>	0.7	<0.1>	7.1	6.2
14	<13.7>				<6.3>	7.4
15	<8.1>				<3.0>	<5.1>

※ &lt;&gt; は現状値。番号は報告書図番号に対応する。

表4 88号墓出土鉄鎌計測値

番号	全長(cm)	身部長(cm)	身部幅(cm)	身部厚(cm)	頸部長(cm)	茎部長(cm)
1	<18.5>	4.4	3.6		2.9	11.2
2	19.2	5.3	<2.6>		1.5	9.4
3	14.9	8.9	3.1	0.3		5.9
4	16.0	5.0	<2.6>		2.7	8.3
5	<19.3>	2.8	0.6	0.2	<5.3>	
6	20.2	2.9	0.7	0.3	7.4	
7	<23.7>	2.3	0.6	0.3	9.6	
8	<22.1>	3	0.5	0.3	6.7	
9(右)	<16.9>				<9.1>	
9(左)	17.1	3.6	0.7	0.2	6.8	4.1
10(左)	22.3	3.1	0.8	0.3	5.8	
10(中)	26.4	3.1	0.6	0.3	8.7	
10(右)	20.7		0.9	0.4		
11	19.0	3.0	0.7	0.2	8.7	7.8
12	<20.8>					(9.8)
13	<18.1>	2.6	0.8	0.3	<8.0>	7.6
14	17.7	3	0.8	0.3	7.5	7.2
15	<16.5>					
16	<10.6>				<6.7>	3.9

※ ( ) 内は推定復元値、&lt;&gt; は現状値。番号は報告書図番号に対応する。

表 5 89号塗出土鉄鎌計測値

番号	全長(cm)	身部長(cm)	身部幅(cm)	身部厚(cm)	頸部長(cm)	茎部長(cm)
1	<9.8>	5.6	2.6	0.2	4.8	<1.0>
2	<7.9>				<4.3>	<3.6>
3	17.6	2.6	0.9	0.2	8.4	6.7

※ ( ) 内は推定復元値、< > は現状値。番号は報告書図番号に対応する。

表 6 91号塗出土鉄鎌計測値

番号	全長(cm)	身部長(cm)	身部幅(cm)	身部厚(cm)	頸部長(cm)	茎部長(cm)
4	<9.3>	3.1	(2.3)	0.3		<6.2>
5	(12.0)	(10.0)				<2.0>
6	<16.0>	4.1	3.6	0.3	6.4	<5.3>
7	16.9	2.8	0.8	0.4	7.8	6.6
8	19.2	3.2	0.7	0.2	7.6	8.8
9	<12.0>	2.4	0.6	0.2	<6.5>	<3.1>
10	<15.4>	3.1	0.7	<0.1>	<8.9>	3.7
11	<19.8>	2.6	0.7	0.2	8.5	<4.9>
12	<22.2>	2.5	0.7	0.3	<7.4>	<4.4>
13	25.5	3.3	0.8	0.3	8.7	13.8
14	<20.4>	<1.2>	0.7	0.4	7.8	11.4
15	<11.2>	3	0.7	0.3	7.9	<0.7>
16	<6.3>				3.9	2.4
17	<4.2>	3.1	0.7	0.2	<1.1>	
18	<10.4>				<7.6>	<2.8>
19	<6.4>				<1.6>	4.8
20	25.9	3.1	0.6	0.3	8.5	14.7
21	16.5	3.2	0.6	0.2	7.9	5.4
22(左)	<11.8>				<4.8>	
22(右)	<11.2>					

※ ( ) 内は推定復元値、< > は現状値。番号は報告書図番号に対応する。



第2次調査 調査区全景



76号墓 竪坑埋土の断面

図版 2



76号墓 竪坑西壁の掘り込み



76号墓 竖坑および閉塞状況



76号墓 玄室と竪坑



76号墓 玄室内 遺物出土状況

図版 4



76号墓 玄室内 鉄刀および三角板革綴衝角付冑 出土状況



76号墓 玄室内 橫矧板鉄留短甲 出土状況



76号墓 玄室内 三角板革綴衡角付冑 出土状況



77号墓 穹坑埋土の断面

図版 6



77号墓 竪坑および閉塞状況



77号墓 竪坑および美門



77号墓 玄室天井



77号墓 玄室内1号人骨（男性·壮年）、2号人骨（男性·壮年）、3号人骨（女性·壮年）人骨上半身

図版 8



77号墓 玄室内 1~3号人骨下半身



77号墓 玄室内 人骨と副葬品出土状況（1号人骨付近）



77号墓 玄室内 西側（4号人骨）

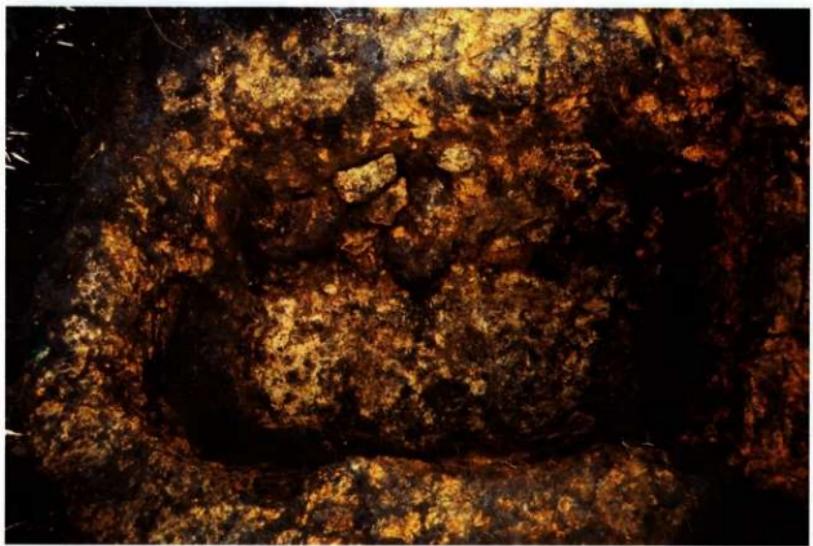


77号墓 玄室内 4号人骨（女性・熟年）

図版 10



78号墓 竪坑



79号墓 竪坑および閉塞土塊



79号墓 竪坑および玄室



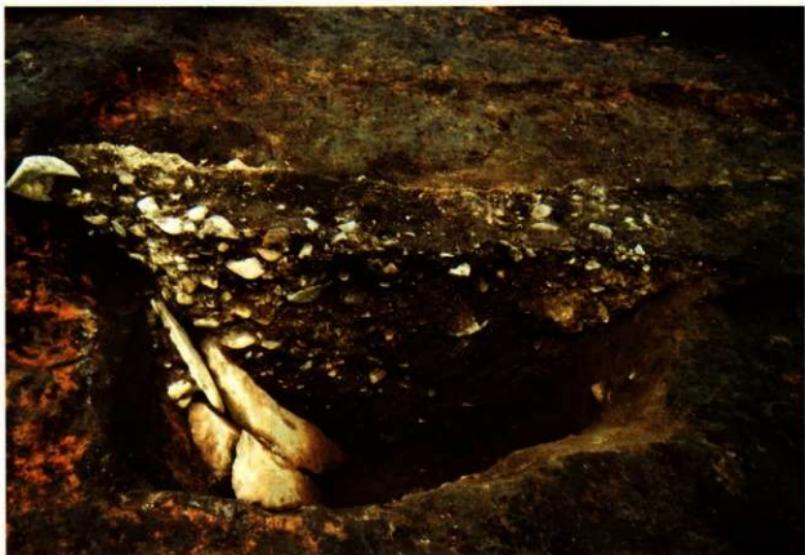
第3次調査 調査区全景



9 トレンチ 方形状の段落ちの一部とアカホヤ層の高まり



8 7号墓 竪坑上方に設けられた土坑と埋土（中央やや上方が竪坑）



87号墓 墓坑埋土の断面 1



87号墓 墓坑埋土の断面 2

図版 14



87号墓 竪坑および閉塞状況



87号墓 竖坑および羨門

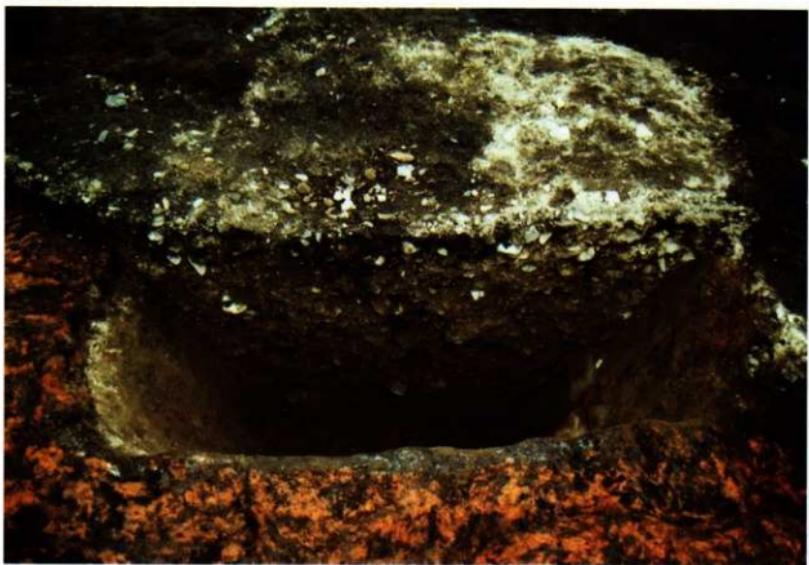


87号墓 玄室内 1号人骨（男性・熟年）



87号墓 玄室内 2号人骨（性別不明・5・6歳小兒）と副葬された刀子

図版 16



88号墓 堅坑埋土の断面



88号墓 堅坑内閉塞状況



88号墓 玄室内

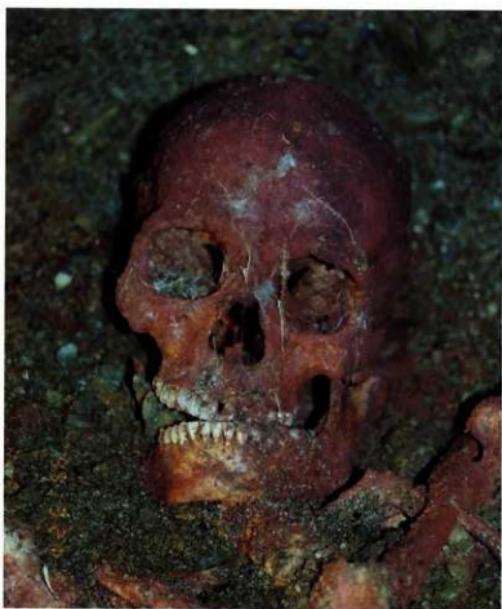


88号墓 玄室内 粗状の有機質が付着した鉄鎖の出土状況

图版 18



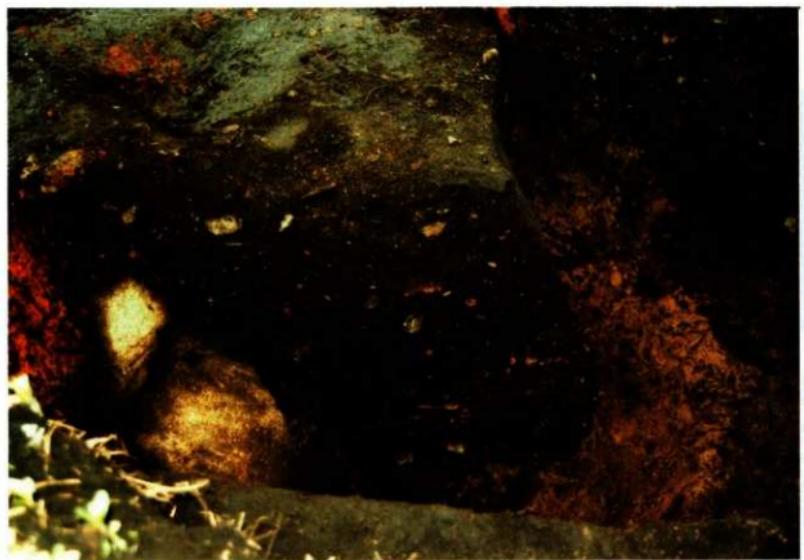
88号墓 玄室内 5号人骨 (男性·壮年)



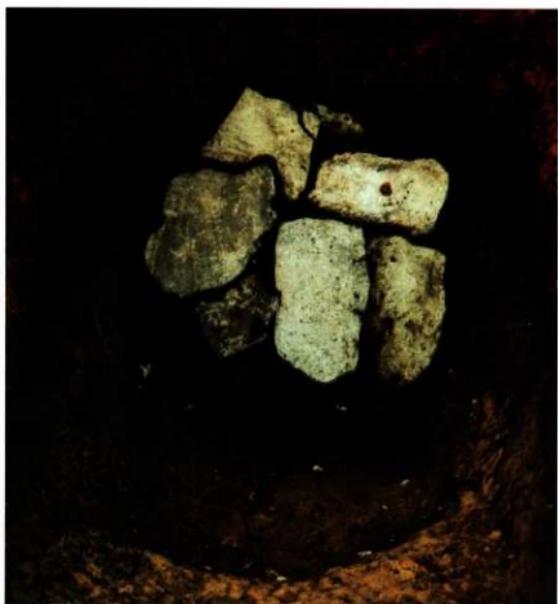
88号墓 5号人骨



89号墓 竪坑確認状況



89号墓 竪坑埋土の断面



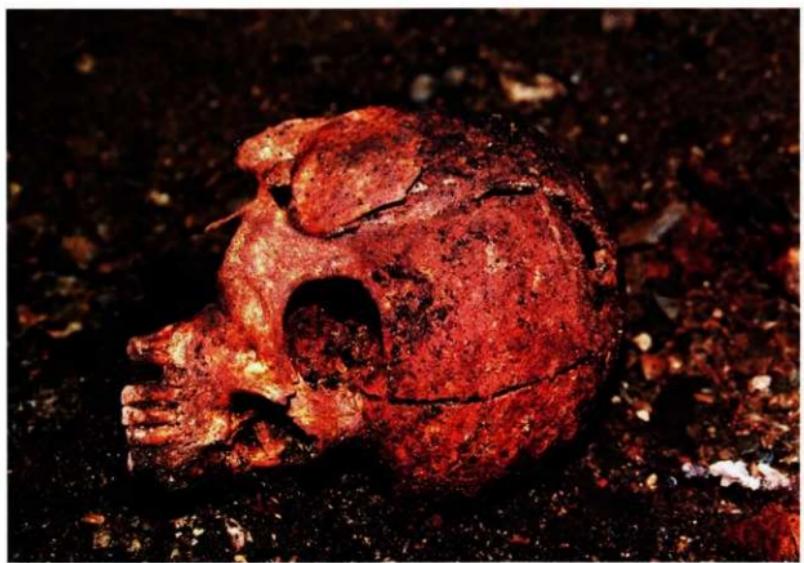
89号墓 竪坑および閉塞状況



89号墓 玄室内（手前から3号人骨、2号人骨、1号人骨）



89号墓 玄室内 1号人骨（男性·熟年）、2号人骨（女性·壮年）、3号人骨（男性·熟年）



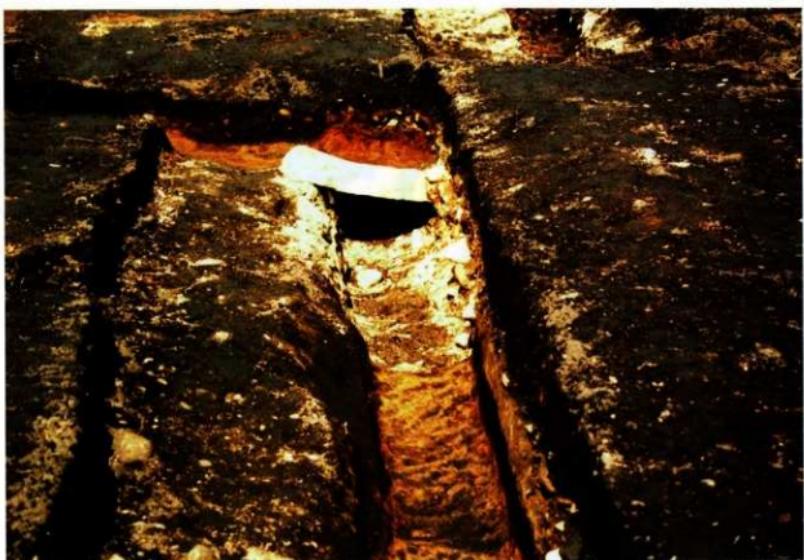
89号墓 玄室内 1号人骨、陷没骨折



89号墓 玄室内 1号人骨の左前腕 ゴホウラ製貝釧



89号墓 玄室内 2号人骨に伴う糞石



90号墓 竪坑確認状況



90号墓 竪坑埋土の断面



90号墓 竪坑および閉塞状況



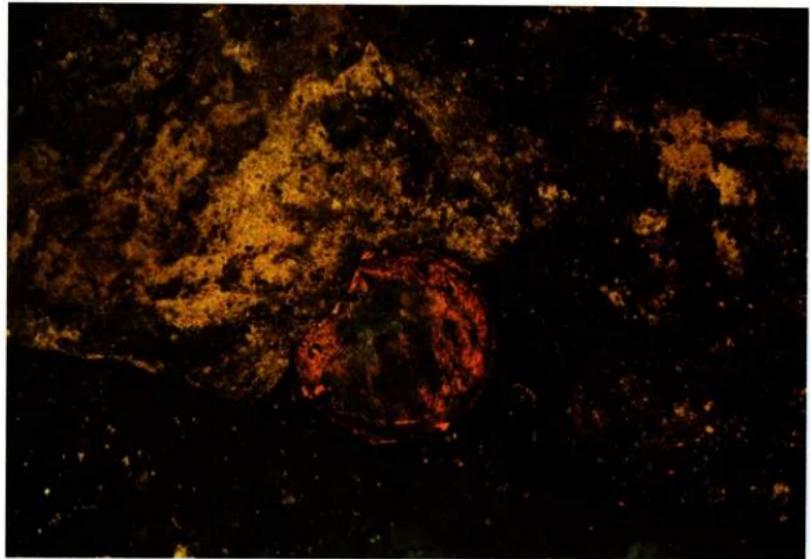
90号墓 玄室内 2号人骨（女性・壮年）



91号墓 竪坑確認状況



91号墓 竪坑埋土の断面



91号墓 竖坑内土器 出土状况



91号墓 封塞状况



91号墓 玄室壁面および天井（西側）



91号墓 玄室壁面および天井（東側）

图版 28



91号墓 玄室内 3号人骨（男性·熟年）



91号墓 玄室内 3号人骨、4号人骨（男性·壮年）

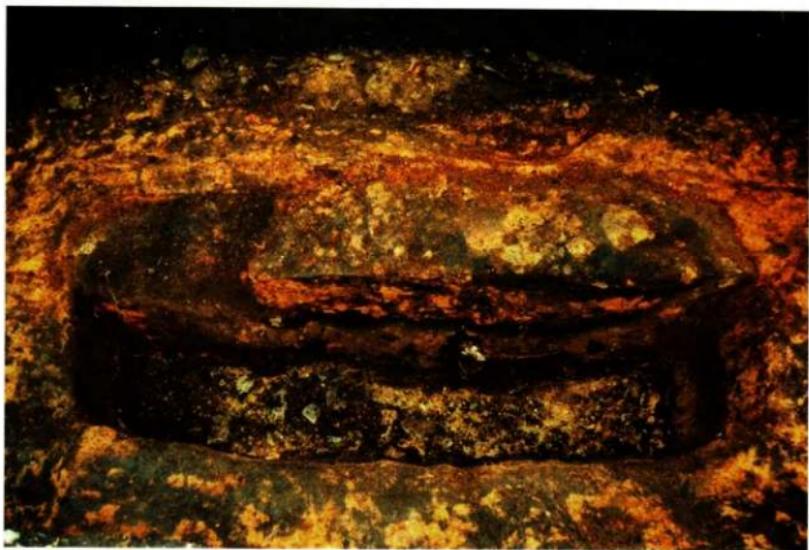


91号墓 玄室内 4号人骨

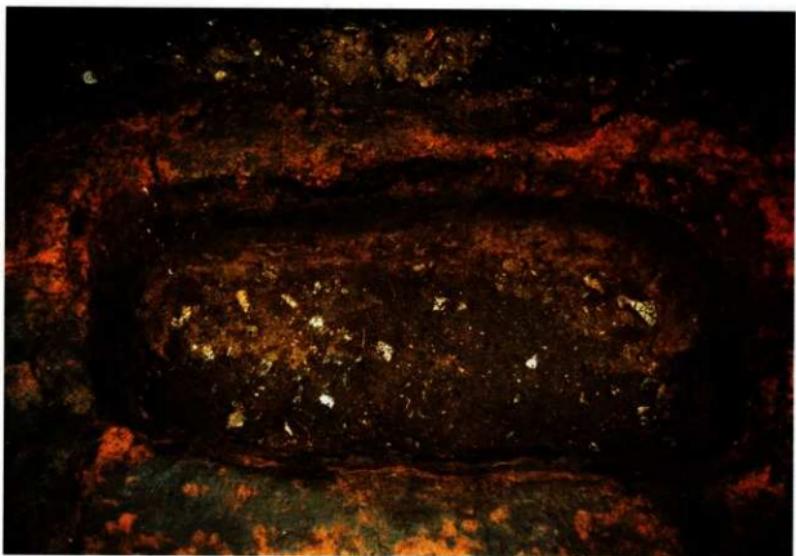


SK01 確認状況

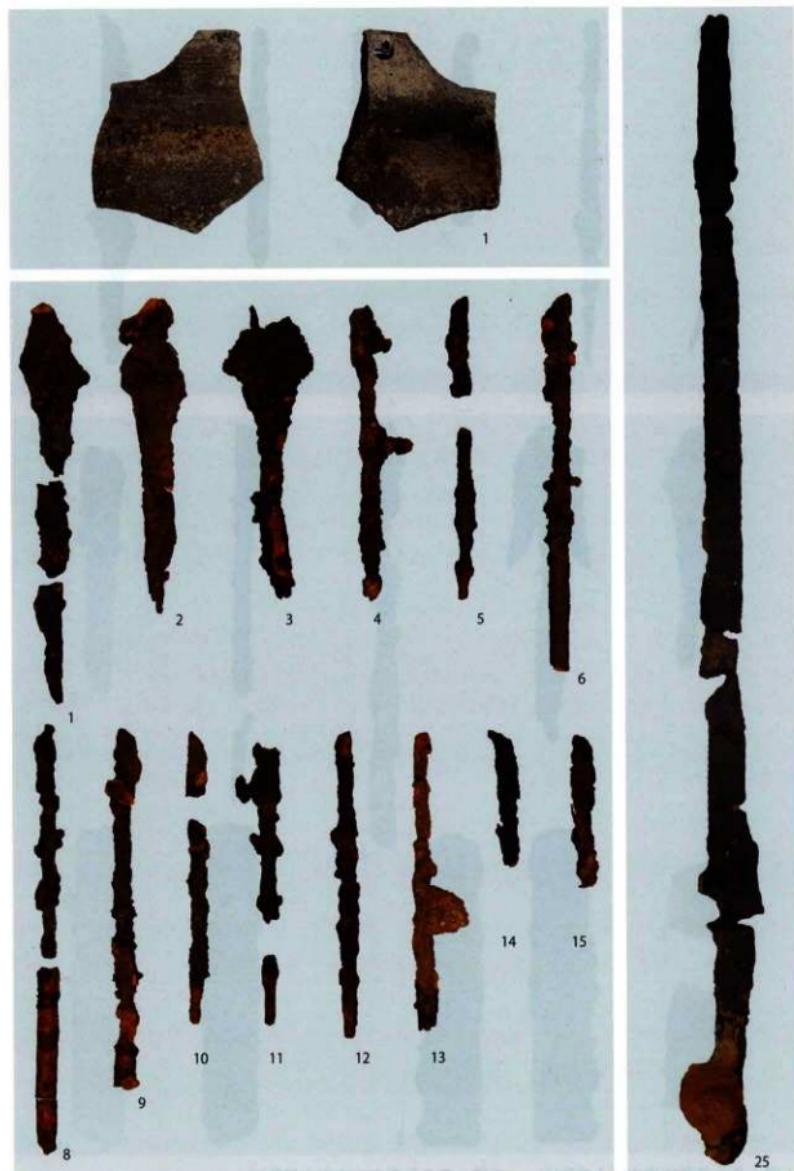
図版 30



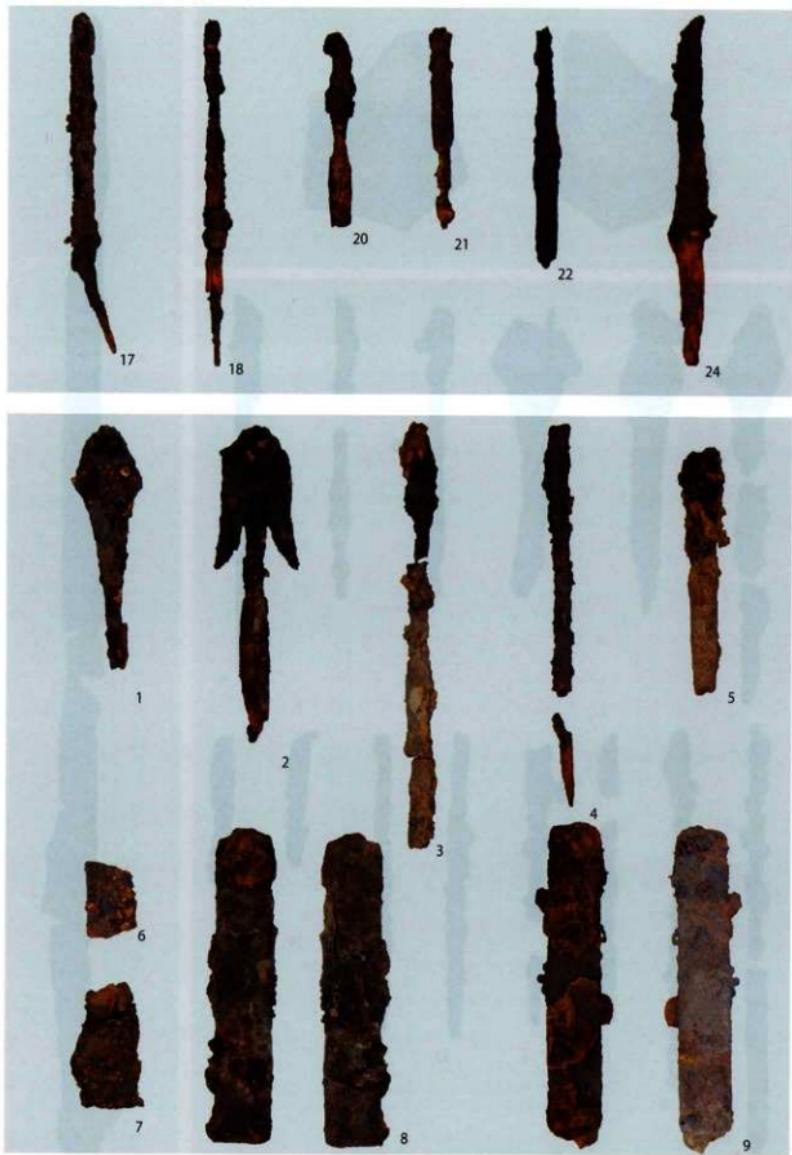
SK 01 埋土の断面



SK 01 完掘状況

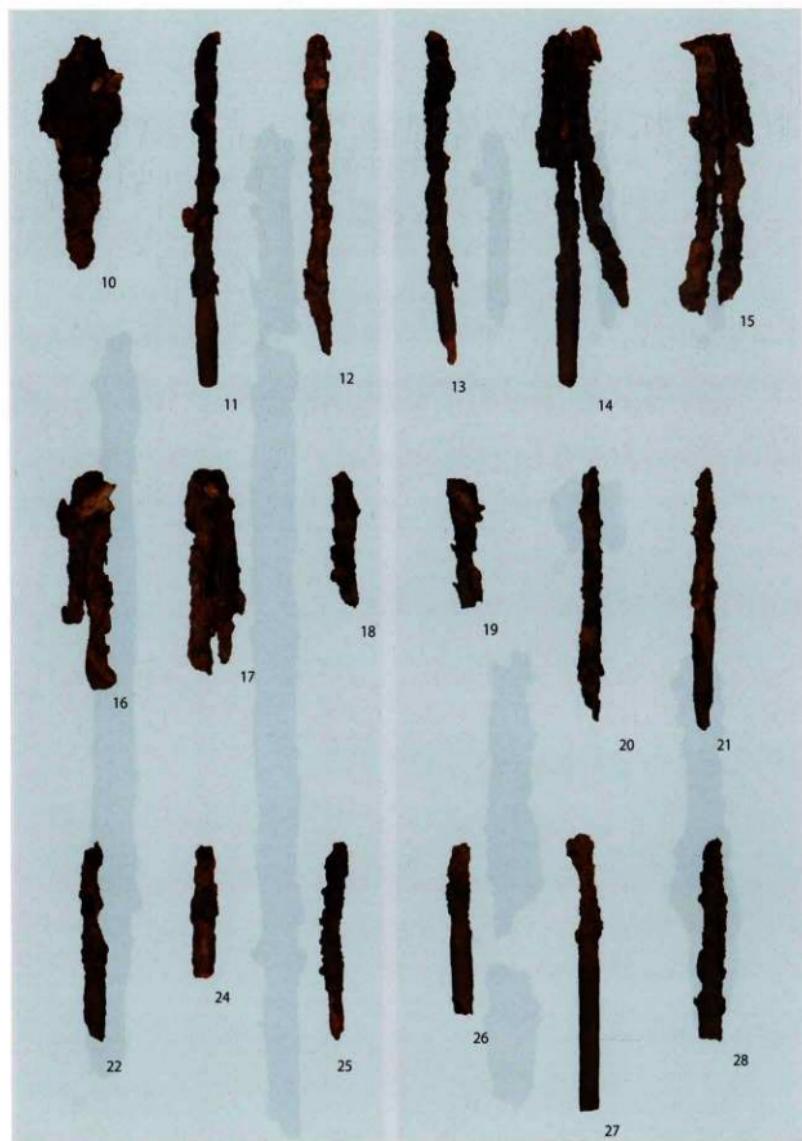


上段：3トレンチ出土須恵器 下段・右側：76号墓玄室内出土遺物(1)

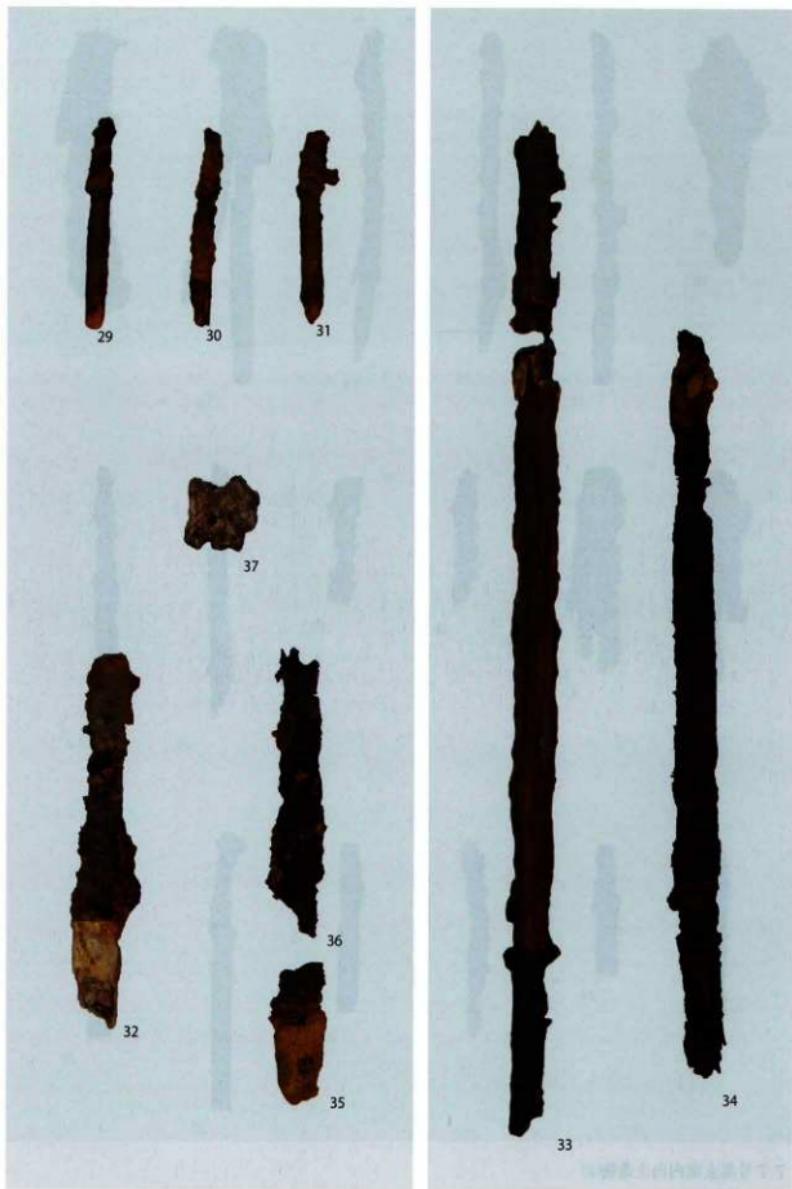


上段：76号墓玄室内出土遗物(2)

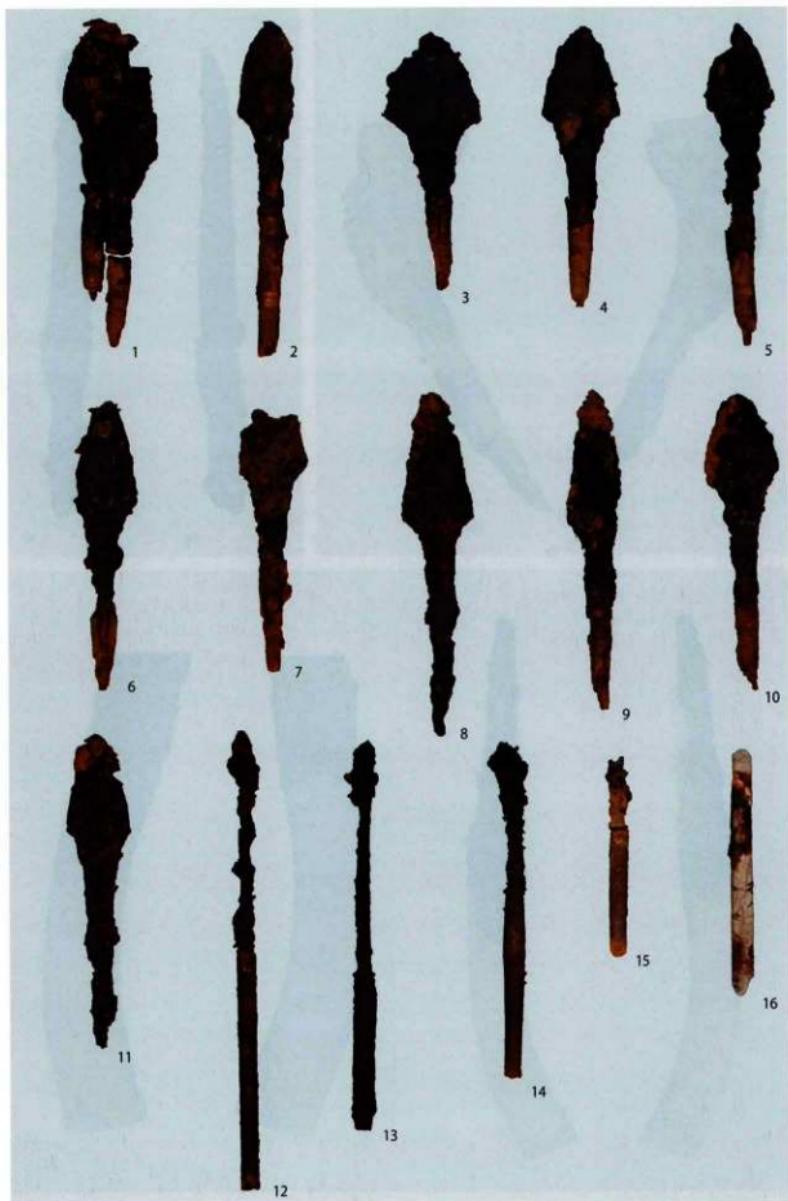
下段：77号墓玄室内出土遗物(1)



77号墓玄室内出土遗物(2)



7 7号墓玄室内出土遗物(3)



8 7号墓玄室内出土遺物(1)

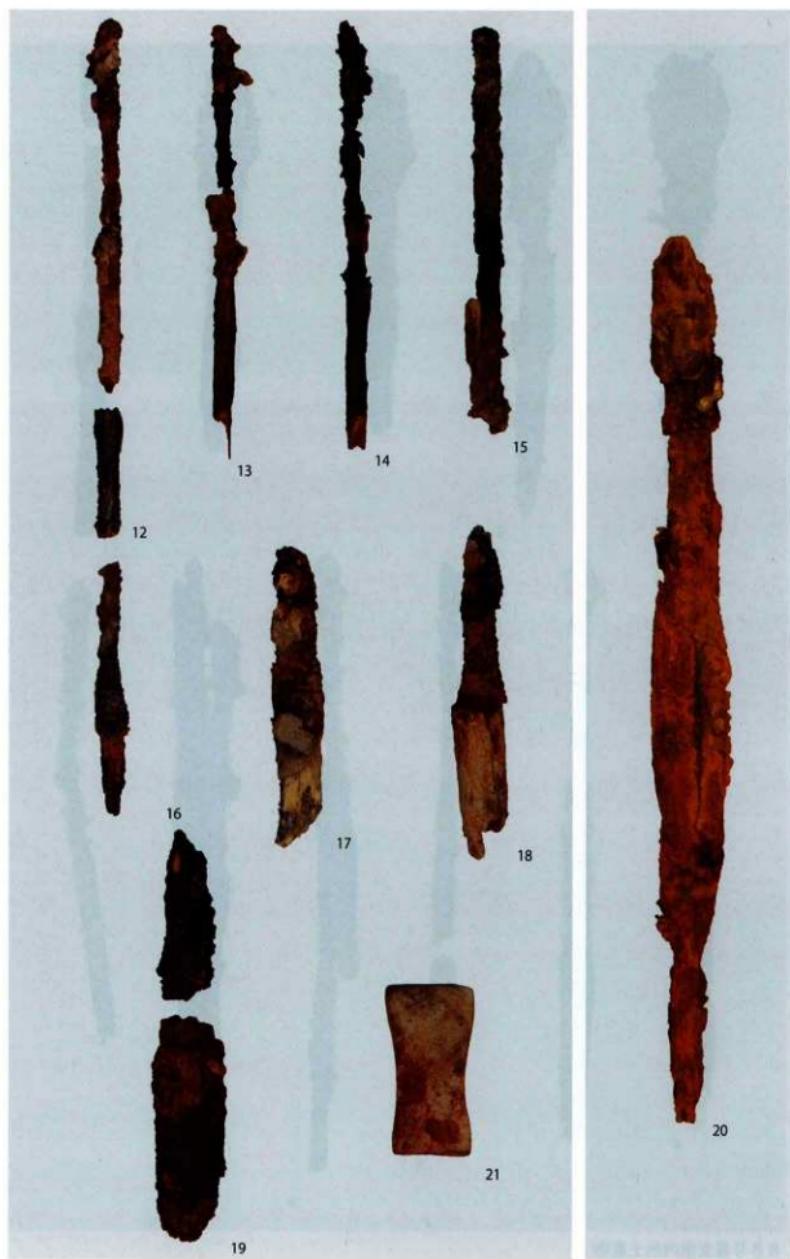


8 7号玄室内出土遗物(2)

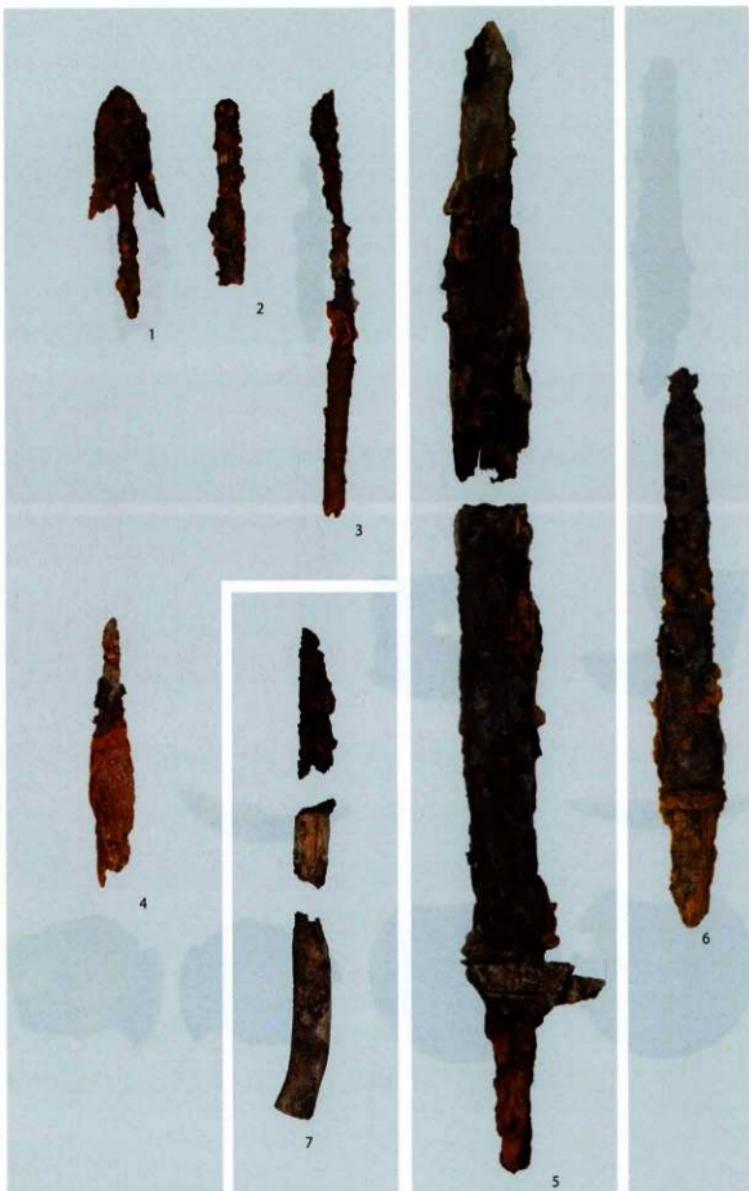


88号墓玄室内出土遗物(1)

图版 38



8号墓玄室内出土遗物(2)



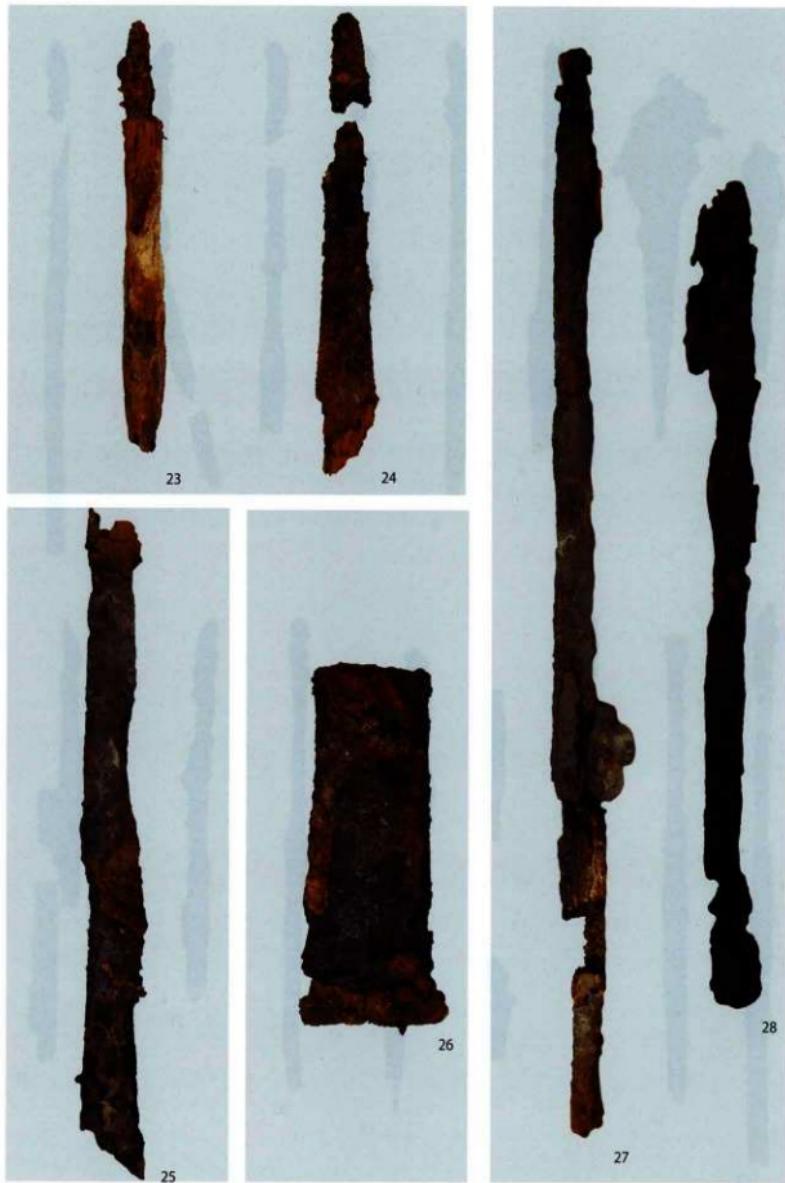
8 9号墓玄室内出土遗物



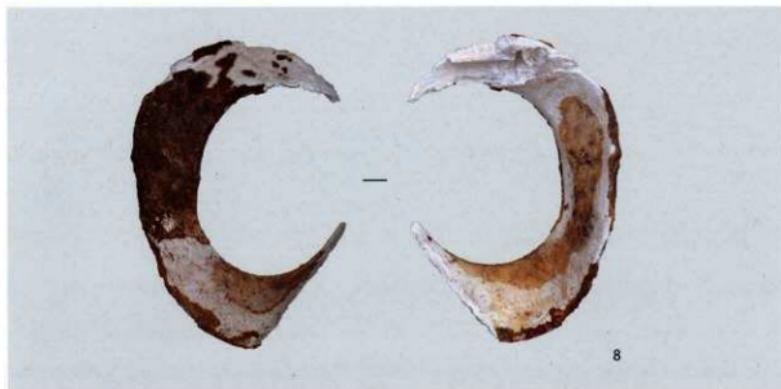
上段：90号墓玄室内出土遗物    下段：91号墓竖坑内出土土师器



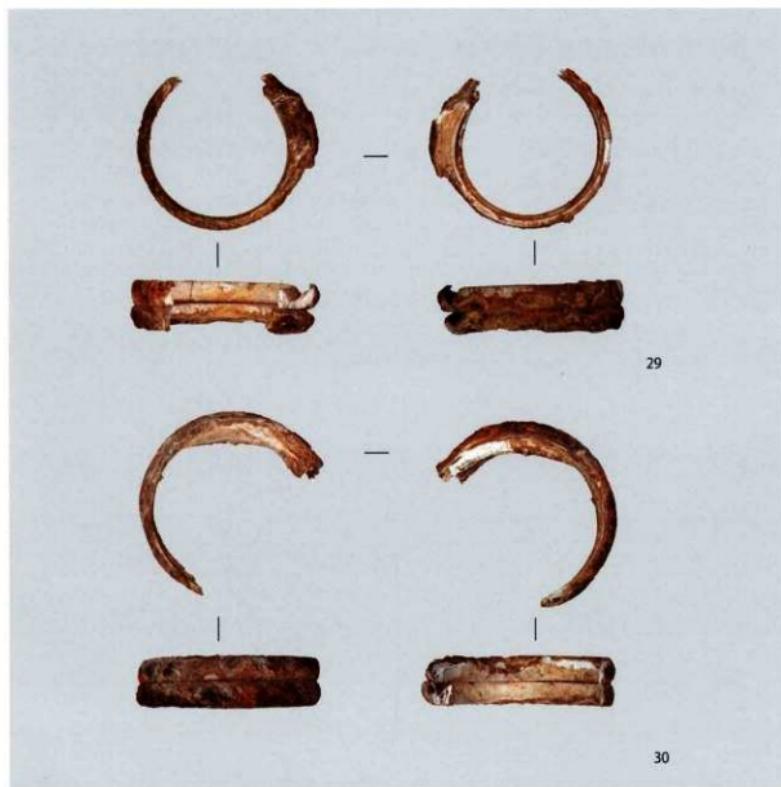
9 1号墓玄室内出土遗物(1)



9 1号墓玄室内出土遗物(2)



8



29

30

上段：8 9号墓玄室内出土ゴホウラ製貝釧

下段：9 1号墓玄室内出土イモガイ製貝釧



# 第 5 章



## 第5章 緊急対応調査

### 第1節 ST-128

#### 1. はじめに

平成22年8月23日、分布域の中央西寄りにおいて、トラクターで耕耘中に陥没したという一報があり、現地へ向かうと、竪坑上部閉塞タイプの竪坑部に類似した形で僅かな凹みと壁状の土が見えていた。同月26日、竪坑上部閉塞タイプと思い込んだまま遺構検出をすると、玄室全ての天井が陥没していることが判明した。

陥没部周囲のI・II層を剥ぐとIV層が露出し、このIV層も下部2~5cmしか遺存しておらず。昭和30年前後の開墾時にIV層下35cm程度まで削平されたことが判明した。その際、一部の天井が陥没したとみられ、中央付近には投入したシラスが5~20cm程の厚さで確認された。大半は疊混じりのIII層が充填していたが空洞部もあり、渓門付近の中位には厚さ30cmの流れ堆積があった。このたび、空洞部へ土が下降し、農機の加重で凹み、発見されるに至ったのである。

#### 2. 基本的層序

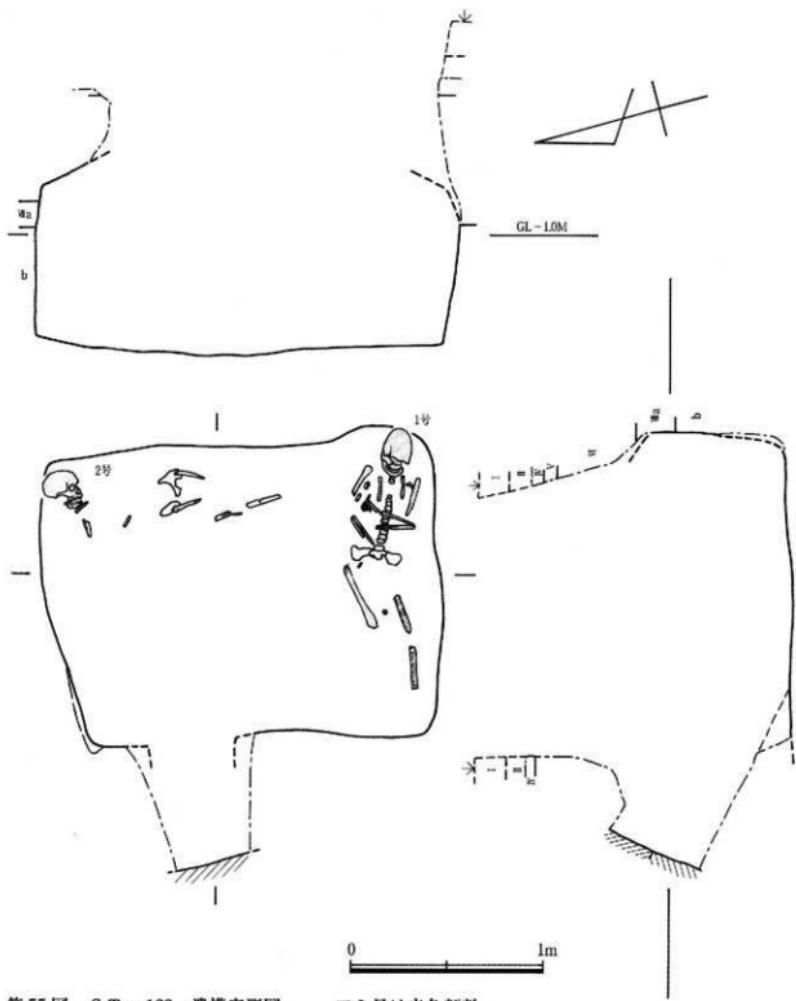
層序は上から、I層：畑耕作土、II層：旧耕作土・床土・客土、III層：黒灰～黒褐色土、IV層：アカホヤ火山灰（BP7,300）、V層：暗茶褐色～黒褐色土、VI層：淡黒褐色土、VII層：淡黄褐色～淡茶褐色微砂質土～細砂質土、VIII層：段丘砂疊層（BC13,000）に分別した。VII・VIII層には、小林軽石（BC13,000、黄白色～黄橙色降下軽石）を含む。VIII層は、数10m間隔で起伏し、地形の原型を形成している。III層はa・bに分かれ、厚さ10cm程のb層上面が古墳時代の遺構面である。

#### 3. 遺構と出土遺物

遺構は、渓門板石閉塞タイプであるが、竪坑～渓道は未調査で、将来に委ねる。渓道は長さ60cm程で、底面の幅は45cm程である。玄室は平入りで、片裾に近い両裾の長方形、切妻の家型であり、壁面はほぼ原形を保っている。奥行きは1.46~1.60m、最大幅2.06m、現存高さ0.92m、推定1.28mを測る。1号人骨の頭部の跡は奥へ8cm程抉られている。北壁をみる限り、扉は表現されていない（疊層部分に相応するため、削出は困難であったと思われる）。

被葬者は2体で、東頭位の1号人骨と北頭位の2号人骨である。人骨の所見によると、1号人骨は熟年の男性で、左腕を右胸上に曲げ全身に赤色顔料が塗布されている。顔面の潰れは、天井塊崩落によるものである。副葬品は無い。2号人骨は熟年の女性で、顔面の一部に赤色顔料が塗布されている。副葬品も無く1号人骨よりも遺存度が悪いが、玄室の奥もしくは右側を初葬としている当墳墓群の墓制からみると、1号人骨が初葬と推定しておく。

被葬者が熟年であるにもかかわらず副葬品が皆無な例は稀薄である。床面における鎧や木質の痕跡も皆無であったことから陥没時に持ち去られた可能性は薄く、当初から無かったと思われる。

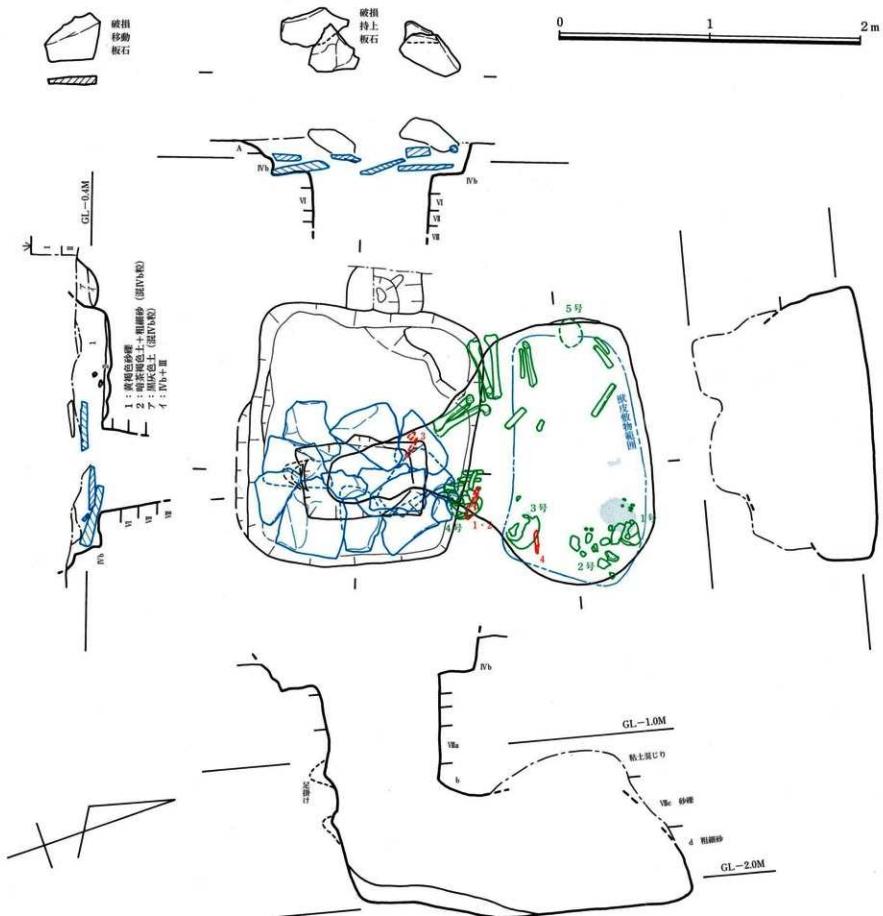


第55図 ST-128 遺構実測図 アミ目は赤色顔料

## 第2節 ST-129

### 1.はじめに

平成23年3月16日、古墳陥没の一報が届き現地へ向かうと、竪坑上部閉塞の板石がズレたり竪坑下へ崩落して直径30cmほどの空間と周囲の閉塞石が見えた。当墳墓は、分布域の北東部、17号墓の



第56図 ST-129 遺構実測図

南で、堅坑上部閉塞タイプの東南限に位置する。翌週24日、作業員を投入し、堅坑の検出に入ったが、一段目の掘形が通常よりも大きく、大きめの板石を複数使用した閉塞で、堅坑が長方形であることに気付き、堅坑の全面検出の必要性を感じ、全形の把握に努めた。

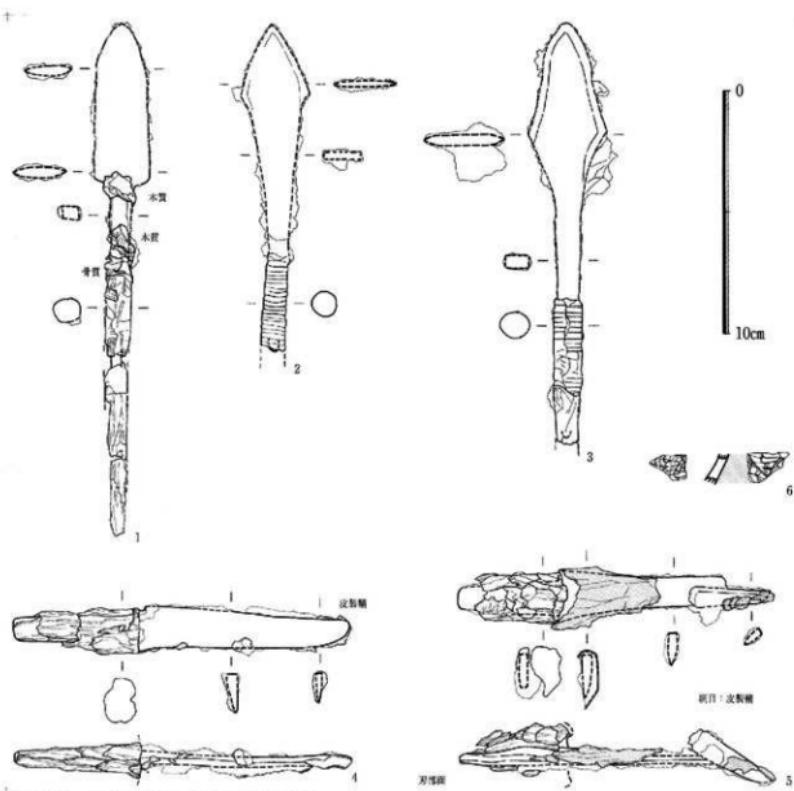
## 2. 遺構と出土遺物

I・II層約30cmを剥ぐとIV層もしくはIII・IV層混在の造構面に達し、東西1.72m、南北1.55mの隅丸長方形の堅坑を検出した。検出面からの深さは26cmで、その殆どは玄室下1/3の砂礫で埋められ、追葬坑は確認されない。堅坑～玄室中位の掘削土は検出されず、付近の墳丘封土として運ばれたものと思われる。底面はやや凹凸があり、底面付近2～3cmの土は硬く締まっている。中央付近の板石上部から、丹塗り上師器の小片（6）を検出したが、閉塞後の祭祀土器の一部の可能性がある。堅坑二段目は東寄りで、長さ75～86cm・幅48cmの長方形を呈し、両辺中央部は構築時か埋葬時に若干崩落したようであるが、砂礫層までの約35cmは垂直に掘削され、幅7～8cmの工具痕が残る。堅坑上部には、長さ40～50cm・幅25～44cm・厚さ3～6cm程の板石9枚が周間に置かれ、中央部を薄め（厚さ2～3cm）の板石2枚で覆っていたようである。堅坑1段目の西～南壁の底縁は若干抉られ、板石も壁面に接しており、板石を引掛けて落丁を防止するような意図がみうけられる。法面の南壁には検出面下78cmと104cmの2ヶ所に足掛が掘り込まれている。底面の中央以北は、緩やかに下降し、玄室とは18cmの段差になる。

玄室は平入り両裾楕円形タイプと思われるが、軟弱な砂礫層の崩落により壁面は下1/3程度が形状を保っている。天井部は粘土混じりであるが中央付近～西側の殆どは厚さ10～15cm程が崩落し、下部の砂礫と共に、厚さ15～20cm程埋没し、東側に人骨頭部3ヶ所と羨道付近に骨片が露出している状態であった。

玄室は、幅1.74m、奥行1.34mの楕円形を呈し、高さ84cm以上（推定90cm）と推定される。頭部の殆どが位置する東側が4～6cm高く、中央部に向かって降下する。壁面は粘土混砂礫～粗細砂であることから廟の造形は困難であり、崩落の時期も早かったのではないかと思われる。

玄室内の崩落土を除去すると、東頭位の成人骨4体と北頭位の小児骨1体が検出された。人骨の所見によると、1号人骨は頭蓋の半分程度と数本の歯と下肢が遺存する性別不明の壮年で、頭骨に赤色顔料（暗赤褐色）が塗布されている。下肢は弱く屈折している。副葬品は無い。2号人骨は女性の壮年で、頭骨小片10片のみが遺存する。3号人骨は男性の壮年で、頭骨は天井崩落によって北へ倒れ、右側頭部に置かれたと推定される刀子（4）の把部が見えていた。刀子の片面には革製鞘が遺存し鞘口に鹿角を使用していたようである。下肢は左側が遺存している。4号人骨は男性の壮年で当初から側臥と推定される。頭骨下に鉄鏃二本（1・2）が切先を東に向けて置かれ、両膝を曲げて壁にもたれさせた窮屈な姿勢で埋葬され、骨化後に倒れたと推定される。左膝付近には鉄鏃1本（3）が鏃身と莖部に分断して5cm程のレベル差で出土した。5号人骨は性別不明の6才位の幼児で、2号人骨の足下に頭部があり、大腿骨が南へ延びている。3号人骨のあとに埋葬されたため高位にあった下肢骨が遺存していると推定される。玄室の大部分・1～3号人骨の屍床には獸皮



第57図 ST-129 出土遺物実測図

表7 ST-129 出土遺物計測表

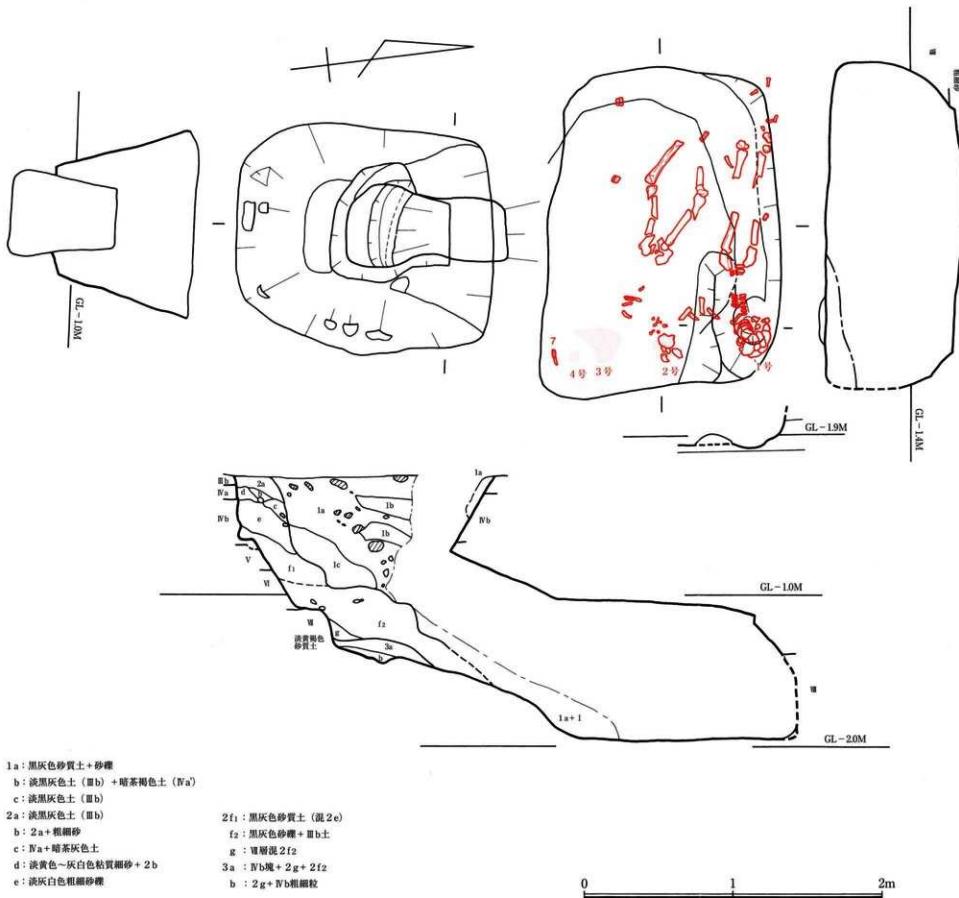
No.	種類	全長	法長(cm)			備考
			抜身全長	刀部長	刀部幅	
1	鉄鎌	210	—	63	23	
2	鉄鎌	135	135	30	29	矢柄約4cm破片
3	鉄鎌	173	170	46	32	
4	刀子	139	139	87	18	革製鞘連存、鹿角柄
5	刀子	131	140	98	22	革製鞘連存、鹿角柄、原位無不明

### 3. 小結

過去に調査した竪坑上部閉塞タイプの中では、竪坑一段目と二段目がともに最大で、板石も大きめのものを持ち送り式に配置し、中央頂部に軽量薄手の板石を載せている。多大な労力を必要とした閉塞用石材の運搬は被葬者が上級階層であることを想定させる。反面、実態としては副葬品には現れず、屍床に敷物があるという特異性だけである。獸皮は県指定1号墳に寄生する94号墓（単独

が敷かれていたと思われ、厚さ2~3mmで暗褐色の軟質風化有機物が広がっていた。

その他、5は玄室内の砂礫排土から出土した刀子で、片面の刃部切先と下半には革製鞘が遺存する。



第58図 ST-130 造構実測図 赤色アミ目は赤色顔料

埋葬)に見られたが、副葬品も無い被葬者であった。従って、敷物=上級層という仮説は成立し難い。

### 第3節 ST-130

#### 1. はじめに

平成23年7月19日、分布域の西寄りの畑で陥没したという通報を受けて現地で確認したところ、閉塞材が崩落して羨門が見えているような状況であった。同月21日から調査に入り、22日竹中教授に現地調査をお願いして人骨の取り上げ後、遺構実測を実施した。

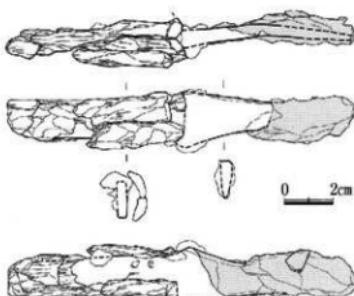
#### 2. 遺構と出土遺物

耕作により5cm程度削失しているが、Ⅲb層内で竪坑を検出した。竪坑は北辺両隅が角張り、南辺両隅が丸みをもち、北辺と東辺が胴張る、長さ1.71m、幅1.52mの隅丸長方形に近い。南辺中央部には、検出面から42cmと50cmの所に足掛が掘り込まれ、東辺中央部の深さ20cmの所にも若干傾斜する足掛け状の小テラスがある。検出面下88cmで幅18cmの段を有し、さらに深さ25~34cm・底面幅30cm内外の土坑状掘り込みがある。最深部は、検出面から1.25mである。埋土は大きく3層に分けられ、1回の追葬が認められる。1a層はやや軟質で多量の疊を含み、1b層が間に入るので3枚に細分される可能性が高いが不明瞭である。2a~2e層は疊が少なく、締まっている。3a層にはIVb層の塊が多く、上面から底面まで硬く締まっている。羨門上位には厚さ6~7cmの1a層が遺存し、下位の2f層上面までの長さ70cmが閉塞材(板)の長さを示している。IV層は3層内のみ含まれており、大半は近隣の墳丘へ供給されたことが想定され、また3a層上面が初期の板閉塞の底面と思われる。

羨門は幅40~58cmで、その天井は24度の傾斜で72cm下降し、底面は幅40cm、高さ77~70cm、傾斜20度でほぼ並行して下降し、玄室との境は急角度で22cm下がる。

玄室は平入り両裾隅丸長方形プランを呈し、幅2.14m(奥壁2.0m)、奥行1.56m(西1.35m)を測る。高さは90cm内外で、平天井である。南西部~北東部の傾斜変換部には高低差6cm内外の垂直に近い瘤状の段を有する。壁面上半は疊が稀で、幅6~7cmの工具痕を明瞭に残す。

被葬者は4体であるが、遺存が悪い。人骨の所見によると、1号人骨は壮年の女性で、頭蓋は自然崩壊と推定される。肩部と右腕は遺存が悪く、右膝部には足根骨状の骨片が置かれ、足先の小骨も動いている。股間から膝部にかけては胎兒を想定させるような海綿状有機物が広がっていた。赤色顔料は左肩部に認められたが頭骨には塗布されていない。頭骨の下は4~5cm掘り凹められ、2号人骨との境は長



第59図 ST-130 出土遺物実測図

(網目: 単製図)

7

さ80cm・幅20~30cm・高さ20cmの砂礫を盛っている。右側（奥壁）底面も整形後に砂礫が寄せられた断面U字型を意識した尻床が築かれている。2号人骨は、赤色顔料が塗布された頭蓋と歯のみ遺存する、若年で性別不詳である。3号人骨は足先を北西方向に向け、上半身が殆ど遺存しない成年の男性である。頭部は天井崩落によって圧延され消滅に及しく、赤色顔料と骨片が遺存している。そのすぐ南には茶褐色の顔料と切先を東に向かた刀子（7）があり、3号人骨の膝から南へ20cm、さらにそこから50cm西の位置に足の一部が遺存している。閉塞板の腐朽後に黒色土の多い1a層が流入し、大半が消滅している。4号人骨は、性別・年齢とも不明であるが、頭部底面に赤色顔料が散布されている。足骨の位置から見ると成人並みの身長である。

刀子は、鹿角柄で全長14.2cm、刃部長6.6cm・幅2.3cmを測り、切先から刃部中程まで皮製鞘が銹着している。裏面（床接地面）は錆跡が残る。鹿角の遺存も悪い。

## 第6章　まとめと展望

130基のうち、学術調査と開発に伴う調査は20%程度であり、残りの大部分の豊坑が未調査であることは将来的課題になっている。昭和46年およびそれ以前に破壊された地区を除く約116,000m<sup>2</sup>が分布域であるが、開墾時に反（約1000m<sup>2</sup>）当たり4~5基の陥没があったことを単純計算すると430~540基が未調査のまま陥没していることになる。ここ数年は滅多に陥没していないことは、玄室天井部と現地表までの厚さが1mを越えるものに絞られつつある。鹿児島大学の学術調査地や送電線鉄塔代替地での分布状況によると、1000m<sup>2</sup>あたり10~13基が分布しているので、単純計算では1,200~1,500基が包蔵していることになる。

当墳墓群は、豊坑上部閉塞タイプと羨門板石閉塞タイプ、羨門土塊閉塞タイプの分布が重複しつつ、さらに分布の粗密もある（特に西～西南部は密度が低い状態）が昭和40年代後半以降、地権者や耕作者が未通報のまま埋めてしまった墳墓も數10基あるようだが、300~400基ほどは、天井を保った状態で包蔵している可能性がある。豊坑上部閉塞タイプは5世紀中葉には築造を止めるが追葬は残る。同じ頃、羨門板石閉塞タイプが分布域を少し重複して南側に築造される。このタイプは5世紀後半がピークで、南東部に羨門土塊閉塞タイプが6世紀前半にかけて築造される。

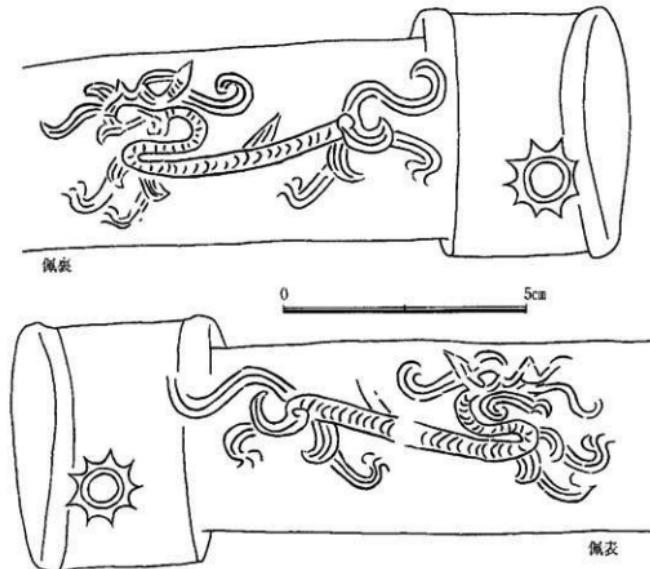
陥没による緊急対応調査に終始している現状を開拓しなくてはならないが、しばらくは、現状を見守るしかない。

最後に造墓集団の集落である。北2kmには、弥生時代後期～古墳時代後期の大集落・内小野遺跡が立地し、鐵鋌状鉄器や高坏軸用輪の羽口、ガラス小玉、切子玉が出土している。西3kmには鉄床石や高坏軸用輪羽口、大刀、ガラス小玉が出土し乳幼児用の小型形式の地下式横穴墓が29基検出された天神免・岡松遺跡が立地する。内小野遺跡の0.5km東にも広大な寺園遺跡（未調査）があり、この3大遺跡が、当墳墓群の3タイプの分布に対応する可能性がある。なお寺園遺跡の東隣の妙見遺跡2号住居からは籠羽口とバリが付いたままの鋳造鉄斧が出土しており、留意する必要がある。

## 補追

### 1. 114号墓出土象嵌大刀の龍文について

平成21年度に保存処理を実施し、龍文を出して頂いたところ、既刊報告書の実測図に不足部分があったので、ここに改めて掲載し、若干の補足説明をしておく。



第60図 銀象嵌龍文実測図（保存処理後）

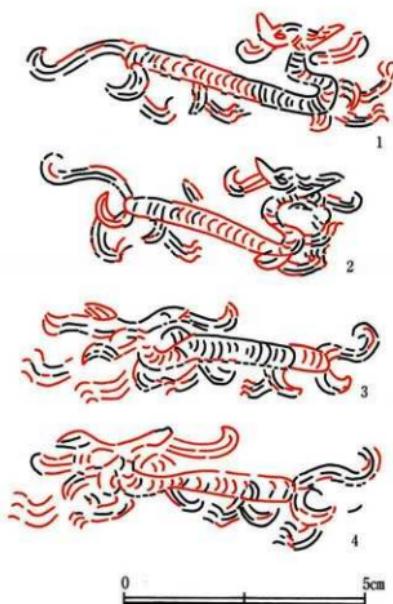
佩表の動物は、鬚の生えた下顎と髭の生えた上顎を開き、舌（2本線）を出している。S字に曲がる頸部と鱗のある細長い胴体、踏張る四足に鉤爪は佩裏の動物と同様であるが、背鱗は2本線である。

佩裏の動物の背鱗は1本線で、顎を開いたように見える鬚の前方で上下に開き舌を出しているのであろうか。上顎（もしくは髭）が途切れているので理解しづらい。

#### 新沢千塚327号墳出土大刀との比較

327号墳は、1966年に調査された1辺20m・高さ1.3mの方墳で、中級クラスの古墳である。大刀は第2主体から出土し、佩表の2ヶ所と佩裏の2ヶ所に、調査当時は龍虎文とされた銀象嵌があり、関部に3個セットの日輪がある。龍文は断続的に遺存している<sup>(1)</sup>。X線分析報告<sup>(2)</sup>の1・2（佩表）は頭部以外は比較的遺存し島内114号出土大刀の龍文に酷似する。そこで、双方の龍文を比較するうちに、327号墳出土大刀の象嵌が蘇ってきた（第60図）。

体幹以外は三本線で描き、S字の首（327号墳の3・4は該当しない）。髭の表現は曲線の配置が



第61図 327号噴出土大刀の象嵌復元図

酷似する。異なるのは四肢であり、A・Bは長めの四肢で踏張り躍動感がある。2の顔は上顎・下顎・舌の区別が比較的明瞭で、A・Bよりも理解しやすい。1にも背鱗があった可能性が高い。3・4は四肢が若干短めで、角はあるが短く真直な頭、背鱗は無い可能性が高い。1・2とは明らかに表現が異なり、虎を想定すべきと考える。配置も両面対象ではなく、1は刀身の中央付近に、5との間に2が、3・4は刀身の1/3・2/3付近に配置され、5・6（日輪の3個セット）のみがX線で重複する。四肢のバランスと完成度からみると、2→1→4→3の順に象嵌されたと推定する。

327号墳の龍文と島内114号墓の龍文は酷似しており、同一工房で同一工人によるものと結論付けたい。<sup>③</sup>

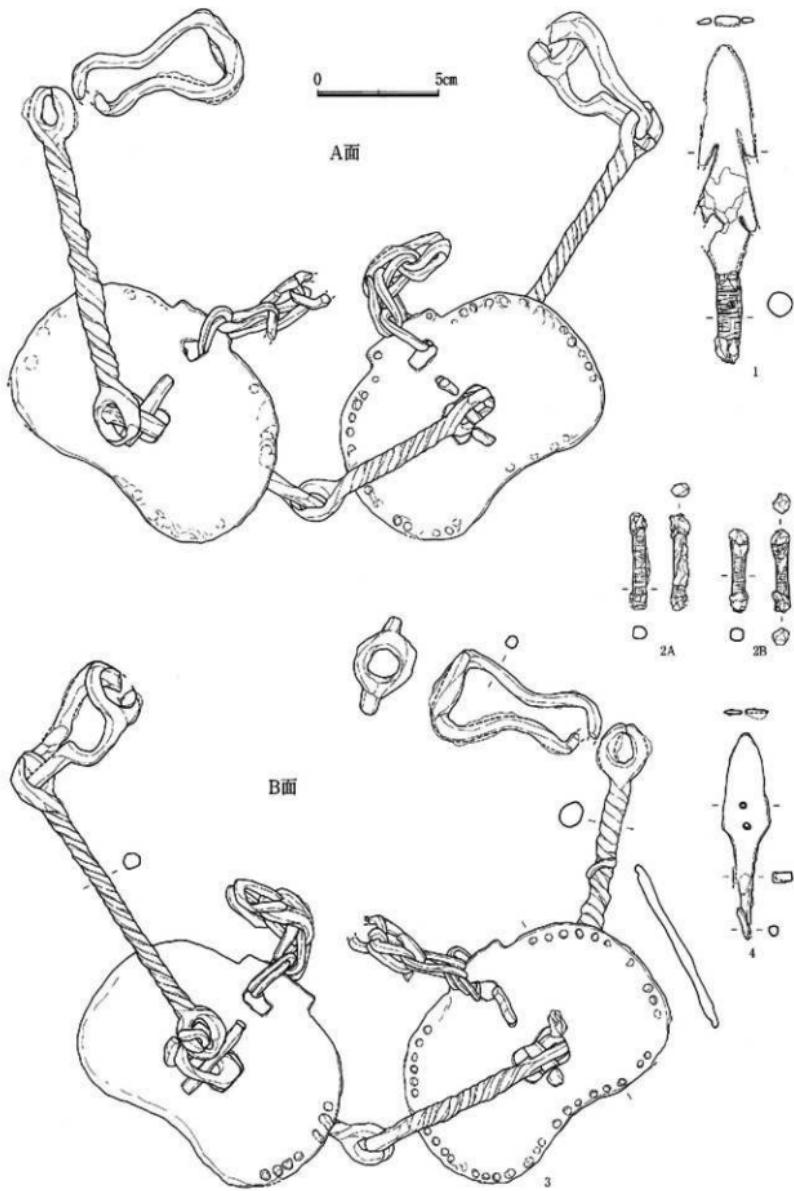
表8 象嵌の比較

		全長(mm)	胸一尻間(mm)	鉤爪	背鱗	口腔・舌	頭部
島内 114号	佩表龍文(B)	93	52	四肢	あり 2本線	上下に髭、2本線の舌 鬚は頬部方向	S字
	佩裏龍文(A)	85	50	四肢	あり 4本線	上下に髭、3本線の舌 鬚は短い	S字
新沢千塚 327号	佩表1	77	44	左前肢 左後肢	ありか	2と同様か	S字
	佩表2	70	38	前肢	あり 2本以上	顎を開いて舌を出す 下顎と鬚の表現	S字
	佩裏3	74	39	前肢	なしか	—	短、直
	佩裏4	74	36	四肢	なしか	—	短、直

## 2. 61号墓出土の鉄鎌について

既刊報告書の遺物No647について、保存処理事業に委託したところ、鋲着していた2本の鉄鎌と蝶が分離され、二段逆刺式鉄鎌であることが判明した（第62図-1）。全長131mm、最大幅23mm（推定29mm）、厚さ2~4mmを測り、上段の腸抉以下が左右非対称に截断されている。刃部も直線的で粗雑な整形である。

当墳墓群における二段逆刺式は11・55・82号墓に加えて4例目となった。微々たる数ではあるが県内では最多の出土数である。



第 62 図 ST - 115 出土帶保存処理後、ST - 61 出土鐵錐保存処理後 ST - 100 出土両頭金具、  
ST - 126 出土鐵錐保存処理後 実測図

### 3. 115号墓出土の轡について

平成23年7月13日、文化庁の豊島直博調査官のご指摘により、精円形鏡板の周囲に珠文打出が連続していることがわかった。既刊報告書は出土時の実測図であり、施文も鏽彫れと区別できるほど顯著でなく、施文の存在はわからなかった。このたびあらためて保存処理後に実測したのでここに掲載する（第62図-3）。

鏡板は、長さ120mm、幅76mmで、周縁の表には鉢装飾を意識した直径3~4mm・高さ1mm未満の高まりがあるが、明瞭な部分は少なく、鏽彫れと剥落による劣化が激しい。裏面には、直径2~3mm・深さ1~1.5mmで底面が平らな轡による凹みが2~3mm間隔に連続し、凸部の直線部のみ施されていない。官見では、昭和10年に出土した2号墓出土轡の鏡板（写真のみ現存）も同様と思われる他は、小林市野尻の人蔵地下式横穴墓群27号墓などにみられる。<sup>⑩</sup>

### 4. 63号墓出土の鉄劍について

63号墓出土の鉄劍（報告書No656）は、上記と同様のご指摘により3ヶ所で若干屈折する蛇行劍に分類する。

### 5. 100号墓出土の両頭金具について

既刊報告書IのNo958は、2点の両頭金具であることから、改めて実測図を提示する（第62図-2A・B）。Aは、長さ40mm、中央部径5mmで下端が少し欠損している。Bは長さ34mm、中央部径5~6mmである。両方とも有機物に覆われている。中央付近の断面は正な円形である。

### 6. 126号墓出土の鉄鎌について

既刊報告書IIのNo98には、保存処理過程において鎌身部に穿孔2が認められたことから、改めて実測図と写真を掲載する（第62図-4、写真図版15）。全長86mm、刃部長40mm、孔径2mmである。

#### 註

- (1) 千賀久「新沢三二七号墳の龍虎刀について」『花園史学』第8号 花園大学史学会 1987
- (2) 同 「新沢千塚の鉄刀剣（3）327号墳の鉄刀の象嵌文様」「大和考古資料目録 X 線調査資料（1） 新沢千塚の鉄刀剣 第16集」奈良県立橿原考古学研究所付属博物館 1989  
なお、上記2点の文献入手の際、同研究所の吉村和昭氏にお世話をになりました。末筆ながら御礼申し上げます。
- (3) 龍文は、すでに復元展示してある（奈良県立橿原考古学研究所附属博物館「『大和の考古学』常設展示回顧」1997  
が、筆者とは若干の差異がある。
- (4) 桃崎祐輔「日本列島における騎馬文化の受容と拡散」『第46回埋蔵文化財研究会 渡来文化の受容と展開』埋蔵文化財研究会1999

**備考** 7 6号墓の初葬は、赤色顔料屍床で短甲と鉄鎌が副葬され、追葬の2号か3号人骨に脣と大刀が副葬されたと思われる。7 7号墓の胡蘿の上に載った大刀は、立て掛けられていたものが腐蝕して刀身が倒れた状態である。さらに胡蘿内には80~100cmの穴が入っているので、胡蘿を直立させるか壁に立て掛けられていたと想定される。8 7号墓の18の鹿角柄の木貫通孔は文様と思われる。  
SK01は形状と覆土・位置などから、馬羈の可能性が高い。以上、失礼ながら私見を述べさせていただいた。



ST - 128 玄室 全景（西から）



同上 美門板石閉塞状態（東から）

図版 2



ST - 128 1号人骨（北から）



同上 2号人骨（西から）



ST - 129 堪坑埋土と閉塞石・空洞 検出状態（南から）

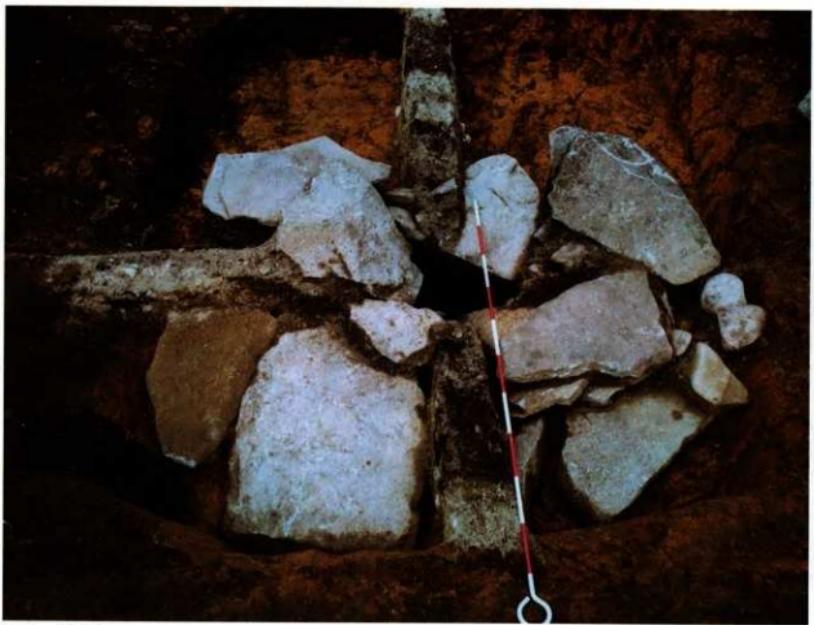


同上 堪坑 断面層序（南から）

图版 4



ST - 129 穹坑 断面層序（北から）



同上 東から



ST - 129 セクション・非原位置板石除去（東から）



同上 南から

図版 6



ST - 129 板石除去、竪坑 2段目（南から）



同上 竪坑 2段目と底面 4号人骨と副葬品（南から）



ST - 129 玄室全景（羨道から）



同上 1～3号人骨 頭蓋とその周辺

中位の茶褐色部分は獸皮敷物か

図版 8



ST - 129 4号人骨と副葬品



同上 1～4号人骨下肢と5号人骨頭蓋



ST - 130 竪坑検出状態（西から）

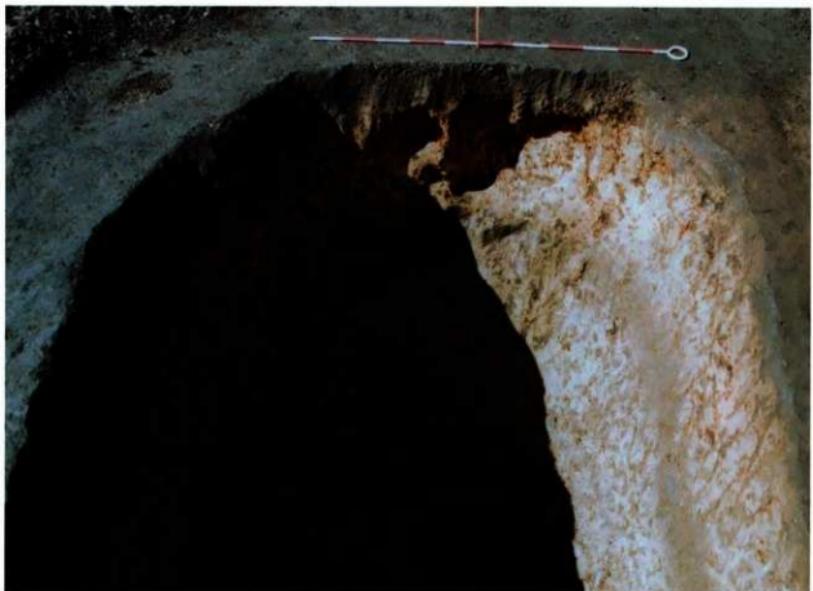


同上 半裁（東から）

図版 10



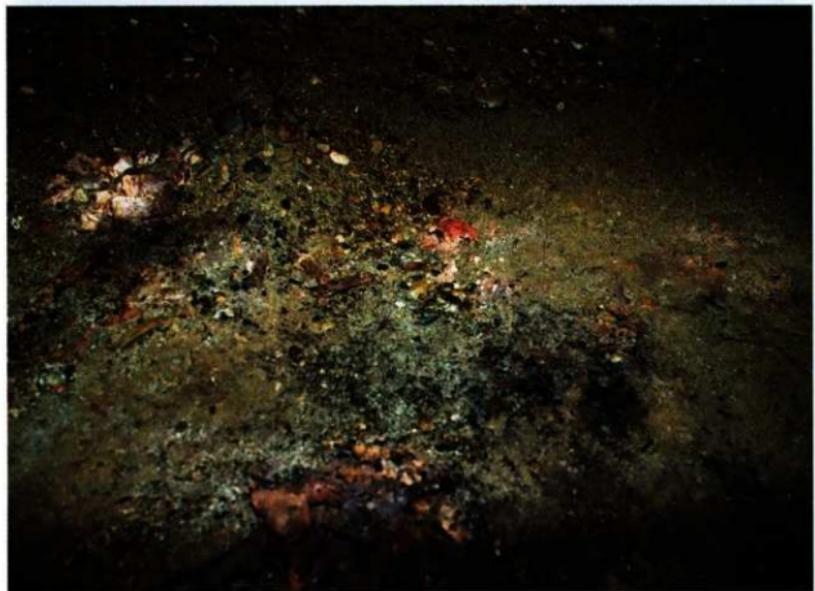
ST - 130 壁坑 完掘（南から）



同上 南壁 足掛け 整形状態（北から）



ST - 130 玄室 被葬者 4 (南西から)



同上 1~3号人骨 頭部周辺 (南西から)

図版 12



ST - 130 1・3号人骨 下肢（南から）



同上 3・4号人骨 頭部・赤色顔料と副葬品（西から）



ST - 129 出土遺物



ST - 130 出土遺物



ST - 114 出土 銀象嵌大刀の龍文（保存処理後：佩表）



同上 佩表

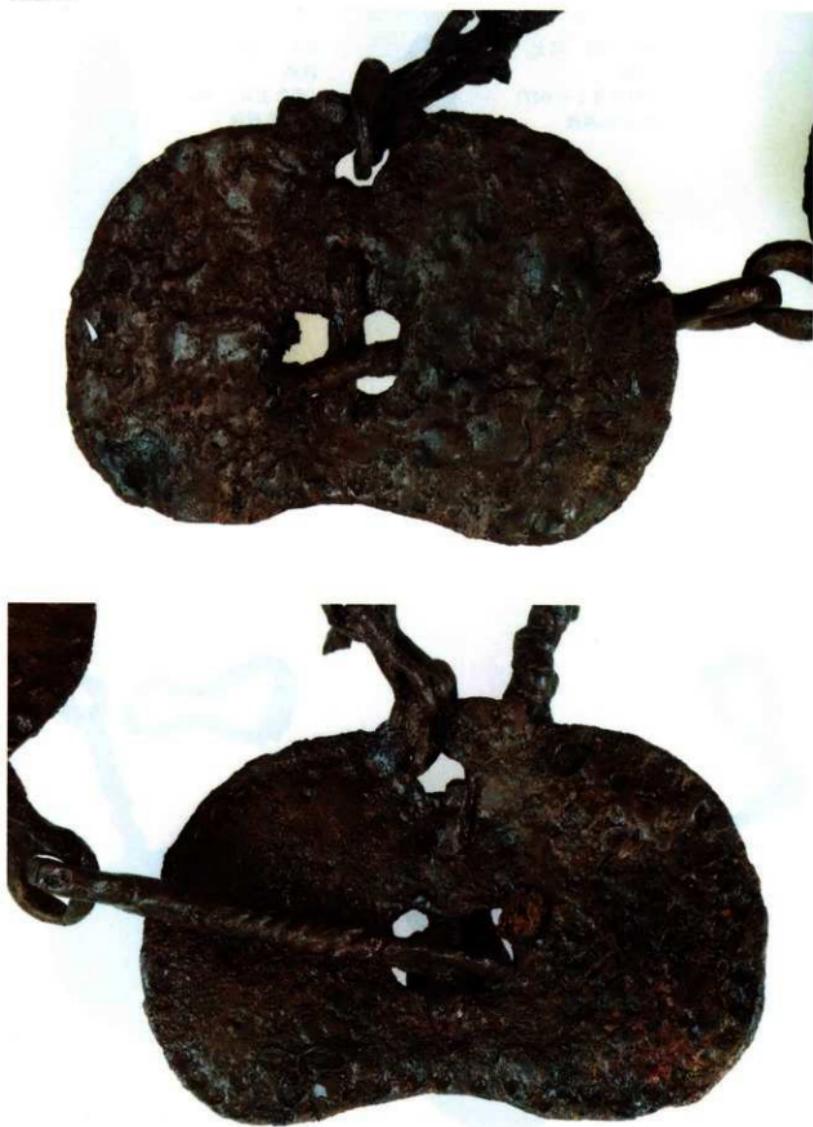
ST - 61 出土  
鉄鎌  
(報告書 I - 647)  
保存処理後



ST - 126 出土  
鉄鎌  
(報告書 II - 98)  
保存処理後

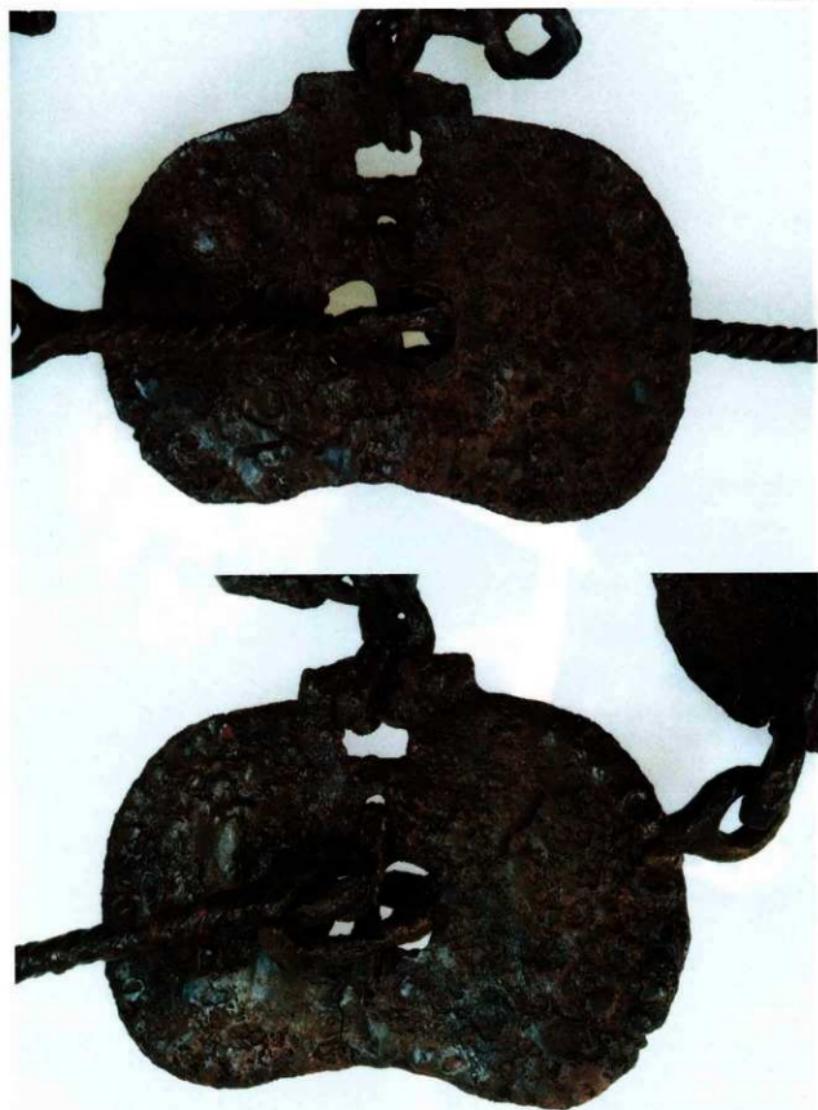


ST - 115 出土 舂 保存処理後 B面



上：A面左の鏡板 表 珠文打ち出し

下：反転 鑿打ち痕（凹み、B面右）



上：A面右の鏡板 裏 撃打ち痕（凹み）

下：反転 珠文打ち出し（表）



S T - 115 出土 脊 X線撮影写真

## 付 篇

- 1 島内地下式横穴墓群 128・129・130 号墓出土人骨
- 2 島内地下式横穴墓より出土した遺物に付着する繊維等について



## 付篇1 島内地下式横穴墓群 128・129・130号墓出土人骨

鹿児島女子短期大学 竹中 正巳

頭蓋計測値、頭蓋形態小変異の出現状況および四肢骨計測値については、表1～8に示す。

### 島内地下式横穴墓群 128号墓

2体の人骨が遺存している。2体とも仰臥伸展葬である。

#### 1号人骨（男性・熟年）

保存状態は良くはない。仰臥伸展葬で、全身に赤色顔料が付着する。性別は眉弓の突出が強いことから、男性と判定される。年齢は咬耗がMartinの2度であることから、熟年と推定される。

#### 2号人骨（女性・壮年）

保存状態は良くはない。全身の骨が遺存する。仰臥伸展葬で、赤色顔料が顔面に付着する。性別は眉弓の突出が弱く、側頭骨の乳様突起が小さいことから、女性と判定される。年齢は咬耗がMartinの1度であることから、壮年と推定される。

### 島内地下式横穴墓群 129号墓

5体の人骨が遺存している。1・2・3・4号人骨は東頭位で、5号人骨は北西の頭位である。

#### 1号人骨（男性・壮年後期）

保存状態は悪い。膝を軽くくの字に曲げた伸展葬である。赤色顔料が顔面に付着している。性別は眉弓の突出が強いことから、男性と判定される。年齢は咬耗がMartinの1～2度であることから、壮年後期と推定される。

#### 2号人骨（女性・成人）

保存状態は悪い。頭部のみが遺存する。赤色顔料が顔面に付着する。性別は眉弓の突出が弱いことから、女性と判定される。年齢は頭蓋の厚さから成人に達していた可能性が考えられる。

#### 3号人骨（男性・壮年）

保存状態は悪い。頭蓋に赤色顔料が付着する。性別は眉弓の突出が強いことから、男性と判定される。年齢は咬耗がMartinの1～2度であることから、壮年後期と推定される。

#### 4号人骨（男性・壮年）

保存状態は非常に悪い。膝を強く屈曲し、左右の足を広く開脚している。性別は側頭骨の乳様突起が大きく、眉弓も突出していることから、男性と判定される。年齢は歯の咬耗がMartinの1度であることから、壮年と判定した。

#### 5号人骨（性別不明・小児6歳）

保存状態は非常に悪い。歯の萌出状況から 6 歳と年齢を推定した。

#### 島内地下式横穴墓群 130 号墓

4 体の人骨が遺存している。4 体とも仰臥伸展葬で埋葬されていた。4 体とも頭を東に、足先を西に向いている。赤色顔料は少なくとも 3 体の人骨に付着していることが確認される。

##### 1 号人骨（女性・壮年）

保存状態は悪い。赤色顔料が顔面から頸部にかけて付着している。性別は寛骨の大坐骨切痕の角度が大きいことから女性と判定される。下顎の永久歯は第三大臼歯まで萌出していること、咬耗が Martin の 1 度であることから、壮年と推定される。

左右の中足骨が原位置からかなり離れた場所に存在する。この骨の移動がどのような理由によるものなのか、今後の検討が必要である。

##### 2 号人骨（性別不明・若年）

保存状態は悪い。赤色顔料が顔面に付着する。年齢は下顎の第二大臼歯まで萌出しており、咬耗は弱い。したがって、年齢は若年と推測される。

##### 3 号人骨（男性・成人）

保存状態は悪い。頭蓋に赤色顔料が付着する。性別は寛骨の大坐骨切痕の角度が小さいことから男性と判定される。年齢は大腿骨の遠位端が完成していることから、成人の可能性が考えられる。

##### 4 号人骨（性別不明・年齢不明）

保存状態は非常に悪い。頭部に相当する場所に、赤色顔料が遺存している。性別や年齢を推定する骨の部位が遺存していない。

表1. 島内地下式横穴墓群出土成人骨の脳頭蓋計測値  
(mm) 及び示数

M No.	人骨番号	島内	島内	島内	島内
		128-1	129-3	129-4	128-2
		性 別	男性	男性	女性
	年 齢	熟年	壯年	壯年	老年
1	頭蓋最大長		189	191	170
8	頭蓋最大幅		142	141	
17	バジオ・ブレグマ高			134	
3	グリル・コムグ長		187	190	168
20	耳アレグマ高				
5	頭蓋底長				101
9	最小前頭幅	94			90
10	最大前頭幅	123	122		
11	両耳幅	123		127	
12	最大後頭幅			114	
13	乳突幅				
7	大後頭孔長				
16	大後頭孔幅				
23	頭蓋水平周	538			
24	横弧長	313		321	
25	正中矢状弧長			385	
26	正中矢状前頭弧長	125	125	131	123
27	正中矢状頭頂弧長		140	132	
28	正中矢状後頭弧長			122	
29	正中矢状前頭弦長	114	109	112	111
30	正中矢状頭頂弦長		124	118	
31	正中矢状後頭弦長			105	
8/1	頭蓋長幅示数		75.1	73.8	
17/1	頭蓋長高示数				78.8
17/8	頭蓋幅高示数				
20/1	頭長耳アレグマ高示数				
20/8	頭幅耳アレグマ高示数				
9/10	横前頭示数	76.4			
9/8	横前頭頭頂示数				
16/7	大後頭孔示数				
1+8+17/3	頭蓋モルタル				
26/25	前頭矢状弧示数		34.0		
27/25	頭頂矢状弧示数		34.3		
28/25	後頭矢状弧示数		31.7		
27/26	矢状前頭頭頂示数	112.0	100.8		
28/26	矢状頭後頭頭示数		93.1		
28/27	矢状頭頭後頭示数		92.4		
29/26	矢状前頭示数	91.2	87.2	85.5	90.2
30/27	矢状頭頭示数		88.6	89.4	
31/28	矢状後頭示数			86.1	

表2. 島内地下式横穴墓群出土成人骨の  
額面頭蓋計測値 (mm) 及び示数

M No.	人骨番号	島内	島内
		128-1	128-2
40	額長		
45	頬弓幅		((130))
46	中顎幅		((102))
47	顎高		113
48	上顎高		66
51	眼窓側(左)		
	眼窓幅(右)		41
52	眼窓高(左)		
	眼窓高(右)		32
54	鼻幅		28
55	鼻高		48
H.	NIIII鼻高		49
43	上顎幅		
44	両眼窓間幅		
50	前眼窓間幅		18
F.	鼻根横弧長		23
57	鼻骨最小幅		10
60	上顎歯槽長		
61	上顎歯槽幅		
62	口蓋長		
63	口蓋幅		
47/45	Kolmann顎示数		((86.9))
47/46	Virchow顎示数		((110.8))
48/45	Kolmann上顎示数		((50.8))
48/46	Virchow上顎示数		((64.7))
52/51	眼窓示数(左)		
	眼窓示数(右)		78.0
54/55	鼻示数		58.3
10+45+47/3	顎面マスク		
61/60	上顎歯槽示数		
63/62	口蓋示数		
64/63	口蓋高示数		
40/5	顎示数		
50/44	眼窓間示数		
50/F.	鼻根溝曲示数		78.3
65	下顎関節突起幅		
65(1)	下顎筋突起幅		96
66	下顎角幅		
69	下顎高(左)	31	31
69(1)	下顎体高(左)	33	31
	下顎体高(右)	32	31
69(3)	下顎体厚(左)	12	13
	下顎体厚(右)	14	14
70a	下顎頭高(左)		
	下顎頭高(右)		
70	下顎枝高(左)		
	下顎枝高(右)		61
71	下顎枝幅(左)		
	下顎枝幅(右)		31
71a	最小下顎枝幅(左)		
	最小下顎枝幅(右)		31
68	下顎(体)長		
68(1)	下顎長		
79	下顎枝角(左)		
	下顎枝角(右)		
71/70	下顎枝示数(左)		
	下顎枝示数(右)		

表3. 島内地下式横穴墓群出土  
成人骨の顎面平坦度計測値  
(mm) 及び示数

人骨番号	島内	島内
	128-1	128-2
性 別	男性	女性
年 齢	熟年	壮年
前頭骨弦	98.6	
前頭骨左辺	52.9	
前頭骨右辺	52.1	
前頭骨垂線	18.0	
前頭骨平坦度示数	18.3	
鼻骨弦	9.9	
鼻骨左辺	5.8	
鼻骨右辺	5.5	
鼻骨垂線	2.7	
鼻骨平坦度示数	27.5	
頬上顎骨弦		
頬上顎骨左辺		
頬上顎骨右辺		
頬上顎骨垂線		
頬上顎骨平坦度示数		

表4. 島内地下式横穴墓群出土: 男性成人骨の頭蓋形態  
小変異の出現状況

人骨番号	島内		島内		島内		島内	
	性 別	年 齢	性 別	年 齢	性 別	年 齢	性 別	年 齢
	右	左	右	左	右	左	右	左
1 ラムダ小骨			-				+	
2 ラムダ縫合骨					+	+	+	
3 インカ骨							-	
4 横後頭縫合痕跡							-	-
5 アステリオン小骨			-				-	-
6 後頭乳突縫合骨			-				-	
7 頭頂切痕骨			-				-	-
8 頭頂孔								
9 冠状縫合骨								
10 前頭縫合残存			-		-		-	
11 眼窩上神經溝			-		-		-	
12 眼窩上孔	+	+	+	+	-	-	-	
13 前頭孔	-	-	-	-	-	-	-	
14 二分頸骨	-	-	-					
15 横頸骨縫合痕跡	-	-	-					
16 頬骨顎面孔欠如								
17 口蓋隆起			-	+			-	
18 内側口蓋管骨橋	-	-	-	-			-	-
19 外側口蓋管骨橋	-	-	-	-			-	-
20 齒槽口蓋管	-	-	-	-			-	-
21 頸管欠如								
22 後頭頸前結節	-	-	-	-			-	-
23 第3後頸顆			-				-	
24 後頭頸旁突起			-				-	
25 舌下神經管二分	-	-	-	-			-	-
26 頸靜脈孔二分								
27 偏側頸靜脈孔優位								
28 外耳道骨瘤	-	-	++	+			-	-
29 フュケル孔	-	-	-	-			-	-
30 ベサリウス孔	-	-	+	+			-	
31 脊円孔形成不全	-	-	-	-			-	
32 脊孔開裂	+	-	-	-			-	
33 翼棘孔	-	-	-				-	
34 床状突起間骨橋			-	-				
35 左側横濱溝優位							1	
36 鱗状縫合骨								
37 矢状縫合骨								
38 ブレグマ小骨								
39 後頭頸二分								
40 下頸隆起								
41 頸舌骨筋神經管								
42 副オトガイ孔	-	-	-	-				
43 下頸隆起	+	+	-	-				
44 頸舌骨筋神經管	-							
45 副下頸管								

表5. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の橈骨計測値(mm)及び示数

橈骨 M No.	人骨番号		島内	
	性別	年齢	128-1	熟年
1	最大長	左		
		右		
2	機能長	左		
		右		
3	最小周	左		
		右		
4	骨体横径	左	15	
		右		
5	骨体矢状径	左	10	
		右		
4a	骨体中央横径	左		
		右		
5a	骨体中央矢状径	左		
		右		
5(b)	骨体中央周	左		
		右		
3/2	長厚示数	左		
		右		
5/4	骨体断面示数	左	66.7	
		右		
5a/4a	中央断面示数	左		
		右		

表6. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の尺骨計測値(mm)及び示数

尺骨 M No.	人骨番号		島内	
	性別	年齢	128-1	熟年
1	最大長	左		
		右		
2	機能長	左		
		右		
3	最小周	左		
		右		
3'	中央周	左		
		右		
11	尺骨前後径	左		12
		右		
12	尺骨横径	左		16
		右		
11'	中央最小径	左		
		右		
12'	中央最大径	左		
		右		
3/2	長厚示数	左		
		右		
11/12	骨体断面示数	左		75.0
		右		
11'/12'	骨体断面示数	左		
		右		

表7. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の大腿骨計測値(mm)及び示数

大腿骨 M No.	人骨番号		島内	
	性別	年齢	128-1	島内
1	最大長	左		
		右		
2	自然位全長	左		
		右		
6	骨体中央矢状径	左	25	
		右	24	25
7	骨体中央横径	左	24	
		右	23	21
8	骨体中央周	左	78	
		右	75	78
9	骨体上横径	左		
		右		30
10	骨体上矢状径	左		
		右		20
8/2	長厚示数	左		
		右		
6/7	骨体中央断面示数	左	104.2	
		右	104.3	104.2
10/9	上骨体断面示数	左		
		右		66.7

表8. 島内地下式横穴墓群出土男性成人骨の脛骨計測値(mm)及び示数

脛骨 M No.	人骨番号		島内	
	性別	年齢	129-4	島内
1	全長	左		
		右		
1a	最大長	左		
		右		
8	中央最大径	左		
		右		26
9	中央横径	左		
		右		20
10	骨体周	左		
		右		73
8a	栄養孔位最大径	左		
		右		29
9a	栄養孔位横径	左		
		右		30
10a	栄養孔位周	左		
		右		81
10b	骨体最小周	左		
		右		82
9/8	中央断面示数	左		
		右		68
9a/8a	栄養孔位断面示数	左		
		右		76.9
10b/1	長厚示数	左		
		右		75.9
				76.7

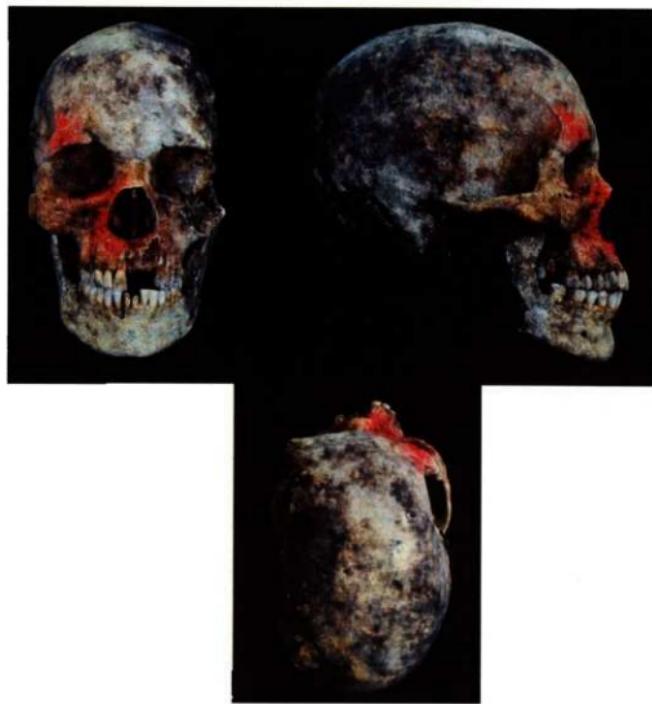


写真1 島内地下式横穴墓 128号墓 2号人骨（女性・壮年）正面観・右側面観・上面観



写真2 島内地下式横穴墓 129号墓  
3号人骨（男性・壮年後期）上面観



写真3 島内地下式横穴墓 129号墓  
4号人骨（男性・壮年）上面観

## 付篇2 島内地下式横穴墓より出土した遺物に付着する織維等について

東京国立博物館 江田 むつ代

### はじめに

今回、えびの市島内地下式横穴墓より出土した遺物に、織維等が付着しているものを数点調査させていただく機会を得たので、それらについて報告するものである。島内地下式横穴墓群からはこれまでに大量の遺物が出土しており、しかも、鉄製品には多くの場合、織維が付着する例が認められる。なかでも鉄刀と鉄剣などには把巻きや鞘巻きを確認できるものもある。考古の研究者にとっては、遺物に付着する織維よりもむしろ、遺物本体の研究が中心に行なわれていることが多い。しかし、把巻きや鞘巻きには数種類の仕様がみられ、それらを他の県から出土した同種の遺物に付着する例と比較することにより、宮崎県下特有のものか、他に類例があるかといった点を見極めることができる。筆者は以前、えびの市埋蔵文化財調査報告書 第29集『島内地下式横穴墓群』（えびの市教育委員会、2001年）において「出土遺物に付着した織維について」というタイトルで、短甲3点と鉄剣2点、鉄鏃数点について、それらに付着した織物等の種類と技法、短甲についてはワタガミ縫に使用された織物の素材や織りの組織、幅や付着状況などからワタガミ縫の装着方法を推定することができた。また、遺物を副葬するにあたって、遺物本体を露出したままでなく、織物がどのように関与しているかといった遺物の副葬仕様、さらには埋葬仕様についてもある程度推定することができた。その後、島内地下式横穴墓出土の遺物については報告書が2冊刊行<sup>1)</sup>されており、着々と発掘の成果が公刊されている。とりわけ龍文様を銀象嵌した大刀（ST-114）は出色に値する。

今回調査した遺物は以下のとおりである。これらに付着する織物等について説明するとともに、若干の私見を述べることにする。

1. 龍文銀象嵌大刀（ST - 114）
2. 鹿角製把装具付き剣（ST - 105）
3. 鹿角製把小刀（ST - 115）
4. 刀子（ST - 22）
5. 胡錆金具（10号墓）
6. 短甲（3号墓）

#### 1. 龍文銀象嵌大刀（ST - 114）

長 98.6cm、幅（木製鈎部分）6.0cm

刀身に龍文等を銀象嵌した大刀（図1）である。木製の把には特異な糸巻きを施してあるものの、把頭は風化により木質があらわれている。銀製の鞘口金具と刻みを入れた木製の鈎をもち（図2・

3)、刀身の両面には龍の表情が多少異なるものの力強い龍の文様(図4・5)を銀象嵌であらわしており、鞘尻は鹿角装となる<sup>2)</sup>。

大刀の把(柄)部には把木が遺っており、その上の把間には2種類の把巻き(図6)が施されている。一方は把木に接した面で、把の長軸に直交するように二本芯並列コイル状二重構造糸巻き<sup>3)</sup>(図7)〈糸の幅は0.13～0.14cm程度〉を隙間無く密に巻いている(貴金属寄り部分が比較的良く確認できる)。もう一方はその上にS撚りとZ撚りの撚りの異なる糸(ともに植物繊維と推測される)を揃えて1本(糸の幅は0.13～0.15cm程度)のようにして、把縁側と把頭側を往復するように60度前後の角度をつけて11回ほど巻き、間をあけながら端近くまで巻いたのち、今度は逆方向に同様にして巻き戻ったもの(図6参照)と推測される。巻き糸が交叉するところには菱形の巻き残りができる、そこからは前掲の二本芯並列コイル状二重構造糸巻き(図6矢印参照)がみえるが、遺存状況はあまり良くない。また、遺存している部分も保存処理のため、二本芯並列コイル状二重構造糸巻きにみられる特徴的な糸の表面(糸の表面には把木の長軸に対して平行に繊維の筋がみられる(図8)〈別の遺物に付着した糸巻きの例〉)を確認しにくい状況である。なお、この二本芯並列コイル状二重構造糸巻きを把間に施した例<sup>4)</sup>は、宮崎県下の地下式横穴墓より出土した鉄劍と鉄刀に多数みられ、さらに、北九州の福岡県、山陰の鳥取県、畿内では兵庫県と大阪府、関東では埼玉県と茨城県の各古墳から出土しており、かなり広域的に認められる仕様といえる。

はじめに巻いた下側の二本芯並列コイル状二重構造糸巻きは、把木の緊縛とともに、その上に撚りの異なる糸を2本揃えて角度をつけて巻くために巻き糸がずれないよう施された、いわゆる下地用を兼ねたものと推測される。なお、上に巻いた撚り糸とその下の二本芯並列コイル状二重構造糸巻きにはごく一部に朱が確認できることから、巻いたのち朱を塗布したものであろう。また、把頭は風化のため木質があらわれているので、どこまで糸巻きを施したか現状では確認できない。いずれにしても、上に巻いた櫛状の糸巻きは滑り止め防止の効果と共に、後掲の経僧塚古墳出土の銀装主頭大刀などと比べ、装饰性も加味されていることがうかがわれる。

把間を斜めに櫛状に巻く仕様は、熊本県・天水塚古墳をはじめ、京都府綾部市・丹波荒神塚古墳、大阪府羽曳野市・峯ヶ塚古墳<sup>5)</sup>などにみられる。さらに、奈良県斑鳩市・藤ノ木古墳の大刀(大刀3)にも同様な仕様<sup>6)</sup>が認められる。

また、S撚りとZ撚りの異なる撚糸を1本のようにして巻いた例(図9)は、関東では千葉県山武市成東町の経僧塚古墳出土の銀装主頭大刀にみられるが、この大刀では単に、把木の長軸に対してほぼ垂直に1回巻いただけで、上から漆を塗布<sup>7)</sup>している。

なお、報告書<sup>8)</sup>によるとこの龍文銀象嵌大刀には、X線撮影によると両面の刀身部に龍と日輪が施されていると記述されている。

ところで、龍文と連弧輪文を刀身にあらわした例は、奈良県橿原市・新沢327号墳より出土した「龍文銀象嵌大刀」<sup>9)</sup>にみられる。また、鞘口金具に龍文を銀象嵌した例は三重県・井田川茶臼山古墳出土の「龍文銀象嵌抜環頭大刀」<sup>10)</sup>がある。島内出土の龍文銀象嵌大刀に施された龍の文様は、

新沢 327 号墳より出土した龍文銀象嵌大刀に近い表現である。両者とも龍の面部においては、口の部分等の表現が曖昧なところがみられる。

## 2. 鹿角製把装具付き剣 (ST - 105)

長 66.4cm、幅 9.9cm

鹿角製把装具付きの剣 (図 10) で、把木の上の把間 (図 11・12) には、1 の龍文銀象嵌大刀同様、二本芯並列コイル状二重構造糸巻き (図 13・14) を密に巻いているが、多くが圧痕となるなかで一部、この糸巻きの特徴的な仕様である、把の長軸に対してほぼ平行に繊維の筋がみえる (図 15)。糸幅は 0.2cm 弱で、1 cm に 5 本前後となり、1 本の幅が比較的広く、同種の例が宮崎県下では切畠地下式横穴 2 号墓出土の「鉄劍」をはじめ、兵庫県の向山 5 号墳出土の「鉄刀」や同県市条寺 1 号墳出土の「鹿角装鉄劍」などに同様な仕様で、しかも糸の幅がほぼ同じものが認められる<sup>11)</sup>。なお、拡大してみると、断面の一部が空洞になっているところがあることから、芯の糸が欠失してしまったものと推測される。さらに、ST-83 号出土の「鉄劍」にも、同種の仕様になる糸巻き<sup>12)</sup>がみられる。

鞘部は木質のみで、繊維の痕跡は認められなかった。

## 3. 鹿角製把小刀 (ST - 115)

長 39.5cm、幅 3.8cm

鹿角製把付きの小刀 (図 16) である。鹿角製の把部には直弧文と鱗状の刻み (図 17) があり、朱が塗布されている。

切先近くに麻布の小片 (図 18) が斜めに付着するが、当初からこの小刀に付着していたものか、別のものが付着したのか、現状からでは判断できない。一部に若干ごく甘い Z 摺りと S 摺りのような摺り (図 19) がみられるが、保存処理のため判然としない。

## 4. 刀子 (ST - 22)

長 22.9cm、幅 2.8cm

本製の把頭をやや湾曲させた刀子 (図 20) である。握部には樹皮を少しずつすらしながら重ねて丁寧に巻いている (図 21)。巻き方については、表に出ている部分が 0.2 ~ 0.4cm 程度で、ばらつきがみられる。

樹皮巻きは鉄刀と鉄剣の把巻きや鞘巻きにも多少用いられている<sup>13)</sup>。把巻きの例として、宮崎県下では、旭台地下式横穴墓 (4 号玄室) より出土した「鉄刀」にみられる。また、鞘巻きとして使われた例も数点ある。同県国富町川上地下式横穴墓より出土した「鉄刀」には、0.2cm の紐巻きの上を樹皮で巻いており、樹皮の幅は 0.6 ~ 0.7cm 程度。同県小木原 2002 号地下式横穴墓出土の「鉄剣」には、表面にあらわれている樹皮の幅が 0.5 ~ 0.7cm 程度で、1 枚の樹皮の幅は 1.0cm 前後と推測される。いずれにしても、表面にあらわれている樹皮の幅は 0.2 ~ 0.4cm と広狭がみられる。

樹皮巻きはしばしば鉄錆の矢柄の基部<sup>14)</sup>にもみられ、鉄錆を矢柄に差し込んだのち樹皮で固定している。

### 5. 胡錆金具（10号墓）6点

鉄板に金銅板を被せ、周りを裏側へわずかに折り返した鉄地金銅貼りの胡錆金具6点（図22・23）である。

吊手飾金具2枚（図24・25） 各長さ14.8cm、幅2.4cm。帶状金具3枚 ①長さ6.0cm、幅1.5cm、②長さ5.0cm、幅1.2cm、③長さ3.0、幅1.3cm。勾玉飾金具1枚 4.0×2.3cm

吊手飾金具は2枚とも中円板部と帶状部が続いた1枚造りで、長さ幅ともほぼ同じである。2枚とも表の周縁には平行線文と波状列点文をあらわしているものの、鋸で判然としない部分が多い。帶状部の上方は直線で、下方は端部を丸みを帯びた隅丸にする。鋸は帶状部の上方と下方左右に各1個、中央に1個の計5個、下方の隅丸帶状部には上方の左右に各1個、中央と下端の中央に各1個の計4個が打たれている。

吊手飾金具のうち、一方の隅丸帶状部の表面と裏面には、長軸に対してほぼ垂直と斜め方向に植物織維（図26・27）のようなものが遺っているが、織物ではなく用途は不明。2枚の吊手飾金具の裏面には、いずれも皮革（図28・29）が部分的に遺っている。なお、金具裏面と皮革の間には1層別な有機質（図30）が確認されるが、織物かどうか現状では判断がつかない。

一方、他県の古墳出土例であるが、吊手飾金具（図31）の裏面には、しばしば筋目の平綱や平綱といった織物が付着し、織物の両側には強い撚り糸による縁かがり（図32）が付けられている例がみられる<sup>15)</sup>。この縁かがりが金具の両側からみえる（図33）装飾的な仕様になっている場合がある。なお、異なる色糸を使えば一層、華やかさも高まったであろう。島内の吊手飾金具には、こうした仕様は確認できなかったが、金具と皮革の間には鋸で固まっているものの、前掲のごとく1層分の有機質が挟まっている。おそらく織物であったであろう。また、2枚の金具とも一方の側に金具からはみ出した部分がみられることも、この1層分の存在をあらわしているものと推察される。

帶状金具（図34）は、鋸等が付着しており、吊手飾金具にみられるような波状列点文は確認できない。①はやや彎曲しており、鋸が両側と中央に各1個、計3個が打たれている。②は鋸が2個、③は1個遺っている。3枚の帶状金具とも、金具の裏には前掲の吊手飾金具同様、皮革（図35）が付着している。

勾玉形飾金具（図36）には中央に鋸が1個打たれており、金具裏面の一部には吊手飾金具と帶状金具同様、皮革（図37）が遺っている。

以上の諸点を勘案すると、胡錆本体は皮革製で、吊手も皮革が用いられていたことが推定できる。なお、金具裏面には素材と組織は不明であるが、1層分の織物と推測されるものが確認されたことから、金具は皮革に直接留めるのではなく織物に固定したうえで皮革に留めていたことになるであ

ろう。

## 6. 短甲（3号墓）

高 41.6cm、幅 43.6cm

この短甲は、鉄製の三角板銅留短甲（図 38）で、上部覆輪には皮革（図 39）が用いられており、同じく皮革の紐で縫じ付けている。本体の遺存状況はほぼ良好である。

左右の前胴外側には、ワタガミ受緒の平綱（図 39 参照）が部分的に付着している。左側前胴には、前の合わせ目板の角に、平綱が 70 度の角度で引っかかるように付着しており、さらに、やや下がったところにもほぼ同じ角度で平綱が付着している。また、豎上 1 段目から 2 段目にかけて平綱が現状では 3 層確認できる。いずれの平綱とも経糸方向の角度は相違がみられ、一番下層（短甲に接した面、①）は、合わせ目に近い方が角度約 130 度、その上には多少縫糸の打ち込みが粗い平綱（②）が角度 160 度弱、その上に乗っている平綱（③）が角度 100 度強程度で付着している。なお、一番下層（短甲表面に接した面）の平綱が比較的広範囲に遺っている（約 6.5cm 前後）。脇に近い方がほぼ 100 度強の値を示す。

これら 3 層の平綱（図 40）であるが、保存処理が施されているため判然としないものの、経糸はごく緩い S 織りがかかっているように見えるが、緯糸は経糸が密なため、ほとんど緯糸に覆われており、現状からでは糸の撚りは確認できない。平綱の織り密度は①と③が 1cm 間に経糸 40 本前後、緯糸 18 本前後、②はわずかしか遺っていないので、おおよその値であるが、経糸が 35 ~ 40 本程度（経糸の太さにばらつきがみられる）、緯糸が 15 ~ 17 本位である。平綱が 3 層重なっているということは、後述する短甲のワタガミ緒の例からして、もとは 4 層、すなわち、帯紐（1 条分の紐は 1 枚の裂の長辺を二つ折りにし、片側を縫い合わせて帯状に仕立てられていたものと推測される）のワタガミ受緒が 2 本あったことを示唆するものである。

一方、右側前胴であるが、豎上 2 段目に重なった状態のワタガミ受緒（図 41）の付着が認められるが、左側前胴同様の平綱と思われるものの、固まっており糸込みなどは確認できない。おそらく左側前胴のワタガミ受緒と同様、2 本の帯紐によるワタガミ受緒があったものと推測される。

ところで、鳥内地下式横穴墓より出土した短甲 3 点（21 号墓出土、62 号墓出土、81 号墓出土）にはワタガミ緒が比較的良好に遺っているものがあった<sup>16)</sup>。これらの短甲に遺存するワタガミ緒と比較することにより、今回の 3 号墓のワタガミ緒の状況をある程度推測できるのではないか。

21 号墓出土をはじめとする上記 3 点の短甲であるが、すべて鉄製の横板を銅止めした横矧板銅留短甲で、21 号墓出土のものがワタガミ受緒と懸緒の装着状況と使用された平綱がよく遺っている。それによると、前胴外側には幅 3 ~ 4 cm 程度の帯紐を 2 条、後胴には幅 5 cm 程度の帯紐 2 条を用いていたことが確認できた。これらの平綱の帯紐であるが、前胴と後胴に穿たれた孔を通して装着された撚り紐などによる紐か、皮革の細紐の間を通して固定したものと推定した。3 点の短甲に装着されていた帯紐の平綱の織り密度であるが、1cm 間に経糸は 20 ~ 24 本前後、緯糸は 14 ~ 18 本

を数える。古墳時代の平綱の織り密度は、細かいもので経糸が50本前後、緯糸が30～40本程度の経地合<sup>17)</sup>の平綱がみられることから、平綱としてはあまり細かいものとは言えない。

一方、3号墓出土の短甲の前胴に付着したワタガミ受緒も、平綱が3層確認できることから、前述のごとく、もとは帯紐が2条あったことが推定された。このワタガミ受緒の平綱の織り密度をみると、1cm間に経糸が40本前後とかなり細かいが、緯糸は18本前後とやや粗く、経地合の様相を呈する。上記3点の短甲のものと比べると良質な平綱が使われていることがうかがわれる。

## まとめ

以上、龍文銀象嵌大刀、鹿角製把装具付き剣、鹿角製把小刀、刀子、胡錠金具、短甲の6件について、それぞれに付着した纖維についてみてきた。龍文銀象嵌大刀については、把巻きに木質の把木の上をあらかじめ二本芯並列コイル状二重構造糸巻きによって下地を兼ねた糸巻きを行ない、さらに、その上に植物纖維と推測されるS撚りとZ撚りの撚り糸を揃えて1本のようにし、60度前後の角度をつけて一定幅を巻き、間をあけながらまた、巻き戻ってくる手法を行なっている。こうすることにより、巻き糸が交叉するところには菱形の巻き残りができる、そこからは下地用として巻いた二本芯並列コイル状二重構造糸巻きがみえるという、手の込んだ手法をとっている。それといふのも、把木の上に糸巻きをする場合、角度をつけて巻く場合、どうしてもそれが生じやすいため、下地用の糸巻きが必要になってくる。この下地用として滑りにくい二本芯並列コイル状二重構造糸巻きが使われた。この二本芯並列コイル状二重構造糸巻きは、宮崎県下はもとより北九州、山陰、畿内、さらには関東地方といった各所で用いられていた手法である。さらに、龍文銀象嵌大刀では、上にS撚りとZ撚りの撚りの異なる糸どうしを1本に糸のようにして装飾を意識した巻き方をしている。片方の撚り糸で巻く場合は、糸が伸びがちになるが、撚りの異なる糸を合わせることによりこの伸びが相殺され、結果的にはきっちりとした緩みのないものとなるであろう。实用と装飾を兼ね備えた手法といえる。

鹿角製把装具付き剣においても、この二本芯並列コイル状二重構造糸巻きが使われている。この糸巻きは、撚り糸より幅があり、しかも二重構造になっているため、糸自体もしっかりしており、把木を緊縛するうえでも有用であったと推察される。したがって前掲のように各所で使用されたことも頷ける。

胡錠は、本体と吊手に皮革が用いられていたことを推定できたが、吊手飾金具の裏面に当てられていたであろう織物を確認することができなかった。

また、短甲においては、過去に調査した21号墓、62号墓、81号墓より出土した短甲に、ワタガミ懸緒と受緒が比較的良好に遺存していたので、これらを総合して検討した結果、装着状況を推定することができた。今回の3号墓出土の短甲は、経年により本体表面に付着する帯紐が崩れた状態で付着し、もとの状況を把握することができなかったが、ワタガミの帯紐に使われていた平綱が上記3点のものより織り密度の細かい平綱が用いられていたことがわかった。

## 注

1. ①えびの市埋蔵文化財調査報告書 第49集『島内地下式横穴墓群Ⅱ』宮崎県えびの市教育委員会、2010年。  
②えびの市埋蔵文化財調査報告書 第50集『島内地下式横穴墓群Ⅲ 岡元遺跡』宮崎県えびの市教育委員会、2009年。
2. 注1②報告書16~17頁、64~65頁参照。
3. 二本芯並列コイル状二重構造糸巻きとは、絹糸を束ねたものを2本並べて芯とし、この周りに外巻き用の繊維（植物繊維）を内側ではたすきをかけるように巻き、さらに全体にまわしてコイル状に固定することから、二本芯並列コイル状二重構造糸巻きと呼んだ。したがって外側の外観は、植物繊維が芯糸に直交することから、この糸で巻いた表面は繊維が把木の長軸に対して並行した状態にみえる（「沢田むつ代『古墳出土の鉄刀・鉄剣の柄巻きと鞘巻き—職物などの種類と仕様—』」（『MUSEUM』617号、東京国立博物館、2008年）。6頁参照）。
4. 各県の古墳出土例の詳細は注3 沢田論文6~9頁、表31~35頁参照。
5. 文化庁・豊島直博氏のご教示による。

峯ヶ塚古墳の大刀3であるが、把間の仕様は島内の龍文銀象嵌大刀(ST-114)と類似するが、巻き糸の回数は異なる。しかし、峯ヶ塚古墳の大刀は「鞘全体に平織の布が巻かれ、帶金具付近では更に、綾織の布を厚く重ねて巻いている」とあり、さらに平織の上に「撚り糸で菱形の模様を刺繍しているかのようである」と報告されている（「史跡古市古墳群・峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書」羽曳野市教育委員会、2002年）。
6. 大阪府立近つ飛鳥博物館図録「金の大刀と銀の大刀 古墳・飛鳥の貴人と階層」大阪府立近つ飛鳥博物館編、1996年。76頁参照。
- 前園実知雄「斑鳩に眠る二人の貴公子・藤ノ木古墳」新泉社、2006年。67頁参照。
7. 沢田むつ代「経僧塚古墳出土の職物等について」（「武射 経僧塚古墳 石棺篇 報告」早稲田大学 経済考古墳発掘調査団、2010年）180頁参照。
8. 注1②報告書12~18頁参照。
9. 注6図録42頁、図版No.42参照。
10. 注6図録26頁、図版No.17参照。
11. 注3 沢田論文6~9頁、表32~35頁参照。
12. えびの市埋蔵文化財調査報告書 第29集『島内地下式横穴墓群』宮崎県えびの市教育委員会、2001年。図版121、No.906参照。
13. 注3 沢田論文13~14頁、表27頁参照。
14. 沢田むつ代「出土遺物に付着した繊維について」注12報告書206頁、図版5（図27・28）参照。
15. 沢田むつ代「出土繊維の記録法」（「季刊考古学」第91号、雄山閣、2005年）参照。
- 同上「井出二子山古墳出土の職物」（「史跡保波田古墳群 井出二子山古墳 史跡整備事業報告書」高崎市教育委員会、2009年）参照。
- 守前直人「長岡京における後期古墳の調査」出土遺物（2）武具（I井ノ内稱荷塚古墳の研究） 大阪大学

稲荷塚古墳発掘調査団、2005年）参照。

16. 沢田むつ代「出土遺物に付着した繊維について」（えびの市埋蔵文化財調査報告書 第29集『島内地下式横穴墓群』宮崎県えびの市教育委員会、2001年）201～205頁、図版頁1～4頁参照。
17. 經地合いとは、一定の範囲内で経糸が緯糸より多く、経糸が密になっている状態。

#### 謝辞

遺物の調査については文化庁美術学芸課考古資料部門・豊島直博氏に御世話になりました。記して感謝申しあげます。また、遺物の撮影では一部を除いて、日本学術振興会特別研究員・三田覺之氏による。お礼申し上げます。



図1 龍文銀象嵌大刀（ST-114）全体



図2 木製の鈔と把部



図3 同（反対面）



図4 銀象嵌の龍文様



図5 同（反対面）



図6 2種類の把巻き



図7 二本芯並列コイル状二重構造糸巻き



図8 二本芯並列コイル状二重構造糸巻きの表面 (ST-1)



図9 燃りの異なる糸を揃えて巻いた  
把巻き (千葉県山武市・経僧塚古墳出土、  
銀装圭頭大刀)



図10 鹿角製把装具付き剣（ST-105）全体



図11 同（把部）



図12 同（把部・反対面）



図13 二本芯並列コイル状二重構造  
糸巻き



図14 同（反対面）



図15 同（部分拡大）



図16 鹿角製把小刀（ST-115）全体



図17 同（鹿角製把部）



図18 切先近くに付着する麻布



図19 麻布（部分拡大）



図20 刀子（ST-22）全体



図21 把部の樹皮巻き



図22 胡鎌金具（10号墓）  
表面



図23 同（裏面）



図24 図25  
吊手飾金具（表面）



図26 表面に付着する  
植物繊維



図27 裏面に付着する  
植物繊維



図28 図29  
吊手飾金具（裏面）



図30 金具と皮革  
に挟まれた有機質  
(円囲い部分)



図31 吊手飾金具  
(富山県氷見市・  
朝日長山古墳出土)



図34 帯状金具（表面）



図35 帯状金具（裏面）



図32 裏面からみた  
縁かがり  
(同古墳出土)



図33 金具の両側からみえる  
縁かがり（同古墳出土）



図36 勾玉形飾金具（表面）



図37 同（裏面）



図38 短甲（島内3号墓）全体

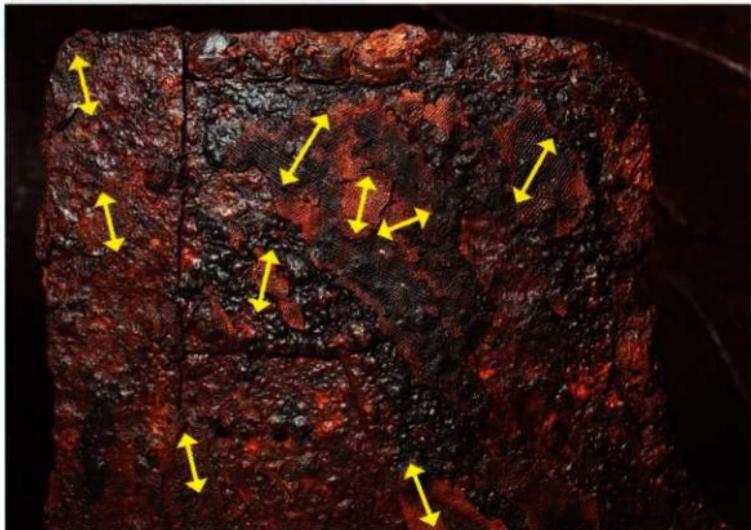


図39 左側前胴（覆輪とワタガミ受緒の平綱） 矢印は経糸方向を示す



図40 ワタガミ受緒の平絹（拡大）



図41 右側前脇（ワタガミ受緒の平絹）

# 報 告 書 抄 錄

ふりがな	しまうちちかしきよこあなばぐん					
書 名	島内地下式横穴墓群IV					
副 書 名	埋蔵文化財発掘調査報告書					
卷 次						
シリーズ名	えびの市埋蔵文化財調査報告書					
シリーズ番号	第53集					
編 著 者 名	大西智和・安橋祐樹・鎌ヶ江賢二・竹中正巳・沢田むつ代・中野和浩					
編 集 機 関	えびの市教育委員会					
所 在 地	宮崎県えびの市大字大明司 2146-2					
発 行 年 月 日	2012年3月23日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		調査期間	調査面積	調査原因
		市 町村	遺跡 番号			
しまうち 島内地下式 横穴墓群	こまうち えびの市大字島内字 ひらまつ・ひらのはら 平松・杉ノ原	9	1001	1998.04.02 1998.04.18 1998.07.14 1998.08.10 2010.08.26 2010.08.31 2011.03.16 2011.03.23 2011.07.21 2011.07.26	300m <sup>2</sup>	学術調査 ・陥没
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
島内地下式 横穴墓群	古 墳	古 墳	地下式横穴墓	鉄 刀・劍 短 甲・冑 鐵 鐵 胡鍾金具 刀 子 ゴホウラ製貝釧	胡鍾金具は県内で 3例。うち2例が 本遺跡である。	

えびの市埋蔵文化財調査報告書 第53集

島内地下式横穴墓群IV

鹿児島大学学術調査第2次・3次、128～130号墓発掘調査報告書

平成24年3月

編集・発行 えびの市教育委員会

えびの市大字大明寺 2146-2

印 刷 有限会社 大口新生社印刷

鹿児島県伊佐市大口大田 2319-1

